

---

# 神人セルの放浪記

鷺里 しきみ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

神人セルの放浪記

### 【Nコード】

N7443T

### 【作者名】

鷺里 しきみ

### 【あらすじ】

あまりにも強く生まれすぎた俺は、やがて神々にさえ恐れられ、生まれた世界 神界を追放された。逆らうのもめんどくさいから、とその神界を簡単に出て行き、数年。魔界、天界と色々な世界を放浪し、やがて、人間界へと辿り着いた。そしてその人間界で、俺は二人の姉妹と出会ったのだ。俺とは正反対であるこの二人が、俺の中の人間に対する価値観を変えていく。

最強であり、めんどくさがり屋の男が人間界を放浪する、心温まる  
(?) ハートフルストーリー！。

この小説は何処かのラノベ新人賞に投稿するつもりです。誤  
字脱字、矛盾点などありましたら、ご指摘頂けると嬉しい限りです。

この小説は(できるだけ)毎日午後十時〜十二時の間に投稿  
する予定です。

## プロローグ 神人（テオール）

「あー。……暇だ」

ベンチで一人淋しく座り、俺はそんなことを呟く。

めんどくさい、よりかは暇の方が幾分かましなのだが、暇すぎるのもそれはそれで辛いものがあった。

「あー。……マジで暇だ」

俺はあまりにも暇なので、ベンチの背もたれに肩をかけ、特に理由も無く空を見上げてみる。天気は俺の心を映し出しているかのよう  
に黒雲が並んでおり、今にも雨が降り出しそうであった。そんな鬱々とした天気を見て俺はますます倦怠感に襲われ、一つ大きな欠伸をする。

その 刹那。

欠伸のために豪快に開けた口。そこから、押さえつけていた魔力が暴発。

暗雲の立ちこめる夜空に向けて、俺は無意識的に白光波レウスを発射させてしまったのだ。

超高速で放たれたその光線は夜空で弾け 巨大な光を伴う。そして瞬く間に、目も開けられないほどの光が町全体を覆った。

さらにあるうことが、空高くで弾けた白光波レウスの破壊力に黒雲は押し  
しのけられ、跡形もなく消え去ってしまったのだった。

天気は一転して、快晴に変わった、ということである。

俺のせいだ。

いや 天気がよくなり、優美な星空が顔を出したのだから、俺のおかげで、なのかもしれない。

「…………マジかよ。…………俺、すげえのな」

超人級の出来事を簡単にやってのけ、なおかつ呑気なこの青年こそ  
テイル 神人である。

## 人間には良い人間と悪い人間がいる

不用意に口から高威力魔法を出してしまった俺は、周りから奇異と驚きの目で見られてしまう。目立つのはあまり好きではないし、視線を浴びて感じる性癖も無い。

俺はその場を退散することにした。

町の中心にある中央広場を出て、いくつかに分岐する街路へと出る。

「へえ」

暇だなあと呟きながらベンチに座り続けてから、もうどれだけの時間が経ったのか。

時刻は夜になっている。

それなのにここらの賑わいときたら、すごいな。

あるおじさんは客寄せのために声を張り上げ、その隣の店の少女は、対抗するように絵の描かれたちらしを配る。さらに幅広い大通りの街路は、反対側が見えないほどに人が混雑し、市場は喧騒に包まれていた。

夜だというのに店のランプが自己主張をするように明るく、暗さなど微塵も感じない。その明るさに釣られているのか、行き交う人々はほとんどが誰かと会話をし、笑顔であった。

ホント、人間という種族はなんとも面白いものである。

俺が『人間には良い人間と悪い人間がいる』、という知識を持って人間界に来てから丸一日経つが、やはり人間には驚かされることが多かった。

まず、物を買う、なんて感覚がおかしいんだよな。

『神人育成学校』を追放されてから、魔界にも天界にも住んでみたが、魔界では『買う』ではなくて、『奪う』だったし、天界では『分け合う』だった。

『奪う』のは得意だったから魔界ではかなり楽に暮らせたのだが、なんというか、あそこは全く俺には合わなかったのを覚えている。

下剋上が一般的なのか下級魔族のくせに俺に挑んでくることもあるぐらいだったし、何かとめんどくさいことが多いのである。

それで住む世界を変えて天界にも行ってみたが、あそこはもっと駄目だった。

平等平等平等。うるせえよ、って感じた。

自由があまり与えられないところが『神人育成学校』に似ていて、すぐに抜け出してしまった。

それでその次に来てみたのがここ人間界なわけだが、今のところ、ここが一番いいかもしれない。

人間という種族はいまいち良く分からないが、雰囲気は結構気に入っている。

ある程度自由だし、何が楽しいのかみんな明るいし。何より、こ  
こは楽で、めんどくさいことが少ないのだった。

そんなことを思いながら人混みを掻き分け、足を進めていると、  
俺はとある店を見つけた。

「お」

LV5の薬屋。

ここ人間界では、店ごとに『レベル』というものがあるらしく、  
このレベルが高いほど高品質で、信頼性が高いのだという。レベル  
を上げるためには全世界規模の試験を受けなければならぬから、  
レベル5となるとかなりすごいと訊いた。

実際さつきから見かけている、武器屋、酒屋などは、ほとんどL  
V1、2ばかりだったから、珍しいのだろう。

ちよつと、入ってみるか。と、

特に脈絡もなくそう思うと、俺は薬屋の前で立ち止まり、その扉  
を開けた。

すると開けた瞬間、なにやら怒鳴り声が聞こえてくる。

「早くしろクソがつっ！ 殺されてえのかッツ！」

なんだか、取り込み中らしい。

だがそんなことで遠慮する俺ではないので、気にはしない。



いくつもの棚が置かれ、品揃えの良さそうな店内に足を踏み入れる。

「ちっ」

その直後、誰かに舌打ちをされた。

「おいお前らッ！ 誰も入って来ねえように結界張つといたんじやねえのかよッ！」

「あれえ？ 張つたと思つたんですけどねえ……」

確かに結界は張られていたが、俺にとっては微弱すぎてなんの抵抗にもならなかったらしい。

「まあいい！ こいつも人質にしとけッ！」

顔全体を布で隠し、武器を持つリーダー的存在が、同じような格好をしている奴らに言った。それに反応した数人の人間が俺に近づいてくる。

なんだ？ こいつらは。

絡まれるのも面倒なので、超高位魔法空間転移によってその人間たちの背後にワープし、売り物を探し始める。特に欲しいものはないのだが、少し興味があつた。

「！？」

人間たちはみな驚愕の表情で顔を一杯にしながらも、急に消えた俺を捜し当て、もう一度迫り寄って来る。そんな人間たちを無視し、

品物を一つ手に取った。

だが、人間の使う道具に関しての知識はまだ浅い。

どれがどのぐらいすごいのだが、まったく分からなかった。

そうだな。店員さんにおすすめを聞いてみるか。

思いながら空間転移をし、今度はカウンターの前にワープした。

「あー。この店で一番良い物って、なんだ？」

そう店員である女の子に訊いてみるが、その女の子は応えてくれない。

目の前に現れた俺にビビっているのか。

それとも。

顔を布で隠した人間に、剣を突き付けられているからなのか。

分からないが、とりあえず後者という可能性は消すため、俺は剣を持った人間の頭を軽く小突く。

すると、頭蓋骨が陥没したようなすごい音と共に、その人間は吹き飛んでしまった。

「……………あー……………やべー」

軽く殴ったつもりなのだが、人間には強すぎたらしい。  
死んでなきやいいが……………。

まあ、いいか。あいつ悪い奴っぽいしな。

「んで、店員さん。ここの店で一番良い物って何だ？」

俺はもう一度そう聞いてみるが、店員さんは可愛い顔で小さな口をぱくぱくさせていた。

そしてそうしているのはこの店員さんだけではなく、店内に居る誰もが同じだった（顔を布で隠してる奴らの口は見えないが）。

気は短い方ではないので店員さんが応えてくれるのを待っていると、放心状態だった店員さんはようやく意識を持ち直し、俺の問いに応えようとしてくれる。

「えええっと。そそのの！ ヒュプスーポーションが当店のお勧めですっっ！」

胸の前でかわいらしく手を握り、やっとのことで店員さんは言い切る。

「じゃあ店員さん。それで」

「は、はい。えええっと。で、では、会計は。えっと。えっと。に、二万二千ドラになりますっっっ！」

二万二千ドラ？

……良く分からんが、『ドラ』ってのがおそらくここの通貨なんだろう。

それにしても、二万二千ドラ、って。どんぐらいだ？

思いつつ、さっき広場で拾った硬貨を探すため、俺はポケットをまさぐる。

「これか」

丸い銀色をした金属が、一枚。

「これで、足りるか？」

店員さんにその銀貨を手渡す。

震えた手でそれを受け取ると、店員さんは銀貨の表面を見て言った。

「え、えっと。これは……い、1ドラに、なります」

1ドラ、か。

確かこのポジションは二万二千ドラ。

………大分、絶望的だな。

「そう、か。……人間界、甘く見てたな」

足りないなら仕方がない。

奪い取ってしまうことなど一食分の栄養を取ることよりも簡単なのだが、『買う』ということが人間界のルールらしい。

俺はそれに従い、出直すことにした。

「あー、店員さん。ドラド足りないみたいだし、止めとく。……悪い。騒がせたな」

俺は頭をぼりぼりと掻きながらそう言い、身を翻す。

そして、「は、ハイですっ」という店員さんの声を聞き、出口へと直行することにした。

が。

「ちょ、ちょっと待ててめえッッ！」

と、またも突っかかって来る人間たち。

「あー、めんどくせえな。お前ら。俺に何の用だよ」

「何のようじゃねえっ！ てめえさつきから俺らを無視しやがってッ！ しかも仲間一人ぶっ飛ばしただろ！？ 何普通に買い物しようとしてんだよっ！？」

俺に敵意むき出しの人間たちは、五人ほどで俺を囲み、剣や魔法杖などを突き付けてくる。

こんなもの、俺に効くとも思っているのだろうか。こいつらが本気で攻撃してこようと、目覚ましにすらならないというのに。

思いつつ、どうやってこいつらを潰そうか考え始めた、そのとき。

「きゃあああっ！？」

そう女の子の悲鳴が聞こえてきた。

さつきまで俺と話していた店員さんである。

布で顔を隠している奴らの一人が、もう一度店員さんに剣を付き

つけていたのだった。そして店員さんに向かって、「おいお前ッ！早くドラを出せっ！」と怒鳴りつけている。

「……あー」

『奪う』ということをしようとしないう人間には感心していたのに、あんな力を持たない少女にまで危害を加えようとするとは……。

『人間には良い人間と悪い人間がいる』

こいつらは、悪い人間、ってことか。

だがまあ、人間は人間。俺は俺、だ。

店員の女の子には同情するが、特に助ける義理も無い。ただめんどくさいだけだろう。

俺はさっさと退散することを決め込む。

「おいお前ら。………そう、どけ」

少しだけ怒気を込め、出口を塞ぐ人間に向けて言う。

「ど、どけじゃねえぞてめえ！」

だが、逆に近づいてくる人間たち。

まだ俺に突っかかってくるのかよ……。

敵の強さを見極めるといふ能力も生きていくうえでは大事なものなのだが。

愚かだな、こいつらは。

今度は少しだけ殺気を解放し、低く冷淡な声で 告げた。

「……どけ」

と。

それだけ。

それだけで、俺が殺気を向けた人間たちは全身を痙攣させ、失禁する。

心よりも先に、体が恐怖を感じ取ったのだろう。

しばらく痙攣し続けると、全員が白目をむき、気を失った。

「……………」

俺はそんな人間たちを無言で跨ぐと、そのままこの店から出ることにした。

店内に入る前よりも心が冷めてしまったが、まあ、気にはならない。  
い。

些細な変化だ。すぐにそんなことは忘れるだろう。

俺は何か面白そうなものを探すために、暇を潰すために、もう一度歩き始めることにした、が、

「あ、あの！」

と、背後から声。

人々の喧騒の中その声はもみ消されそうになるが、聴力が異常に発達している俺はその声を零すことなく聞きとる。

さらに、俺には360度死角がないので、すぐに誰が声を発したのかも分かった。

さっき少しでも話した、店員さんである。

……何の用だろうか？

思いつつ、俺は振り返った。

「……あー。なんか、用か？」

「あの、えと。……その。た、助けてくれて、  
ありがとうございました！」

ありがとうござい

助けてくれて？

「あー」

別に、助けたつもりはなかったのだが……。

そうか、結果的にこの子は店の『ドラ』を奪われないで済んだのか。

「そ、それで、その。お礼がしたくてっ。こ、これ、どうぞっ！」

店員さんはそう言って、何かを手渡してくる。

小さな瓶。商品名は、ヒュプスーポーションだった。

先ほどドラが足りずに買えなかった物である。



「……いいのか？」

「は、はいっ」

「……そうか」

呟き、俺は店員さんが差しだしてくる瓶を受け取った。わざわざ、遠慮する必要もないだろう。

「え、えと。ホントに、ホントにありがとございましたっ。で、ではっ」

俺が瓶を受け取ったのを確認すると、店員さんはぺこりとお辞儀をし、早足でそのまま店内へと戻って行く。

そんな姿を眺めながら、俺は思った。

やはり人間は、面白い、と。

奪おうとする奴もいれば、与えようとする奴もいるのか、と。

「……なるほど」

なんとなく、分かったような気がする。

俺が持つ人間についての予備知識。

『人間には良い人間と悪い人間がいる』

姉『妹』？

LV5の薬屋を出てから、しばらくの時が立つ。

だが、ドラがドラしかないという現状では出来ることは限られていた。

いろいろと面白そうな店に入ってみるものの、未だ何も得ていない。

まあ、人間という種族が分かってきたってだけで、十分な収穫な  
んだが。

やはり、何処か物足りない。

一年ぐらい絶食していても大丈夫な俺でも、旨そうな匂いがすれば腹が減るし。

自分の皮膚よりも遥かに脆い剣を手に入れたとしても、そのカツコよさに興奮は出来る。

「ドラ、か」

それがたくさんあれば欲しいものを全部買えるし、したいことができる。  
そうだな。

これからしばらくこの人間界で暮らしてくつもりなら、必要不可欠になることは間違いないだろう。

「……あー、そうだな。

稼いでみるか」

とてつもなくめんどくさい気もするが、興味もあつた。興味が見事めんどくささに打ち勝ち、俺はドラを稼ぐことを決めた。

だが、一つ問題点。

根本的に、俺はドラの稼ぎかたを知らないのである。

どうしたもんかと考え、そんなことは人間に聞けばすぐに分かるだろう、と思いついた。そして、近くにいた客寄せをしているおっさんに話しかけることにする。

「あー、おっさん。聞きたいことがあるんだが、いいか？」

「おう。なんだい兄ちゃん」

客寄せのために張り上げていた声を止め、おっさんはそう気さくに返事をする。

「ドラの稼ぎ方を知りたいんだが、おっさん知ってるか？」

「当たり前えよう。つーか兄ちゃんは知らねえのかい？」

「まあ、新参者でな」

「そうかい」

「ああ。だから、教えてくれ」

「はいよ。ドラの稼ぎ方、だったな。とりあえずこの町には、いくつかのドラの稼ぎ方があるんだが、兄ちゃんはどんな感じにド

ラが欲しいんだい？」

「……そうだな。簡単でめんどくさくなくて、確実にがっばがっば稼ぎたい」

「ははははははは！ 兄ちゃん馬鹿かあ！ んな方法あつたらみんなやってるだろお！」

……確かに。

「いや、でも、んな方法はねえが、場合によつちゃあ一気にかなり稼ぐ方法はあるぜ？ 兄ちゃん、腕に自身はあるかい？」

「腕？ 腕なら、ゼウスにだつて勝てる」

「ははははははは！ 大した自信じゃねえか！ 神にまで勝てると思ってるとはな！」

『自信』じゃなくて多分本当に勝てるのだが、言つてもどうせこのおっさんは信じてくれないのだろう。

「氣にったぜ兄ちゃん！ そんなに自信があるなら傭兵ギルドに行きな！」

「……傭兵ギルド？」

「おうよ。この町は、『自由と商業の都プリステンダム』。商業都市って言われるだけあつて、他の国との交流もさかんでな、いろんな国の人間たちがここプリステンダムに集まるんだ。でも、ここまて来るのが危険だったりしたら、誰も来なくなつて、商業都市としては成り立たなくなつちまうだろ？ 傭兵ギルドは、そうなる危険

性を少しでも失くすために作られたものなんだよ」

「あー。……まあぶっちゃけよく分からないが、結局そこは何をするところなんだ？」

「いくつかあるが、メインは、この町の周辺に住む危険な怪物を討伐し、安全を確保する、ってことだな」

怪物を倒すだけでいいのか。

なるほど。確かに簡単で、俺向きかもしれない。

「まあ他には、この町に来ようとしてる商人を護衛したり、決められた素材を取ってくる採集クエストつてのもあるが、兄ちゃんは腕に自信があんだろ？ できかい怪物でも討伐すりゃあ、がっぼがぼだぜ？」

「そうか。がっぼがぼか」

「おうよ。がっぼがぼだ」

おっさんはニイっと歯を見せて笑う。  
なんとも親しみやすい親父だった。

「あー、おっさん。サンキューな。助かった」

「いってことよ！ それより、がんばれよ！ 神にも勝てる兄ちゃん！」

「ああ。がっぼがっぼ稼いでくる」

俺はそう言っつて、おっさんに背を向ける。  
そして傭兵ギルドに向けて歩き出そうとする、が。

「おい兄ちゃん」

そんな俺を呼びとめ、おっさんは言った。

「傭兵ギルドの場所は、知ってるのかい？」

「あー。そういや、知らねえな」

「ははははは！ 間抜けだな兄ちゃん！」

またおっさんは大爆笑する。

だがこのおっさんに笑われても、なぜだか嫌な気分にはならなかった。

言葉としては罵倒に入るのに、むしろ何処か温かく、嬉しくもあった。

「傭兵ギルドは、ここからだそうだな。一度中央広場に戻って、放射線状に広がる六つの街路のうち、三番街路をまっすぐ進んでりやあ、嫌でも目に入ると思っぜ？」

「三番街路、か。分かった。サンキューな。おっさん」

「おっ！」

おっさんは何が楽しいのか、俺に笑いかけてくる。

そんなおっさんの顔を最後に、今度こそ俺はその場を去ることに

した。

おっさんの言った通り、一度中央広場に戻り、三番街路へと出る。この三番街路も他の街路同様、夜だというのに賑わっていて、歩くのも一苦労だった。

めんどくさいので飛んでしまおうとも考えるが、こんな多くの人間の前で飛翔魔法でも使ったら、かなり目立ってしまうだろう、と止めておくことにした。

人間にとって飛翔魔法がどれだけ高位の魔法に属するのかは知らないが、未だに一人も飛んでないのを見ると、あまり使える奴はいないのだろう。

そんなことを考えながら歩き続けていると、ようやく、奥の方に傭兵ギルドが見えてくる。

おっさんの言っていた通り、『傭兵ギルド』とは嫌でも目に入るものだった。他の建物に比べ、一つだけ場違いなほどにでかいのである。

何のためにあんなでかいのが疑問ではあったが、傭兵ギルドまでの距離はあと少し。

俺はさっさとその距離を歩き切ってしまうことにした。

と、そんなとき。

ある少女が、目に入った。

大きな傭兵ギルドとはまた違う、嫌でも目に入ってしまう存在感を持つ、少女。この少女一人だけが、市場を行き交う人間たちとは全く違った存在に思えるほどに異様だった。

恰好から雰囲気まで、他の人とは重ならない。

薄汚い布切れ一枚を身にまとい、首には、首輪がはめられている。そして靴すら履くことなく生足をさらけ出し、その足は、傷だらけ。さらに少女は目に涙を溜め、きよろきよると、何かを探していた。

人間たちも彼女の異端さには気付いているのだろう。そんな貧相な格好をして泣く少女に、同情の視線を向けている。

だが　なぜだろうか。

誰一人としてその少女の元に近寄り、助けようとする者はいなかった。

少女の周りを囲うように、人のいない空間が出来ているのである。

関わってもめんどくさそう、と俺はそう思い、他の人間たち同様見て見ぬふりをして、通り過ぎてしまおうと考えた。

が　動かなかった。

俺の体は俺の思い通りに動かず、その少女から、目を離すことが出来ないのである。

もうすぐ傭兵ギルドなのに、こんな所で立ち止まり、少女を見つめている。この場違いな少女を。悲痛な　少女を。



行き交う人々が立ち止まっている俺にぶつかり、舌打ちをした。

表向きは、この少女と関わるのはめんどくさい。そう確かに感じている。

だが、心の奥底には 自分でも良く分からない、複雑な感情が確かに存在した。店員さんが脅されているときに感じた同情に近い。だが、確かに違く、もっと深い、体の内から胸を突き刺し、締めつけてくるような。そんな感情が浮かび上がった。

この感情が、俺をこの場に留め、少女など見なかったことにすることを妨げているのだろう。

不思議な少女である。あの小さな体躯の何処から放っているのか、強烈な引力を感じた。

自分の意志で動かないほどに衝撃を受けていた俺の体は、やがてその引力に引き込まれ、必然のようにその少女に近づいていた。

姉妹？

「あー。そのの。えーっと、嬢ちゃん。……そんな格好で、寒くねえのか？」

吸い込まれるように少女に近づいた俺は、周りに人が居ない中ぼつんと二人、場違いにそう話しかける。近づいてみると少女の小柄さが一層際立ち、幼いながら整った顔、どんな扱いを受けていたのか、さらさらとは言い難いショートカットが目についた。

俺の言葉に反応した少女は、今にも泣き出しそうな瞳を此方に向け、応える。

「……寒い、です」

と。

まあ、当たり前だろう。  
好きでそんな格好してる訳がなかった。

「あー。じゃあなんで、そんな恰好してんだ？」

理由があるなら、なぜなのだろうか。

人間に関しての知識がまだ浅い俺では、考えても分からないだろうし、聞いた方が早い。

そう思っただけで軽く聞いてみるのだが、俺の問いに少女は悲しげな顔をし、遂には俯いてしまう。

「……あそこでは、これしか。……これしか、着させてくれなかつ

たんです……」

これしか、着させてくれない？

こんな小さな少女に、薄汚い布切れ一枚しか、着させないのか？

「……………」

俺の中で、なんともいえぬ不快な感情が膨らんだ。

この少女にどんな理由があるのかは分からない。めんどくさいし、そこまで介入するつもりもない。

だが、こんな小さな少女がこの寒い中肌を露出し、体を震わせている姿は、見ていられるはずもなかった。

故意的にこの少女に布切れ一枚しか与えないなど、どんな人間なのだろうか。

「……………なんつーか。……………これ、やるよ」

俺は一番上に羽織っていた白いローブを脱ぎ、少女に差し出した。

キザっぽくて微妙に恥ずかしさを感じ、俺は頭をぽりぽりと搔く。

「い、いいんですか？　で、でも……………」

少女は俺の言葉で顔をばあっと明るくするが、すぐに申し訳なさそうな顔をする。

「あー俺は、気にすんな。魔力で寒さなんか消せるから」

「そうなんですか？」

「ああ。だから、ほら」

半ば強引に、少女にロープを手渡そうとした。

刹那。

「シーナっつ！ここに。ここにいたのっ」

と、ロープが少女の手に渡る直前、何者かが声を張り上げた。

そして声を上げた人間は少女の元へと走り寄り、小さな体を抱きしめる。

「よかった。……ホントに。ホントに、よかった。心配、したんだからね。シーナっ」

いきなり現れた女は、少女と同じく体を覆う物は布切れ一枚。首には首輪を嵌められ、傷だらけの生足をさらけ出していた。

「お、お姉ちゃんっ」

抱きしめられた少女は、お姉ちゃんと呼んだ存在の胸に顔を埋める。

「怖かった。怖かったよお。みんなわたしを無視して。すごく、すごく……怖かった」

「もう大丈夫。大丈夫よ、シーナ。あたしは無視しないから。ずっと、一緒だから」

この二人にどういった経緯があるのかは知らないが、なんだか、俺だけが場違いなような気がしてくる。

ローブを片手に、女の子二人が抱き合う姿を見ているのも虚しいので、さっさとこれを渡してここから退散したい気分かられた。

やがて現れた女は俺の存在に気付くと、抱きしめていた少女を解放し、こちらに顔を向けた。

「あんだ、誰？」

ストレートに聞いてくる。

「俺？ 俺は」

「も、もしかして、あんだ。うちの妹が可愛いからって、攫おうとしてたの……？」

女は言いながら、妹と共に後ずさる。

「んなわけねえだろ」

……なんつー言いがかりだよ。

「そ、そうだよ。お姉ちゃん。このお兄ちゃんはわたしに、ローブをくれようとしてたんだよ？ 失礼だよ」

妹の方は俺の肩を持ち、そう言ってくれるが、姉の方はまだ信じてないらしい。

「ちょっと失礼するわね」と言うと、妹と二人俺から背を向け、内緒話を始めた。

だが、俺の異常に発達した耳は、そのすべてを聞きとってしまうのである。

「シーナ。知らない人から何かをもらっちゃ、駄目でしょ？ あー  
いう人間は、ロリコンに決まってるんだから」

……マジか。

「で、でも、良い人そうだったよ？」

「ロリコンはみんなそうやって優しい人間という仮面を付けて、あんたみたいな可愛い子に近づいていくのよ」

「わ、わたし、……可愛い子」

……いや、そこか。

「そうよ。あたしに似て可愛い　って何言わせてんのよっ!」

「……わ、わたし何も言わせてないよう」

なんか色々ずれている姉妹である。

「と、とりあえず、いい？ シーナ。あたしのいないところで、

あーいう人間から何かをもらったり話したりしちゃ、ダメだからね？ お姉ちゃん、チョップしちゃうからね？」

「う、うん。分かった」

「じゃあ、あたしがあの男にびしっと『この変態！』って言うから、そしたらすぐに逃げようね？」

……………。

「だ、駄目だよ、お姉ちゃん。そんなこと言っちゃ……………。…………それに、あのお兄ちゃん。やっぱり悪い人には見えないよ」

「そう？」

「うん。…………だって。わたしに、話しかけてくれるんだよ？」

「…………まあ、確かに。この首輪を見れば、普通の人間は近づいてこないものね。でも、そんなことすら気にしない変態という可能性も……………」

いや、どんだけ俺を変態にしたいんだよ、と、俺は無意識的に嘆息する。

「そ、そうなのかな？」

「きつとそうよ」

「でも、お姉ちゃん。わたしに話しかけてくれただけじゃなくて、あのお兄ちゃんからは温かい魔力を感じたの。だからやっぱり、

良い人だと思うな」

温かい魔力、という言葉に俺は反応する。

「……そう。シーナがそこまで言うなら、そうなのかもね」

「うん。きっとそうだよ」

「じゃあ、ローブもらってお礼言って、『この変態!』って言うおっか」

「こ、この変態は余計だよ! お姉ちゃん」

仲のよさそうな姉妹は内緒話を終わると、俺の方に向き直した。そして、姉の方が口を開く。

「え、えーっと。あんた。妹に親切にしてくれたみたいね。あ、ありがとう」

照れくさそうに、そうお礼を言うてくる。

何も聞こえていなかったらまあ良かったのだが、全部聞こえていた俺としては、ものすごく複雑な気分である。

「あー。一応言っとくが……お前らの話し、全部聞こえてたからな?」

「え。えっ!?!」



俺の言葉を聞いた女は声を上げて驚き、だらだらと汗をこぼし始めた。相当焦っているのが見て取れる。

だが対照的に、妹の方はあまり焦ってはいなかった。というか、小さい子供だからあまり意識していなかったが、この子には見たことのない魔力を感じる。

俺の魔力は温かい、とかも言っていたし、何者なんだろうか。

それに、さっきまで泣きそうだったのに、今のちょっとした余裕さ。もしかしたら、俺が会話を聞こえてる、ということにも、気付いていたのかもしれない。

まあ、考えすぎかもしれないが。

「ききき聞こえてたのっ!？」

一方相変わらず姉の方は焦っていて、一人であたふたとしている。……なんか、こいつはもはや面白い。

「あー。まあな。俺、耳良いから」

「お、乙女の内緒話を盗み聞くなんてっ。 や、やっぱりあなた変態ねっ!」

どんな言いがかりだよ。

「……盗み聞いたんじゃねえ。聞こえちまうんだよ」

俺がそう反論すると、便乗して妹の方も口を開いた。

「そ、そうだよ、お姉ちゃん。失礼だよ……。……。一緒に、素直に謝る?」

「……。う、うー。シーナが、そう言うなら……。分かったわよ。謝るわよ」

「別に、無理して謝なくてもいいぞ? 怒ってねえし」

わざわざこんなことでキレるなど、めんどくさすぎるのである。

「ホント!?!」

「だ、駄目だよ。お姉ちゃん。謝るの!」

姉よりも背が小さく、幼い顔立ちをしている妹の方が、確実にしつかりしているような気がする。だが姉が来たことにより、泣きそうだった表情が一変する辺り、やはり子供なのだろう。

「いいよ別に。ホントになんとも思ってたねえから」

それより。

と、俺は話を展開し、さっきから気になっていたことを二人に告げた。

「あの兵士がこっちに向けて、殺気とも何処か違う気を放ってるが、なんなんだ? こっちに近づいてきてるぞ?」

俺はそう言って、姉妹の背後を指差す。

人ごみでかろうじて垣間見える程度ではあるが、そこには銀色の装甲で身を纏い、背丈よりも長い槍を持った人間がいた。

その人間は明らかにこの二人の少女に視線を向け、隠しきれない気を漏らしている。この姉妹にはれないように近づいてきている様子は窺えるが、俺が居て、欺けるはずもなかった。

「な、何？ 誰のこと？」

俺の指差す方向を見てみるものの、未だ、その兵士を認識できていないらしい。

「あいつだよ。ほら、でかい槍持ってる奴」

「……？」

もう一度兵士のいる場所を指差してみるが、女はきよとんとするばかりである。

あの兵士が気配を少し隠してるのもあって、普通の人間では存在を認識することが難しいのかもしれない。

だが、姉の方とは違い、魔力を感じることができらしい妹のシーナは、その兵士を見つけたようだった。兵士の姿を認識した途端、顔色を真っ青に変え、姉と話しているときは全く違う、弱々しい声で呟いた。

「お、ねえちゃ、ん。……あ、いつら、だよ」

「し、シーナっ！？ あ、あいつらって、もうここまで来たの！？」

「うん」

「し、すっかりして！ シーナっ！ に、逃げるわよっ！」

そう言っつて、姉はシーナと呼ばれた妹の手を引き、人ごみに紛れようとする。

だが、兵士の方も気付かれたということに気付いたのか、気配を隠すことを止め、全速力で少女二人を追い始めた。

兵士の走るスピードは装甲に強い魔力が込められていることもあり、驚くほどに早い。さらにその走る姿は力強く、一般人をなぎ倒しながら一直線上に少女二人を追っているのだった。この姉妹が追いつかれるのは、時間の問題だろう。

「おいそこの男っ！ その二人を捕まえろっ！」

自分を何様だと思っているのか、兵士は走りながら俺にそう叫ぶ。

当然、めんどくさいし、周りの人間に迷惑を巻き散らかしてる奴の言っつことなど、俺が従うはずも無い。

「おい早くしないか！ 貴様！ ミレトスに逆らうのかッ！」

なんだ。ミレトスっつて。

「はあ……。……。めんどくせえ」

誰にも聞こえないような声でそう呟き、まだ幾分か距離のある兵士の眼光を見据えた。

この兵士の目。

こつこつ目を俺は知っている。

自分に逆らえるはずがない。黙って俺の命令を聞いてりやいいんだ、と。

そう思ってる奴の目。

権力や腕力を振りかざし、自分が優越であることを信じ疑わない。そんな奴の、目。

そして。

俺の大嫌いな、目。

『姉』妹？

「それより、あの兵士がこっちに向けて殺気とも違う気を放ってるが、なんなんだ？　こっちに近づいてきてるぞ？」

男の『兵士』という言葉に反応し、あたしはすぐに男の指差した方向を見た。

「な、何？　誰のこと？」

だけど、あたしの見る限り、そんな人物は見当たらない。

「あいつだよ。ほら、でっかい槍持ってる奴」

「……………」

でかい槍を持っていれば普通目立つはずなのだが、やはりあたしには見つけることが出来なかった。

……………もしかしてこの男、あたしをからかっているの？

……………陰口を言われたお返し、ってこと？

気にしてないと言ったたくせに、小さい男ね。

そんなことを思いつつ、あたしはこの男に何か言ってやるつもり。

だがそれは、妹のシーナの声によって遮られた。

「お、ねえちゃ、ん。……………あ、いつらだ、よ」

「し、シーナっ!? あ、あいつらって、もうここまで来たの!？」

あたしはシーナの言葉に驚き、焦る。

「うん」

ここプリステナムにはしばらく身を隠せると思ったのに、もう、見つかってしまった。

何人もの仲間が犠牲になって、みんながあたしたちのために闘ってくれて、ようやく、あたしたち二人だけがあそこから逃げ出せたのに、もう、捕まってしまうの？

……ううん。

まだ、捕まったわけじゃない。

いくら相手がミレトスの兵士だとしても、逃げ切れるかもしれないわ。

諦めちゃ駄目よ、あたし。

シーナは、あたしが守るんだから!

「し、しっかりして! シーナっ! 逃げるわよっ!」

あたしはそう言ってシーナ手を引き、走り出した。

シーナは走るのも辛そうだったけど、頑張ってもらっしかない。

あたしたちを避け、周りに誰もいなくなっていた空間から人混みに紛れようとする。だが、人々はあたしたちに関わりたくないとかりに道を空けてしまい、人混みに紛れることは敵わなかった。

「おいその男っ！ その二人を捕まえろっ！」

ふと後ろから、そんな声が聞こえた。

おそらく、兵士があつた男に向けて叫んだのだろう。

「おい早くしないか！ 貴様！ ミレトスに逆らうのかッ！」

普通の人間が、ミレトスの兵士に逆えるはずもない。あの男はすぐにもあつたたちを追ってくることになる。

そうしたら、本当に やばいな。

男とあつたたちの距離は近かつたし、なにより、あいつは男であつたたちは女。

まともに追われたら、勝てるはずもないのだ。

「っ」

なら、どうすれば。どうすればっ、あつたたちは逃げ切れるの？

必死でその応えを追い求めるが、焦りすぎているあつたしの頭では、まともに考えることなど出来なかつた。表情にも、確かな焦りが出てしまつている。

こんなあつたしの表情を見たらシーナまで心配してしまうのに……。あつたしの方がお姉ちゃんだから、妹を守らないきゃいけないのに。強くなきゃ、いけないのに。



ホント、あたしは、……情けない姉だ。

そんなことを痛切に感じながら、シーナから顔を隠すように前を向き、代わりにシーナの手を強く握りしめた。

「お姉ちゃん」

そんなあたしの手を握り返して、シーナはそう呟く。

そして どうしてか、シーナはあたしの手を強く引き返し、急に立ち止まったのだった。

「し、シーナ！？ どうしたの！？」

「あれ、見て？ お兄ちゃんが。あのお兄ちゃんが 闘つてるよ？」

シーナは指差しながら、あたしの問いに応えた。

あたしはシーナの指差す方向を見て、驚愕する。

あの男が兵士と対峙し、今まさに攻撃を開始しようとしていたのだ。

なぜあの男がミレトスの兵士と闘おうとしているのかは分からない。だけど、これは千歳一隅のチャンスだと、あたしは思った。この気を逃してしまつたら、もう逃げ切ることなどできないだろう、と、そうとも思った。

「シーナっ！ 今の内に逃げるわよっ！」

あたしはシーナの手を引き、走り出そうとする。

でも、

「ううん。お姉ちゃん」

と、シーナは抵抗し、その場に留まろうとした。

「え、え！？ な、なんで！？ シーナ！？」

「大丈夫だよ。お姉ちゃん。あのお兄ちゃんはきつと、勝ってくれると思うから」

シーナがそう言ったのと、同時。

ミレトスの兵士は、バタツ、と、その場に倒れた。

人々をなぎ倒し、偉そうに叫んでいた兵士が。

早く去って欲しいと、多くの人間に迷惑がられていた兵士が。

いとも簡単に倒されたのだ。

人々は啞然とし、市場には、いつもの喧騒からは想像できない静寂が訪れていた。

「……………」

そしてあたしも同様に口をぱくぱくとさせ、驚いている。

あたしには、あの男が手をかざしただけのように見えた。それなのに、現に兵士は倒れているのだ。

あの男は、そんなにも強いのだろうか？

「ね？ お姉ちゃん。わたしの言った通り」

ふと。手を繋いでいるシーナがにこつと笑いながら言った。

その笑顔は我が妹ながら抱きしめたくなるほどに可愛く、あたしの緊迫していた心を吹き飛ばしてくれた。

それにもしかしたら、ここに居る人々のなかでこの子だけが、ミレトスの兵士が倒されても驚いていないのかもしれない。

「……やっぱり、シーナはすごいわねっ」

未だこの市場に静寂が続く中、あたしはシーナに笑顔を返しながら言う。

「えへへ」

あたしの言葉で、シーナは嬉しそうにはにかんだ。

照れ笑いを浮かべるシーナも可愛すぎるので、結局あたしはシーナを抱きしめることにした。

そして柔らかいシーナの体躯を抱きしめながら、あたしは思う。

あの男なら　あたしたちを守ってくれるかもしれない、と。

守られるのは好きじゃないけど、あたし一人じゃ大切なシーナを守りきれないから。

あの男に頼もう、と。

あたしはそう決断した。

人に頼むなんて格好悪いかもしれない。

自分の妹なのに、守りきれないからって他の人に守って貰うなんて 格好悪いかもしれない。

だけど。

例えそれがどんなに恥ずかしいことだとしても。

どんなに惨めなことだとしても。

あたしがただの非力な女だからこそ、そんなあたしでもできることとならなんだってしてやる、って。シーナを守るためならなんだってしてやる、って。

とつくに決めていたのだった。

『姉』妹？（後書き）

女の子の一人称は難しいですね  
慣れないです

姉妹？

アネモス  
風刃列覇。

心の中でそう呟き、手をかざす。

それだけで大気中の風をすべて従え、研ぎ澄まされた刃へと変える。そしてその刃一つを兵士に向け、風の斬撃を与えた。

最も威力の弱い属性『風魔法』の中でも、最も威力の弱い技『風刃列覇』を選んだのだが、それでも、俺の魔力は膨大すぎた。いかなる装甲と言えど、一撃で粉碎することができてしまっただった。

さらに、風魔法の長所であるスピードを無詠唱で活用したため、普通の人間からしてみれば、俺は何もしていないように見えただろう。

だが現に、放った風刃列覇は強い魔力の込められた装甲を粉々にし、兵士に死なない程度の衝撃を与え　　気絶させていた。

「あー」

俺はぼりぼりと頭をかきながら、嘆息する。

……あっけないな、と。

闘う前から既に分かっていたが、あまりにも弱かった。あれだけの態度をとるからには奥の手でもあるかと思っていたのに、そんなことはないらしい。

他の人間たちよりも少し強く、権力を持つてるだけで、人間はこ  
うも傲慢になつてしまふものなのだろうか。

そんなことを思いながら立ち尽くしていると、360度に渡る俺  
の視界はあの姉妹が俺の元に歩み寄ってくるのを捕えた。

「ねえ。あんた」

いきなり兵士が倒れたことで、民衆の視線はほぼ全て俺に集まっ  
ているにもかかわらず、気にせず話しかけてくる。中々、気の強い  
女だ。

「……なんで、あたしたちをかくまってくれたの？」

「……かくまっただつもりはねえよ」

俺は即座に答えた。

これは本当のことだ。

「……じゃあ、なんで、この兵士をやっつけたの？」

「あー」

なんで？ と聞かれると、明確な理由がないから応えづらいが、  
強いて言つなら。

「あの兵士に、むかついたからだ」

「……………」

妹の方も含め、姉妹同時に目を丸くする。

「……そ、それだけ？」

「まあな」

「……恩人にこんなこと言うのもあれだけど、ば、馬鹿なのね。あんた」

「うるせえよ。まあ、でも　そのおかげで、助かったんだろ？」

「……確かに、そうね。……じゃあ……えと。なんていうか……その。あんたが、あたしたちを助けたつもりはないとしても……。あたしたちは、ほんとに、ホントに、助かったから。……だから、……  
……　ありがとう、ね」

照れくさそうにお礼を言う姉に続き、妹の方も「えと、本当にありがとうございました」と、丁寧に頭を下げた。

薬屋の店員さんにお礼を言われた時もそうだったが、お礼を言われるということはむずがゆいが、中々に気持ちのいいことかもしれない。

まあ、こんな感情を持ったなんて他の神人テールに聞かれでもしたら、俺を馬鹿にしてくるだろうがな。俺以外の『神人』という種族からしてみたら、神人は神に仕える高等な種族。人間は神の暇潰しに五体を与えられただけの、下等な種族、らしい。

「あー。じゃあなんつーか、俺もう行くから。　これ」

俺はずっと左手に持っていた白いローブを、二人に差し出す。



「……ホントに、いいの？ 助けてもらったのに、物まで貰って…」

遠慮してるのか、中々受取ろうとしない。  
そんな姉に向けて、

「いいよ別に。 ほら」

と、呟き、俺は強引にロープを付きつけた。

女はそれでもなおロープを貰うことを渋ったが、しばらくロープを付きつけたまましていると観念したのかようやくそれを胸に抱えてくれる。

その姿を確認した俺は、もうこの姉妹に関わる理由もない。

なぜ、そんな恰好をしているのか。なぜ、あんな兵士に追われていたのか。気になることはあるが、小さな疑問だ。すぐに忘れる。

俺は二人に背を向け、傭兵ギルドへと向かうことにした。

だが、

「ま、待って！」

と、そんな俺を呼び止める声。

俺は反射的に立ち止まり、体を二人の方に向けた。

瞬間 真剣な眼差しをした女と、目が合う。手を握り、緊張しているのが見て取れた。

「なんだ？」

ただ事ではなさそうな雰囲気を発する女に向けて、そう訊く。

「……………」

女は応えず、代わりに、この寒い中さらけ出している膝を地面に着いた。

そして両手をも地面につき、遂に額までもが地面に触れる。

俺はこの格好を知っている。

誰かに謝るときや、お願いをするときに取る体勢。

土下座、という奴だろう。

兵士を倒していたことで集まっていた視線が、さらに集中し、周りの人々は何事かと騒ぎだした。

「お、お姉ちゃん……………」

妹も姉が何をしようとしているのか分からないらしく、そう心配そうに呟いた。

だがそれすら気にせず、額を地面に付けたまま、女は言った。

「……………あんだ、強いんでしょ？」

覚悟がある奴の、声。

「……ああ」

「だったら、……お願い。お願いッ！ あたしたちを守ってッ！」

「……………」

守る。俺が、この姉妹をか？

何の恩があつてそんなことしなくちゃいけないんだ。

瞬間的に俺は思うが、そう言うことは できなかった。

「シーナ！ シーナからも、お願いしてっ？ ミレトスには。」

ミレトスには戻りたくないでしょっ？」

相変わらず『ミレトス』がなんなのかは、俺には分からない。

だが、『ミレトス』という単語を聞いた途端、シーナと呼ばれた少女の顔色が激変したのだった。何を思い出したのか、唇を震わせ、真っ青になってしまう。

それはさきほど、あの兵士を見つけた時の表情に似ていた。

「 ミレトス、に、……戻、る……？ ……いや いやああ  
ああッ！」

だが、今回はさっきよりもっと酷い。少女は錯乱して耳を塞ぎ、悲鳴をあげ始める。

「し、シーナ!？」

自分の失言に気付いた姉は、額を地面から離し、慌てて妹を抱きしめた。

「大丈夫。大丈夫だから、シーナ。もう、あんなところには戻らなくていいの。……ね? シーナ。大丈夫、だから」

さっきまで普通だった少女が、たった一単語でここまで変わり、未だに怯えている。

「……………」

なんなのだろうか、この気持ちは。

正直、この姉妹に関わるのはめんどくさい。助ける理由も義理も恩も無いし、限りなく、ただただめんどくさい。

だがまたも、この少女を見つけたときのように体は俺の意思に逆らい、足はここから離れようとしなかった。

最強の戦闘種族神人の中でも、圧倒的に強く生まれた俺。

神人の異端児とまで呼ばれたこの俺でも、今の自分の体を動かすことは敵わなかった。

「ねえ」

急に、姉が妹を抱きしめながら口を開いた。

「お願い。……あたしじゃ。あたしじゃ、シーナを守りきれないの。……何でもするから。なんだってやるから。だから、あたしたちを……守ってっ……」

めんどくせえよ。

俺はそう言おうとした。

自分の思い通りにいかないことが嫌で、そんな只の我が儘で、この姉妹の事情など関係なく意地を張るようにそう言おうとした。

だが、口を開く寸前。

外道。

そんな言葉が、頭をよぎったのである。

「……………」

俺は 正直強い。

自意識過剰でもなんでもなく。誰から見ても、明らかに俺は強い。

でも今の俺は、めんどくせえ、という言葉が発することすら、できなかつた。

「……………お願い。なんでも、……するから。シーナだけは……………守りたいのっ……………」

そんな顔 するなよ。そんな顔されて、どうやって断ればいいんだよ。

無理だ。とかきっぱり言って、ここから去ればいいのか？

それこそ 無理だ。

俺は人間を見下しているはずの『テオール神人』なのに。普通の神人なら何にも感じずにやってのけるはずなのに。

俺には、できなかった。

「……………はあ」

俺は一度長い溜息を付き、そして、言った。

頭をぽりぽりと掻きながら。

厄介なことになったと思いつながら。

俺は言った。

「……………分かった、よ。……………お前の要望通り、守ってやる。良くわかんね けど、……………お前らは、俺が守ってやるよ」

どうせ、暇だから。暇潰しに利用してやるぞ。

そう心の中で言い訳しながら。

やってしまった、と微妙に後悔しながら。

俺はそう言った。

「ホントに、ホントにいいのね？」

「……ああ」

「迷惑、かけるわよ?」

「……いいよ、別に。些細なことだ」

俺がそう言っていると、女は泣きそうな顔になる。悲痛な顔ではない。ほっとし、安堵しきった顔だった。

「……ありがとう。……本当に、ありがとう」

抱きしめていた妹を離し、女は何度も礼を言う。

「あーもう礼はいい。……遠慮されるのは嫌いなんだ。普通でいてくれ」

「そう、なの?」

「ああ。遠慮するのもされるのも、されるのも、めんどくさいだけだ」

「分かった。じゃあ、もう遠慮しないわね」

女はそう言うと、泣きそうだった顔を繕い、

「さっさとあなたの家に連れてってくれる?」

と言った。

「なんだその豹変ぶりは」





「……いや今からって、もう夜よ？ どうやって三人分の宿代稼ぐつもりなの？」

「よく分からないが、傭兵ギルドがかなり稼げるって聞いた」

「……聞いた、だけ？」

「まあな」

「……ああ。土下座までして頼んだのに……。不安だわ……」

ポツリとそんなことを呟く。

「だ、大丈夫だよ。お姉ちゃん。お兄ちゃんは絶対強くて、優しいから」

発作的に錯乱していた妹の方は、もう大丈夫なようで、普通に話すことが出来ていた。

「あー。まあ、優しいかはともかく、強さは心配すんな。一度請け負ったのにお前らを守りきれないなんて、俺のプライドが許さないからな。安心しろ」

「……どこからその自信がくるのか分からないけど、あんたシーナに気に入られてるし、馬鹿そうだけど、悪い奴じゃ……無さそうだし。……あたしたちを騙してないって、信じていいのよね？」

「あーまあ、大丈夫だろ。つか、騙すって何だ」

「ミレトスの兵士にあたしたちを引き渡して、ドラ貰ったり、あたしたちの、その……か、体目当て、だったり……い、色々よ」

「心配すんな。そんな気はさらさらねえから」

「……そ、そう。なら、いいんだけど」

俺がきっぱり断言してやると、女は少しだけ安堵の息を漏らしながらそう呟いた。

「それより、俺、まだお前らの名前聞いてないよな？」

「……確かに、そうね」

「じゃあまず名乗ってくれ。なんと呼んだらいいか分からん」

「……ええと。まずあたしからだけど、あたしは、ユーリよ。呼び方はなんでもいいわ」

「ユーリ、か。分かった。んで、妹の方は？」

俺はユーリから目を逸らし、妹に向ける。

「わたしは、シーナです。これからお願いがいきますね。……えと」

「あー。俺は、セルだ。なんとも呼んでくれ」

「はい。……じゃあ、えと、お兄ちゃん、でいいですか？」

「……ま、まあいいけど。……名前、聞いた意味ないのな」

「え、えと、じゃあ、セルにい、でいいですか？」

「あーまあ……なんでもいい。好きに呼んでくれ」

「じゃあゴミ虫ね」

この言葉を発したのはもちろん妹のシーナではなく、姉のユーリである。

「いや」

なんでもいいと言ったが、さすがにそれは駄目だろう。

つか、遠慮しなくてもいいとは言ったが、しなとすぎじゃないか？ こいつ。

「……何？ あんた。男に二言は無いんじゃないの？」

「たまにはあるんだよ」

「たまにはあるって。だ、ださいわね」

「うるせえよ。あれだ……やっぱりめんどくせえから、普通にセルって呼べ。俺もユーリって呼ぶから。それでいいだろ？」

「嫌」

この野郎。

「なんて、嘘よ。……元から、ゴミ虫なんて呼ぶつもりないわ」  
「……………」

「あんたは、恩人で……シーナを助けてくれた人なんだから。そんな風に呼べるはずもないじゃない」

「……そう、か」

正確には俺は『人』ではないし、この二人を助けるつもりなどなかったのだが、わざわざそれを指摘する気はなかった。

それにしても、ユーリはどれだけ妹のことが大切なのだろうか。シーナの命を助けるためならば、自分の命だって簡単に投げ出しそうなくらい色々と気負っているような気がする。

そうだな。

そろそろ、聞いてみるか。

貧相な服しか着れず、嵌められた首輪に傷だらけの足をしている、理由を。

変な兵士に追われていた、理由を。

「あー。なんつーか、さ。そろそろ……話してくれ」

未だ周りの人間たちに奇異の目で見られながらも、それを無視し、俺はそう訊いた。

それだけで、ユーリは俺の言わんとすることを分かってくれたら

しい。ユーリは一度俯き、シーナに「少しの間、耳を塞いでてね」と優しく眩き、そして、話し始めた。

## 姉妹 過去

「『武力と服従の都ミレトス』って国は、もちろん知ってるわよね？」

「……？ いや、知らないが」

「え？ し、知らないの？ ここら一带じゃかなり有名って聞いたけど、そうでもないのかな。まあ、それはいいわ。……このミレトスが、あたしたちの故郷なの」

「……？ だから、何だ？」

「ホントに、ミレトスを知らないのね……」

「まあな」

なんせ人間界に来てまだ二日目だ。そんなこと知るわけもない。

「ミレトスは、完全な植民都市なの。人間と見なされてるのは貴族と王族しかいなくて、後の99%以上はみんな奴隷。家畜以下って見なされてた。さっき来た兵士は自我がある自ら志願した兵士みたいだったけど、他の兵士は無理矢理改造されていて、さっきの兵士何かと比べものにならないくらい強かった。兵士はほとんど貴族の人形で、兵士すら、奴隷だったの。そんな国。あたしたちはそんな国の生まれだった。……自分で言うのもなんだけど、あたしたちはこの国に生まれてきた時点で、他の人と比べ物にならないくらい不幸だったわ。両親が奴隷、ってだけで、あたしたちも

」

「……奴隷、つてわけか」

「……そう。生まれつきの奴隷だった。世間のことなんて何にも知らずに。生きていくための最低限の食料を与えられて、貧相な布切れ一枚を与えられて。後はただただ、命令されるだけだった。子供だから鼻唄されるなんてことはありえなかったから、毎日毎日、倒れる寸前まで働かされて……。ホント、壊れちゃいそうだったわ。何も考えない方が楽だから、って、精神が崩壊しそうだった。……でも、シーナのおかげで。シーナが存在してくれたおかげで、あたしの精神は耐えることが出来たの……。……つまらなくて、ただただ辛い生活の中でも、一日の終わりに、寝る前に、シーナと話すことができたから。それが、あたしに力をくれたから。あたしが、守らなきゃいけないんだって思えたから。あたしは、耐えることが出来たのよ」

「……………」

予想はしていたが、やはり、暗い話だ。

こういう話を聞くと、なんというのだろうか。胸が締めつけられて、地の底から負の感情が湧き上がってくるような。そんな気がする。必死でこの感情を押さえつけていなければ、無意識的に地盤を真っ二つに割ってしまうかもしれない。

「あーでも、お前らここにいてるってことは、そのミレトスからは逃げ出せたんだろ？ どうやって逃げ出してきたんだ？」

「えーっと、ね」

ユーリは妹の頭を撫で、もう少し耳を塞いでてね、と無言で微笑みかけてから、応えた。

「ミレトスは99%が奴隷って言ったでしょ？ で、そのあたしたち奴隷は、全員が自分たちの境遇に納得してなかった。だから、反乱を起こしたのよ。今までビビってたけど、武器なんかなくなっちゃって数は数千倍以上もいるんだから、勝てるだろうって」

「それでその反乱に勝った、って訳か」

「ううん。……違うの。……あたしたちは、大敗した。奴隷兵士に自我を持たない強すぎる奴隷兵士に、大敗した。いや、勝つつもりすら、なかったのよ。勝てるだろうなんて、大人たちはみんなあたしたち子供に言ってたけど、大人たちの目的はそもそも勝つことじゃなかったの。あたしたちを……逃がすことだったのよ。いくら数がいようと、ミレトスの兵士が持つ圧倒的強さの前にはそんなの意味がないんだって、大人たちはそれを知ってたから。反乱を起こすふりをしてあたしたちを逃がしてくれたの。……ホントにみんな、命がけで、自分の命を捨てる勢いで、兵士を引きとめてくれたわ」

ユーリを何を思い出したのか俯き、淋しげな顔をした。  
だがすぐにその表情を繕い、続ける。

「……それで、ミレトスって国から抜け出したあたしたちは、初めて、他の国に渡った。首輪に付けられたミレトスの刻印を見て、あたしたちを避ける人がほとんどだったから、すごく、大変だったけどね」

確かに俺がシーナに話しかけた時、シーナはこんな自立つ格好を



しているのに、周りには誰もいなかったような気がする。つーか、今も、俺たち三人の周りには誰も居ない。周りの喧噪とは打って変わり、ぼつんと三人だけが存在している。

「あー。……なんでその、『ミレトスの刻印』とやらを見るだけで、みんなお前らを避けるんだ？」

「えーっとね。その時はあたしもなんで避けられてるか分からなかったんだけど、周りの人の話しに聞き耳を立ててる内に分かったわ。ミレトスって国は、他の国から見ても、かなり強い国として映ってるらしいの。だから、そんな国の奴隷になんか、手を出せるはずもない、って。同情はしてくれてるみたいだけど、そう言った。まあ、あんたは例外で、あたしたちに話しかけてくれたけどね」

「……………」

「……まあ、俺はミレトスなんて知らなかったからな。」

「あー。じゃあ、シーナがああ兵士を見てあんなに怯えて、ミレトスに戻るって聞いてあんなに錯乱したのも、奴隷だった時を思い出したから、ってことになるのか？」

「うん。多分、そうだと思う。だから　なんていうか。シーナを錯乱させたあたしが言うのもなんだけど、シーナの前では、ミレトスの話はしないでね」

「ああ、分かった。約束する」

断る理由はない。むしろ、シーナみたいな小さい子供の怯える姿など、見たくはない。この子には、笑顔が似合うだろうしな。

「……………ありがと、ね。……………ホントに。……………ホントに、ありがと。何から何まで」

「あー。そんな辛気臭え顔すんなよ、ユーリ」

「……………うん」

「……………もう、遠慮もすんな。俺もしねえからよ」

「……………うん」

さっきみたいにふざけるかとも思ったが、今はそういうテンションじゃないらしい。

「あー」

……………ホント 苦手だ。こついう空気は。

楽でめんどくさくなくて、まったりした空気に変えて欲しいものだ。

そう思うが、そんな俺の想いは叶うことはなく、ユーリは一つ溜息をついて続けた。

「今思い返すと、ここに来るまではホント大変だったわ。空腹には慣れてるけど、二日間何も食べないこともあったし、外の世界のことも知らなかったから、適応するのも、すごく大変だった。ってまあ、今も全然適応できてないんだけどね」

ユーリは「あはは」と力のない笑いを浮かべる。

「……お前。年の割に苦労してんのな」

「……まあ、ね。……別に、何の自慢にもならないんだけどね……」

ユーリは、そう自嘲気味に呟いた。

「あー、まあじゃあ、とつとと傭兵ギルドでドラ稼いで、宿借りて、なんかうまいもん腹一杯食わせてやるよ」

「………うん。ありがとう」

強気そうな顔立ちで、そうしおらしく言うユーリ。

第一印象からして生意気な小娘、ぐらいにしか思っていなかったが、意外とユーリは、繊細な女の子、なのかもしれない。

今までの強気な態度や物言いも、妹を守るために、自然と無理していたのかもしれない。

………まあ。

まだよく分からないし、只の考えすぎなのかもしれないがな。

## ヨーヘーギルド

自由と商業の都プリステンダム三番街路内拠点傭兵ギルド

「今日中にはつぱと大量のドラを稼ぎたいんだが、良いクエストはあるか？」

どうやら押しに弱いらしい俺が守ることになった、姉妹。

この二人と共に傭兵ギルドへと足を踏み入れ、すぐに受け付けのお姉さんにそう訊いた。

「ま、まず、ギルドカードを見せてください」

ユーリとシーナの姿を見て俺の奴隷だと判断したのか、受付のお姉さんは少しだけ怖じ気づきながら言った。

ちなみに今現在、俺は他の傭兵どもから蔑みの視線がばんばん注がれている。

ここに居る奴らは俺がミレトスの兵士を倒したのを見ていないだろうから、ユーリとシーナの首輪に掘られた刻印を見て、俺のことをミレトスの兵士だと思っているのだろう。

だがまあ、これも些細なことだ。気にするほどのことではない。憐みの視線には慣れているのか、ユーリもシーナもあまり気にしていないようだった。

「……ギルドカードって。なんだそれ」

「え、えと、ギルドカードという物はですね。簡単にいえば、ポイントカード、のようなものです。傭兵ギルドは、クエストを完了するたびにそのクエストに応じたギルドポイントが貰えるのですが、そのポイントが一定数まで溜まると、ギルドランクがアップするのです。ギルドランクはF～SSまであり、このランクが高いほど、より高報酬のクエストを受注することが出来るようになっていきます」

若干早口にそう説明する受付さん。

「……あー。……まあ、……ぶつちゃけ良く分らんが、クエストを受けるために、そのギルドカードはいるのか？」

「はい。必要です」

「そうか。じゃあ、とりあえずそれが欲しんだが、どうやってら貰える？」

「特に必要なものはありません。誰でも発行することが出来ます」

「じゃ、発行してくれ」

「分かりました。では、ギルドネームは何に致しますか？」

「……そうだな」

普通に俺の名前のセルでもいいが、これじゃインパクトが足りない。インパクトを求めてどうすんだ、って気がしなくもないが、まあそれはいい。

格好よくて、強そうな名前。

『アダマス』でいいか。

「……じゃあ、アダマス、で頼む」

「はい。承知致しました。では」

受付のお姉さんはカードを一枚取り出すと、そのカードの隅に『アダマス』と書き記す。そしてその隣に印を押すと、それを俺に差しだしてきた。

「このギルドカードを紛失してしまわれた場合、ポイントは初めから溜めなおしとなってしまいますので、保管には十分お気を付けください」

「ああ」

俺はカードを受け取りながら応える。

だがまあ、こんなもの、すぐに失くすだろうな。

「なお、アダマス様はFランクからのスタートとなっておりますので、Fランクと一つ上のEランクまでのクエストを受けることができます。クエスト内容や報酬などの詳細は、あちらの掲示板に添付されておりますので、一度足をお運びください」

「ああ。分かった」

「説明は以上でございますが、何か、質問などございますでしょうか？」

「あー特にないな」

「そうですか。では、SSランク目指して、頑張ってください」

受付さんはそう言って、丁寧にきれいな姿勢で頭を下げた。俺はそれに対して「ああ」と小声で応えると、すぐに受付さんに背を向け、掲示板の元へと向かった。

「あー。えーっと、ユーリ。宿泊代って、一人何ドラぐらいだ？」

先ほどまで多くの傭兵たちがいたのだが、俺たちが来たことによつて無人になってしまった掲示板の目の前。そこにはランクとクエスト内容が書かれた様々な紙が貼られていた。どのクエストを受注しようかとそれらを眺め始め、しばらくして、俺はユーリにそう訊いたのだった。

「……………そうね。……………一度入ったことがある宿屋では、2千ドラぐらいだったわ。全然ドラ足りなくて、借りられなかったけどね」

良いクエストがないか未だにきよろきよろと探しながら、ユーリは応えた。

「そうか。じゃあ、三人で6千ドラか。飯代込みにしたら、8千ドラぐらいかかるよな？」

「……………そうね」

「んで、だ。Eランクの、最高報酬はいくらだ？」

「……………見て、分かるでしょ？」

「ああ。俺には、……………千二百ドラ、にしか見えない。もしかして一ケタ、見間違えてるのか？」

「ううん。そんなことないと思う。あたしにも、千二百ドラに見えるから」

「……………マジかよ。全然、足りねえじゃん」

「そうね」

「……………がっぱがぼじゃなかったのかよ」

「それは高ランクのクエストをクリアしたら、ってことだったんじゃないの？」

「……………あーそうかもな。Aランクとか、10万ぐらい普通にあるし……………」

……………ちくしょう。

人間にとってどんな難しいクエストだろうと俺にとっては楽勝なのに、まず受けることが出来ないとは。低ランクのクエストを受けてポイントをコツコツと溜めればいいのだが、そんな時間はなかった。

なんせ、今日中にドラを稼がなきゃ宿代を得る意味がないのである。



……どうしたもんか。

と、状況を打破すべく頭を働かせていると、今まで黙っていたシーナが口を開いた。小さな体で、俺を見上げる。

「え、えと。セル……にいい。……その、受付のお姉さんに、頼んでみるのはどうですか？ セルには強いから。ものすごく、強いから。それが証明できれば、高ランクのクエストでも受けさせてくれると思いますっ」

俺に意見することに緊張してるのか、シーナは手をぎゅっと握りしめる。

「あー。証明って、例えばどうすればいい？」

「えと。……ここにいる傭兵さんの中で、一番強い人に勝つのが良いと思いますっ」

……簡単に言っつな、この子。まあ、簡単なんだが。

「そうだな、シーナ。 そうしてみるか」

俺がそう呟くと、シーナは何が嬉しいのか顔をぱあっと明るくさせる。

「……？ ……どうした？ シーナ？」

「え、えと。 セルには優しいですねっ」

いや、今の言動の何処に、優しさが含まれたのだろうか。

「……まあ良く分らんが、シーナ。お前も俺に遠慮はすんなよ。嫌いなんだ。するのも、されるのも、な」

「……はいです。その、気を付けますね」

「……なんつーか。ユーリと話す時みたいに、敬語じゃなくてもいいんだぞ？」

「えと。でもそれは、セルにいに、悪いです。セルにいはわたしとお姉ちゃんを助けてくれた、恩人さんなのに、わたしみたいな、子供が……」

「……あー」

これが、まだ十歳（推定）の子供が言う台詞なのか。ホント、しっかりした子である。ユーリと血が繋がってるとは、とても思えなかった。

「……まあ、別にどっちでもいいか。……とにかく、子供とか恩とかはもう気にすんな。遠慮なく、遠慮しなくていいからよ」

そっちの方が、やりやすい。

「えと……はいですっ」

シーナは素直にこくりと頷いた。そして顔を上げて俺の顔を見ながら、

「……その、セルには、ホントに優しいですねっ」

と、そう言っつて、にこりと笑った。

「……あー」

ホント、訳が分からなかった。

やはり奴隷にされていただけあって、こんな扱いでも優しいと感じてしまうのだろうか。

## よーへーギルド とある男

農業と平和の都シリクレス。

この国が、僕の生まれだった。

一年の四季がはっきりしていて、大きな川も通っている。小さな国だからこそ人との触れ合いも盛んで、物を与えるのも貰うのも、この国では当たり前のことだった。それに加えて、国民のほとんどが自分の命を捨てても他人を助けようとする良い人たちばかりだったから、文句の言いようがないほどにシリクレスは素晴らしい国だったんだ。

僕はそんな国に生まれたことを誇りに思っていたし、毎日が充実していた。

朝は両親と畑仕事をして、昼はたくさんいる友人と泥まみれになるまでに遊びまわって。夜はまた、両親の手伝いをする。

ホント、楽しかった。すべてが楽しかった。

このまま、のどかで幸せな日々を過ごしながら成長して、成人したら好きな女の子と結婚して、子供を作って、また新たな幸せな家庭を築くんだろうなって。何の疑いもなくそう思っていた。そうしかなりえないと思っていたし、そうなって欲しかった。

だけどそんな幸せは……いと簡単に潰されてしまったんだ。

あいつらは人間の顔をした、悪魔だ。

逃げ惑う仲間たちを無慈悲にも捕らえ、僕たちが一生懸命耕した畑を踏み荒らし、みんなの家々を壊していった。一時間も経たないうちにシリクレスという国は壊され、たった五人の兵士に潰されてしまったんだ。

だけどみんなが捕えられ、何処かへ連れてかれる中、僕だけは無事だった。人一倍力が強くて、護衛のために父から習った剣の腕前もあつたから、僕だけは逃げ切ることが出来たんだ。

そう。僕は逃げ切ることが、出来た。

聞こえはいいかもしれないけど、ようは僕は 逃げたんだ。

国で一番強いだろうとまで言われてたのに、あの悪魔たちが怖くて、僕は逃げた。

他の人は敵わないって分かっているながらも立ち向かっていったのに、僕だけは、逃げた。

ホント、弱い。力が強いだけで、僕はただの臆病者だった。

そんな自分が嫌で嫌で。何度も、あのときのことを後悔した。失ったものの大きさを痛感して、何度も自ら命を断とうとした。

……だけど。今になってこう思う。

あのとき、逃げてよかったのかもしれない、と。

あのときの僕じゃ、絶対あの悪魔たちには勝てなかった。

だけど今なら。

毎日毎日、あの悪魔たちを倒すことだけを考えて、みんなを救うことだけを考えて、どんなに辛いことだろうと、強くなるためなら喜んでやった今なら。そんな血の滲むような努力の果てに得た、最強の剣術と魔術を持つ今なら、あの悪魔たちにも勝てるはずだから。絶対、勝てるから。僕はあるとき逃げて、良かったのかもしれない。

本当に逃げて正解だったのかは、まだ分からないけど、もうすぐ、その答えは出るだろう。

僕はようやく、人の顔をした悪魔の仲間を、見つけたんだ。

間違いない。

あの男にこそ刻印はないが、引き連れている二人の少女には、どす黒い竜の刻印が見える。あの二人の少女は、男の奴隷なのだろう。

僕は彼女らに同情しながらも、憎き竜の刻印に引き込まれるように、近づいていた。

「どうしても高ランクのクエストを受けたいんだが、ここにいる一番強い傭兵を倒したら、受けてもいいか？」

不意に、憎き『ミレトスの兵士』が口を開いた。

「ここにいる一番強い兵士を倒す、だと？」

「……す、すみませんが、当傭兵ギルドでは、そういうサービスは受け付けておりませんので……」

「あー頼む。そこを、なんとか」

面白い。

僕はSSランクにこそ届いてないが、Sランクは持っている。

十分、このギルド最強と言えるだろう。

「こ、困ります。アダマス様」

普段はクールに職務をこなす受付のミレイさんが、少しだけあたふたとする。

僕はさらに男へと近寄り、ミレイさんに向けて、

「いいじゃないですか。ミレイさん。僕が、彼と戦いますよ」と言った。

ミレイさんは僕の言葉に驚きながらも、さらに困る。

「で、ですが……」

男は憎いが、ミレイさんに当たるのはお門違いだろう、と憎しみの心を抑えつけ、できるだけ明るい声を保ちながら僕は言った。

「万が一にでも僕に勝てるものなら、Sランクのクエストなんか簡単にこなせるでしょう。ギルドとしても、大きなクエストはクリアしてもらった方が嬉しいはずですよ。なんなら、彼が僕に勝てたら、ギルドカードを交換してもいいですよ？」

「……………」

困った表情を浮かべながらも、ミレイさんはしぶしぶ「…………いいでしょう。ジエイクさんがそこまで言うなら、特例です」と呟いた。

それを聞いた憎き男は、僕に声をかけてくる。

「あーなんか良くわかんねえけど、あんた……………ありがとな。遠慮なく闘わせて貰うよ」

どれだけ自信があるのかは知らないが、貴様は絶対潰してやるッ。ここからが……………僕の復讐の始まりだ！

「うるさいッ。貴様。僕が負けたら、ギルドカードは貴様にやるッ。だが僕が勝ったら、お前の国の秘密を話せよッ？」

「……………？ 俺の国？ ……まあ、別にいいけど」

「約束だぞ！ ついてこい」



## よーへーギルド バトル

ものすごい形相で睨んでくるジェイクと呼ばれた男。

なぜかこいつは俺の国のことを知りたいらしいが、俺が神人だテオールと知ってるのだろうか。どうせ俺は勝つから話すことにはならないが、少しだけ気になることだった。

先頭にジェイク、その後ろに俺、ユーリ、シーナと続き、金属で作られた床をコツコツと音を立てながら歩く。

薄暗い廊下。左右には等間隔に明かりが灯され、所々に騎士の銅像が置かれていた。なんとも物々しい場所であり、そんなこの場に気圧されてかユーリとシーナは一言も喋らずにただ歩いている。

「ここだっ」

沈黙の中、微妙な気まずさがあったが、それはジェイクの声で打ち消される。

ジェイクは閉ざされた大きな扉の前で立ち止まり、そして俺を睨みながらその扉を勢いよく開けた。

「……………」

扉の先にあつたのは 闘技場。

軽く千人程度は入れるだろう観客席に、ど真ん中にある大きなリング。激しい戦いだろうも耐えられるように作られているのか、闘技場のほとんどが鉄製で、リングなんかは銀色にキラキラと光っていた。

傭兵ギルド内にこんなところがあったのか、と俺は驚く。

どうもでかい所だなとは思っていたが、まさか闘技場が建物内に押し込まれてるとは。

人間の技術はすごいものである。

「貴様。ここで闘うぞ！ ルールはない。相手を降参させるか、気絶させれば勝ちだ！ 勿論殺しても いい」

ジェイクは威圧的に言う。

そして、強靱な跳躍力でリングへと飛び乗った。

「……あー」

「早く上がれ！ すぐ始めるぞ」

なぜ、この男はこんなに気合が入ったのだろうか。  
さっきから殺気がバンバン飛んでくる。

「……はあ」

俺は居心地悪い視線を無視しながら一度溜息をつくと、リングへ上がるうとする。

そんな俺に向けて、シーナとユーリはそれぞれ口を開いた。

「え、えと。セルにい。頑張ってくださいっ」

「あんたが負けると野宿しなきゃいけないんだから、その……が、頑張ってよね」

「あー。まあ、ちよっくら勝ってくるよ」

俺はそう吹き、リングへと続く階段を上った。

そして鉄製のリングに足を踏み入れると、すぐ前には今にも攻撃してきそうなほどに興奮しているジエイク。

さっさと、終わらせるか。

「あーもう、始めていいのか？」

「ああ。いくぞ」

ジエイクはそう呟くと、腰に刺した剣を引き抜き、いきなり俺に斬りかかってきた。

とりあえずそれを右に少しだけサイドステップして回避すると、中々に良質な剣が空を斬る。そして　ごおん、というすさまじい音を立てた。

なるほど。自信があるだけに、中々の腕前はあるのかもしれない。

そう思っている間にもジエイクは剣先を横に向け、横一文字に斬りつけてくる。腕に魔力でも込めたのか、そのスピードは人間の限界を超えるほどに早く、少しだけ反応が遅れてしまう。だがそれでもやはり、俺にとっては見慣れたスピードだ。

膨大な魔力の1%ほどを指先に込め、剣の勢いを止める。そして、デコピンで剣の中央部を粉碎した。

ジェイクは驚きで顔を歪めるが、今まで幾度もの修羅場は潜ってきたのかすぐにバックステップで距離を測る。そして背に掛けていた身長ほどもある大きな魔杖を取り出した。

「炎を司りし神よ、我が盟約に従い、集え」

もう一度バックステップをして俺から距離を取ると、ジェイクは詠唱を始める。

「あー」

だが、俺が詠唱している時間を見逃すはずもない。

超上級魔法空間転移により、十メートルほどの距離を一瞬で詰め、手をかざす。そしてミレトスの兵士を倒した時と同じ、アネモス風刃列覇を無詠唱で放った。人間には見えるはずのない超高速の斬撃が、ジェイクを襲う。

普通の人間がこの技を避けきれはるはずもない。

これで、この戦いもあっけなく終わりだな……。

と、俺は気を抜くのだが。

……やるな。

ジェイクは確かに俺の魔力を察知し、ぎりぎりの所で転がり込ん

で、風刃列覇を回避したのである。アネモス

だがなんとか回避したものの、俺の圧倒的な強さは分かってしまったのだらう。焦りの表情が顔に浮かんだ。

「……あー」

なのに、なぜだろうか。ジェイクの目に光は消えない。キラキラと目を光らせ、未だに俺を睨みつけてくる。

絶対に諦めない。絶対お前を倒すぞ。と、そう言ってるようだった。

「その身に」

詠唱を再開するジェイクに向けて、もう一度風刃列覇を放つ。アネモス

だがそれも、さっきのがマグレではないことを証明するかのようにかわされ、続きを詠唱した。

「灼熱の炎を宿し」

このまま魔法を放たれても何ら問題ないが、どうせなら完封勝ちがいい。

ジェイクが最後の一言を詠唱し終える前に、ジェイクが放とうとしている魔法を無詠唱で放つことにした。

ドラクシス  
龍爆炎。

心の中でそう呟き、両手を斜め上にかかげる。

それだけで目の前に大きな魔法陣を作り出し、そこから竜の形をした炎を生み出す。そしてそれを、ジェイクに向けて飛翔させた。

「っ」

「おおおおおおおおお。

凄まじい音を立てながら襲いかかる炎の竜にジェイクは恐怖し、必死でかわそうとする。

だが込められた魔力は俺の魔力。威力もスピードも大きさも申し分があるはずもない。炎の竜はジェイクを捕え、大きな口で噛みつき、全てを焼き尽くそうとする。

「……………」

これは人間相手に出す技じゃなかったかもしれない。

そうも思ったが、俺の中じゃ最低限の力に抑えたし、あの男なら死なないだろう。咄嗟に体全体を魔法壁で纏っていたのもある。気絶してるだけで、大した火傷も負ってない可能性すらあった。

まあどちらにせよ、戦いはもう終わりだ。人間には中々強い男だった。

俺は勝利を確信し、リングを降りようとした。その時。

「いでよ。龍爆炎！」  
ドラクシス

龍爆炎の詠唱、最後の一言が　聞こえてくる。

そしてその一言と同時に、俺の炎竜は打ち砕かれ、新たな炎竜が  
生み出された。

「……やるな、こいつ」

そう呟きつつも、俺が焦ることなどない。

人間相手に一度でも魔法を放たれたっただけで、俺のプライドは  
かなり傷つけられたのだが、俺にこんな魔法は絶対効くはずがな  
った。焦るわけも無いのだ。

予想以上の強さを見せるジェイクの心を折るかのように、轟音を  
上げながら飛来する炎竜を、両手を広げて受け止めた。炎竜は俺の  
体に触れるだけで、少しのダメージも与えることなく消滅する。

それを見たジェイクは驚愕に打ちひしがれ、顔を悲痛に歪めた。

だが、なんなのだろうか。

ジェイクの目の光は、未だに少しも消えていなかった。

圧倒的な強さは見せつけたはずなのに、こいつはまだ、俺に勝てる  
と思ってるのだろうか。そこまでして、俺に勝ちたいのだろうか。

魔法壁で防いだとはいえ、灼熱の炎を浴びて服を焦がし、身を焦  
がしたはずなのに、なぜ、少し怯まない。疑問だった。何が、ジェ  
イクをこんなにも動かすのか。

「大気に満ちる空気よ」

また、詠唱か。

一度じゃ俺に魔法が通用しないことに、気付かなかったのかよ。

「我が命に従い」

もう一度空間転移を使い、ジェイクの目の前に瞬間移動する。

ジェイクは中々の反射速度で後退して見せるが、逃しはしない。

拳に1%にも満たない魔力を込め、ジェイクの左わき腹を軽く殴った。

「ごきつ、という鈍い音ともに、数本のあばらがへし折れる感触がする。

「ぐはっ」

体にはあり得ないほどの痛みと衝撃が襲ったはずだ。

なのにこいつは、倒れない。息を荒くし、未だに俺を睨みつけてくる。

ホント、なんなんだ。

「僕は……僕は負ける訳にはいかないんだっ。ミレトスの兵士なんかには、負ける訳には……っ。僕がみんなを、助けるんだよっ」

ジェイクは言いつつ、足に仕込んでいたナイフを二本投げつけ、俺から距離を図ろうとする。

「……あー」

なるほど、そういうことか。この男は、ユーリたちの首輪に掘ら



れた竜の刻印を見て、俺を『ミレトスの兵士』と勘違いしていた訳か。……なんとも、迷惑な話だ。

だがまあこの誤解のおかげで、高ランクのクエストが受けられることになるわけだ。これはこれで、良かったのかもしれない。

呑気にそんなことを思っていると、投げられたナイフがいつの間にか俺に直撃していた。だが、只の尖った鉄程度では俺の皮膚を通すはずもない。ナイフは鉄の床へと落ち、カランと響きのある音がる。まったく。頑丈な体に生まれてきたものだ。

思いつつ、

「おい、お前」

と、空間転移でジェイクの目の前に現れ、俺は言った。

だが必死になっているジェイクには聞こえていないようで、なりふり構わず後退し、詠唱の続きを開始する。

「全てを」

「おいつて」

「凍てつくせ！ 氷空殺クリュール！」

「ちっ」

大気中の原子が動きを止め、俺の周りだけが極寒となる。そして鉄の床から馬鹿でかい氷を召喚し、俺を囲んだ。炎魔法みたいに触

れるだけで消滅ってわけにはいかないから、氷魔法は少しだけ苦手である。

ミクロシス  
照炎。

心の中で呟き、鉄の地面に手をつける。それだけで床に魔法陣を完成させ、灼熱の炎を発し、巨大な氷をすべて溶かした。

ついでに俺の声が聞こえないらしいジェイクを正気に戻すため、空中にも魔法陣を作り出し、凝縮した照炎を球状にして放った。炎球はジェイクの腹に直撃し、ジェイクは苦しそうに蠢く。

本来、照炎は普通の魔術師が使ったらランプを灯す程度の火力しか持たないのだが、俺が使えばここまでになってしまっ（かなり加減しているが）。何の因果があつてか強く生まれすぎた俺にとって、ダメージを少しだけ与えたい時などにこの技は結構使えるのである。

「おい、聞こえるか？」

空間転移で膝をついたジェイクの目の前に移動し、その頬をぺちぺちと叩く。それによってジェイクは失っていた意識を取り戻し、ぱつと立ち上がった。

「！？ くそつ。僕は気絶していたのか!？」

まだ俺の姿を認識していないジェイクは、そう自分を恥じるように言う。

「おいお前」

俺の声を聞き、ジェイクは目の前に居る俺の存在をようやく認識した。そして今までと変わらぬ目で睨んでくる。

「話しかけるなっ。ミレトスの兵士がッ。まだ、まだ僕は負けていないッ！」

ジェイクはそう言って、重い足取りで俺から離れようとする。

「……あー」

最早、誤解を解くのもめんどくさい。

次の一撃で、こいつの意識を根こそぎ取るか。

フロース  
雷光。

心の中で呟き、雷属性最弱魔法雷火を放つ。威力や雷の大きさは押さえに押さえ、ジェイクの体に一筋の電撃を与えた。

アネモス  
風刃列覇をかわせたのだから、万全な状態ならこの技もかわせたかもしれないが、今のジェイクにそんなことができるはずもなかった。雷光は直撃し、ジェイクはその場に崩れ落ちる。

三キロ先の本だろうと読むことのできる視力でジェイクの顔を見ていると、ジェイクは完全に失神していた。さすがに、もう目は覚まさないだろう。

「……終わり、か」

俺は呟き、倒れているジェイクを肩に担いだ。そしてそのまま

ングを降り、ユーリとシーナに、当然の勝利を報告する。

「あー。……勝ったぞ」

ユーリはなぜか放心状態だったが、シーナは目を輝かせながら言うてきた。

「セルにすごいです！ カッコよかったです！」

「……そうか？」

「はいです。セルにはやっぱり、強いんですねっ」

シーナはそう嬉しそうに笑顔を作る。

そこまでべた褒めされると少し照れるが、悪い気はしなかった。

「……まあな。それより、さっさと受付さんに勝ったこと報告しに行くか。今日中にでかいクエストをクリアしなきゃいけない訳だしな」

「えと、はいです」

シーナはそう言って、歩き出した俺の後に続いた。

だがもう一人、ユーリの方はついてきていない。俺は一度足を止め、振り返った。

「あー。ユーリ」

未だ放心状態だったユーリの名を呼ぶと、ユーリは体をびくつと

震わせ、正気に戻る。

「あ。 な、何？」

「いつまでそこいんだよ。さっさといくぞ？」

「う、うん。ごめん」

ユーリはそう呟き、小走りでシーナの隣まで来た。そして自然な動作でシーナの手を握り、口を開く。

「それにしても、あんたって、ホントに強いよね。……驚いたわ」

「まあな」

俺はシーナにも言われた言葉を肯定し、

「だからなんつーか、安心しろ。お前らぐらい、守るのは余裕だからな」

と、付け足した。

自分で言っけて少し照れくさくなったので、歩き出すことでその顔を隠すことにした。

## よーへーギルド バトル後

禍々しい雰囲気を放つ廊下をもう一度通り過ぎ、再び傭兵ギルド内へと戻ってくる。

それによって騒がしかったここ受付場は打って変わり、静寂に包まれてしまっていた。ほとんどの傭兵が俺をミレトスの兵士だと思っっているのか、関わりたくないといった風に見て見ぬふりをしている。

「ほいよ」

そんな居心地の悪い空気の中、俺は肩に担いでいたジェイクをカウンターに置いた。

「この通り俺が勝ったから、Sランククエスト受けてもいいよな？」

「……ほ、ホントに勝ったのですかっ？」

あまり感情の起伏が無さそうな受付さんが、信じられないと言った表情で言う。

「ああ。気絶してんだろ？ こいつ」

「………そうですか。………分かりました。一度約束したのですから、守ります。アダマス様のカードをお貸し願えますか？」

俺は頷き、ポケットに入れておいたギルドカードを手渡した。

受付さんはそれを受け取ると、何やら色々と書き込み、俺に返してくる。

「これでアダマス様はSランクとなります。SSランクのクエストを除き、全てのクエストを受注することが出来るようになりました」

「あー。無理言って、悪いな」

「いえ。お気になさらず。では、SSランク目指して、頑張ってください」

俺は二度目となるこの台詞を訊くと、もう一度掲示板へと足を運んだ。

俺が行く先々に人が居なくなり、道が作られてしまつのは何ともやりづらい。

そしてこれからのことも考え、報酬30万ドラほどのクエストを選んで受注を済ませると、さっさと傭兵ギルドから出ることにした。

「ねえ、セル。良かったの？」

とりあえず町から一度出るために、三番街路北東出口へと向かつてる途中、ユーリはそう俺に聞いてくる。先ほどより人は減ったものの、この市場は未だに騒がしかった。三人で並んで歩くとなるとかなり歩きづらい。

はぐれぬようシーナと手を繋ぐユーリに、俺は応えた。

「……………何がだ？」

「あの、ジェイクって人。あんたを『ミレトスの兵士』だって勘違いしてたんでしょ？」

「あー。多分な」

「いいの？ 誤解とかなくて」

「別に必要ねえよ。あの男に恨まれてようがどうでもいいし、また闘うことになったとしても、どうせ俺が勝つ」

「……いや、えーっと。セルの心配してるんじゃないかって……」

「……？」

「……あの男、未だにあんたがミレトスの兵士、って思ってるんでしょ？ ミレトスの兵士がみんなあんたと同じくらい強いなんて誤解し続けたら、ミレトスの兵士を倒すこと、諦めちゃうんじゃないかなあ、って。そう思ったのよ」

「あー。それも、大丈夫だと思うぞ。闘ってて感じたが、あの男の心は強い。圧倒的なまでの力の差を見せつけたのに、少しも怯まなかった。……よほど、ミレトスの兵士に恨みでもあるんだろう」

「……そう」

「……それに、これを境にもっと修行でも積んだら、あいつは間違いない人間の中じゃ最強になると思うぞ。俺が人間相手に少しでもぞっとしたのは、初めてだからな」



「……まあ、それなら、いいんだけどね」

人間と戦ったのは今日が初めてだから、実際は良く分からないのだが、これで終わりだろうと思っただのに立ち上がり、睨みつけてくる様には、少しだけだがぞっとした。恐怖したとか負けるとか思ったわけではないが、心の内から、何かが震わされた様な気がしたのだ。あんな思い、歴代最強の魔王と戦った時以来である。

「え、えと、セルにいい？」

懐かしき先代魔王との激戦を思いだしていた俺に向けて、シーナが少しだけ遠慮がちに名を呼ぶ。

「……なんだ？」

俺がそう素っ気無く応えると、シーナは一度何かを躊躇い、

「……………」

言葉を溜め、結局、口を開いた。

「……その、セルには……人間じゃ、ないですよね？」

いきなりの質問。背筋がぴきつと氷り、一瞬時間が止まったような気がする。

「……………あー。なんで、そう思った？」

「え、えと。今セルにいが、人間相手に始めてぞっとした、って言うってたから、セルには人間じゃないのかな、って。……………それと、

セルにいの魔力は強くて優しくて、何処か、他の人と違ってたから……」

中々に、鋭かった。

神人の掟としては、『人間などの他種族に自分が神人だと悟られてはいけない』という決まりがある。

俺はそれを思いだして一瞬焦ったのだが、別にもう自分が神人だと知られても問題はないのだ。幼い頃神人育成学校の教師によつて無理やり覚えさせられたから、体が反応してしまつたらしい。

「……あー。……そうだな。別に、隠す必要もないか」

「……え？　じゃ、じゃあ、シーナの言った通り」

全く気付いていなかったユーリが、驚きの声を上げる。

「　まあな。俺は、人間じゃない」

「……じゃ、じゃあ人間じゃないなら、あんたは、なんなの？　……悪魔？　で、デビル？　デーモン？　それとも、サタン？」

「……なんで全部悪魔系なんだよ」

「え？　ち、違うの……？　じゃあ、何？」

マジでそうだと思つていたっぽいのが気に障るが、まあそれはいいか。

俺はユーリの問いに応えた。

「あー。驚くなよ？ ……実は、俺、さ」

ユーリとシーナの、ごくり、という生唾を飲む音を聞き、俺は真実を告げる。

「<sup>テオール</sup>神人、なんだ」

「……………？」

「……………？」

きよとんとする二人。  
声をそろえて言った。

「……………ておーる……………？」

「……………」

……………。  
そういえば。

人間などの他種族に自分が<sup>テオール</sup>神人だと悟られてはいけない、なんて掟があるぐらいなのだから、人間が神人を知ってるはずもないのか……………。

神人の掟はかなり厳しいし、もしかしたら、俺が初めて人間に自分の正体を明かした神人なのかもしれない。  
もしそうだとしたら、俺、歴史的な重要人物になるのな。

「あーさすがに神人は知らないか。でも、嘘じゃねえぞ？ ホントに、神人<sup>テオール</sup>って種族はある。……まあ俺は、神人嫌いだけどな」

「……自分の種族なの？」

「ああ」

「ふーん。……まあでも、あんたがどんな種族だろうと、シーナが優しい魔力を持つてる、って言うてるんだから、関係ないわね。本当は悪魔だとしても、人間として接しさせてもらっわ」

「あーまあ、そうしてくれ」

「えと。わたしも、全然気にしません。セルには人間じゃなくても、優しいセルにいますから」

「……そうか」

「少しだけ嬉しさを感じたが、俺はそれを隠すように素っ気無く答える。」

「そしてそうしたところで、ちょうど、自由と商業の都プリステンダム三番街路北東出口へと着いた。」

## ドラゴンとーばっ

「さて、と」

町から出るためには身分証明書や手続きなどが居るらしいのだが、めんどくさいので門兵数人をチョップで気絶させ、素早く町の外へと出ることにした。ユーリとシーナからは少し失望の眼差しを感じたが、気にしないことにする。

「確かクエストは、リ・ガロス荒野に住みつくデュオ・ケパレード  
ラゴンの討伐だったよな？」

城の外でも続く市場から少し離れ、あまり人の居ない草原に出た  
ところで、俺はそう話を切り出した。

ランプのないこの場は星空以外に明かりがなく、かなり暗い。息  
を吐けば白くなるほど寒いにも関わらず、虫は忙しく鳴いていた。

「そうね」

「んじゃ、さっさと行くか。歩いてたらかなり時間かかりそうだし、  
飛んでくぞ」

「……い、いや、飛ぶって。……無理よ。そんなの」

「あー、そうか。じゃあ」

ウーラモス  
風魔浮。

心の中でそう呟き、シーナとユーリの体重をほとんど失くす。それにより重力を受け無くなった二人は、空中に浮遊した。

「わ」

「!?」

ウィラリユクス  
天翼飛翔。

心の中でもう一度呟き、驚いている二人と同じ高さまで飛び上がる。

市場のランプが地上に点々と明かりを作り出す様さまが視界に入ってきた。周りに何も光りがない中、それは少しだけ綺麗に見える。

「これで、お前らも飛べるだろ?」

言いつつ、俺は二人の手を取って固く握った。

「わ」

「!?」

それだけで、体が浮かび合った時と同じように驚く二人。だが空中にいることに慣れていないのだろう。あまり上手くは動けていなかった。

「い、いきなり何!?!」

「あーいやなんっーか。そのままじゃスピードは出ないから、俺が引っ張ろうと思ってな」

「そ、そう。でも、強く握りすぎじゃない？」

「いや、これからかなりのスピードで飛ぶつもりだから、一瞬でも手を離したらやばいんだよ。……嫌か？」

「……べ、別に嫌じゃないけど……」

「じゃ、お前もちゃんと握っとけよ」

「……うん」

ユーリは呟き、両手で俺の手を握った。

「シーナは、別に嫌とかねえか？」

「えと、全然大丈夫です」

「そうか。 んじゃ、行くか」

アミュンボース  
防御光陣。

俺は空気抵抗を失くすために光の結界を張り、飛び立とうとする。

が。

「ちょ、ちょっと待って。セル」

と、ユーリの声。

「……なんだ？」

「行く前に一応聞いてくけど、リ・ガロス荒野の場所って分かるの？」

ものすごく初歩的な質問。

そんなの知らない訳ないだろ、と一瞬思うが、考えてみると、誰かに聞いた覚えがない。

「……あー。……いや、分からん」

「……………」

ユーリは言葉を呑んで絶句。俺も神人の知り合いに言われ続けた自分の馬鹿さを、痛感した。

だがまあ、大丈夫だろう。

「……ど、どうするの？ 一回、町戻る？」

「……いや、大丈夫だ。リ・ガロス荒野は何処か分からないけど、デュオ・ケパレードドラゴンの居場所は探知できるはずだからな」

「……そう。なら、良いんだけど」

まあ、デュオ・ケパレードドラゴンが半径千キロ以内に居ればの話だがな。

思いつつ、

ブサフン  
魔探知。



探査魔法を心の中で唱え、デュオ・ケパレードドラゴンの『気』を探る。デュオ・ケパレードドラゴンは魔界にも存在する凶暴なドラゴンなので、荒々しい『気』を隠すことなく発しているはずである。一度感じたことのある『気』だし、半径千キロ以内に居るならば、探すのは容易だろう。

「……見つけた。南南東、320キロ先だ。　　今度こそ、行くぞ」

俺はぎゅっと二人の手を握りしめ、空中で加速する。そして一瞬で音速を裕に越え、見る見るうちに景色を通り過ぎていった。

普通これだけ凄まじいスピードを出していれば、空気抵抗で喋るどころではなく、人間の身なら破滅してしまうほどなのだが、先ほど張った結界により害はない。

シーナが興奮し、嬉しそうに言うてくる。

「す、すごいですっ、セルにい。こんなに早く飛んでますっ」

そんなシーナの笑顔を見てみると、なんだかもっと喜ばせたくない、

「あーもっと、早くできるぞ?」

と、そう口走っていた。

「ホントですかっ?」

俺は頷き、マックススピードまで加速する。

「うわあ〜」

スピードが上がりすぎ、最早景色は見る事が出来ない。面白いほどにめまぐるしく景色が変わり、一瞬見えたものでも、そのまた一瞬後には視界の端にすら捕えられないほどになっていた。こんなスピードを出したのは、久しぶりだった。

そもそも、俺が全力で魔法を使うなんてことは稀で（本気を出すと疲れる）、生涯を合わせても、両手で数えきれるほどしかないのである。

そんな俺に『喜ばせたい』って思いだけで本気を出させたのだから、シーナは不思議な少女だ。シーナの笑顔には、中毒性が含まれているような気さえした。

「……セル。あんたも、シーナの笑顔の虜になっていくのね」

ふと、そんな呟きが後方から聞こえてきた。俺はシーナに聞こえないぐらいの音量で応える。

「……なんだよ、それ」

「……シーナの純粹無垢な笑顔が見たいってだけで、あたしたちの奴隷仲間みんなシーナに優しくしていたのよ。今のあんたも、そんなみんなと同じ顔をしていたわ」

「……マジか？」

「うん。……マジ。……でも、それはしょうがないのよ。あたしたちが反乱を起こした理由の一つとして、シーナの笑顔を守るため、

っていうのすらあつたんだからね」

「……そりゃ、すげえな。まあ確かに今の俺なら、シーナの笑顔を壊そう者が居るなら、瞬殺しちまうような気はする」

「……そう。……もう、そこまで症状が進んでたの。また、敵が一人増えたわね」

「……敵？ 俺がか？」

「そう。あんたよ。……シーナの虜一号はあたしなんだから、あんたみたいな新米に、シーナの笑顔は渡さないわ」

そんなことかよ。と俺は思うが、ユーリは結構真面目な顔で言っていた。よほど、シーナのことを好きなのだろう。

「……あーまあ、別に好きにしてくれ」

呆れ顔で俺はそうユーリに伝えて見せる。

「……じゃあ、シーナがあんたに笑顔を向けたら、顔を逸らしてその笑顔を見ないようにすることはできる？」

「……それは」

どうだろうか。できる、だろうか。

例えば盗賊が襲ってきて、俺が簡単に潰すとする。シーナは当然俺に感謝し、一切の陰りのない純粋な笑顔を向けてくるだろう。

その笑顔に俺は顔を背ける、ってことか……？ できるのか？  
そんなこと。

そんなことをしたら、シーナは傷つき悲しみ、俺がシーナのことを嫌いになったとでも純粹な心で勘違いするかもしれない。そして色々と転じて、シーナは俺に笑顔を向けてくれなくなるかもしれない。そんなこと、耐えられるのか？

俺は自問自答をし、簡単に答えを導き出す。

「……………無理、だ」

俺のプライドはあっさり負け、そう消え入るような声で呟いた。

「はあ。……………やっぱりね。……………でもまあ、シーナの笑顔は麻薬よりも中毒性が高いんだから、仕方がないわ。シーナと出会ってまだ一日も経ってないあんたですら、これなんだから……………。……………でも、あたしは信じてるわ。シーナが一番好きな人は誰？ って訊かれたときに、満面の笑顔で『お姉ちゃん！』って応えてくれることを……………」

「……………」

ものすごいまでの愛情だった。姉妹愛を通り越している。

「ちょっとシーナに懐かれてるからって、あんたには負けないんだからねっ！」

宣戦布告をしてくるユーリ。

『あーまあ、……………好きにしてくれ』

いつもの俺なら、そう答えただろう。  
だが、今の俺にその言葉を発することは出来なかった。

ドラゴンとばつ？

無限に広がるかとさえ思える広大な荒野。

荒々しく削られた巨大な岩はあらゆるところに転がっており、平坦な場所など何処にもない。草木は申し訳程度に見えるぐらいで、荒れ狂う無数の竜巻や砂嵐などにより、いつ絶滅してもおかしくないほどだった。ちらほらと見える生物も、この悪環境の中生き残るためかほとんどが屈強な怪物であった。

ここが、リ・ガロス荒野か。なんともまあ、壮絶な場所である。

こんなところに住み、主をやっているぐらいなのだから、デュオ・ケパレードドラゴンはさぞかし屈強に育ったのだろう。

思いつつ、全生物を合わせても最強の視力であろう目を凝らし、デュオ・ケパレードドラゴンを探す。そして探し始めてから数秒後、俺は激しい砂嵐の先に巨大なドラゴンを見つけた。おそらく、あれだろう。俺の知るデュオ・ケパレードドラゴンの魔力にも一致する。

「見つけたぞ。ここから約150m先だ」

150mぐらいなら空間転移で一気に行けるだろうが、残念ながら空間転移ではユーリとシーナを運ぶことが出来ない。

俺はやむを得ず普通に飛んで行くことにするが、いきなりドラゴンの前に現れたら、シーナとユーリがやばいことを思い出す。

そうだな。

トイコス  
守障壁。  
アミコンボテ  
聖光防壁。

俺は一気に最強の結界魔法を二つ、ユーリとシーナの半径10mにかけた。さきほど風よけのために使った防衛光陣も合わせ、この三重の防壁を破れる者は全世界を合わせても数人と居ないだろう。

まあとにかく、これで二人の心配はまったくする必要がなくなった。

俺はもう一度二人の手を握り、飛び立つ。

空間転移を使わずとも150mという距離を一瞬で飛び抜け、すぐ目の前には巨大なドラゴンが現れた。

「シーナ、ユーリ。結界から絶対出るなよ。ここで見ててくれ。すぐ終わる」

俺は二人が頷いたのを確認すると、デュオ・ケパレードドラゴンと対峙した。

「ごつごつした岩肌に赤眼二頭が特徴的で、いきなり現れた俺を、灼熱の鼻息で威嚇する。」

ぶぎやあああああ！

二つの頭のうち、右側がそう吠え、それが合図かのようにドラゴンは飛来する。そしてブレスを一度吐き、俺に突撃してきた。

体長は俺の20倍ほどで、体積はおそらく千倍以上。当たったら普通の人間ならさぞかし強烈なのだろう。

だが、この程度のパワーを持つ相手とは何度も闘ってきている。止めることなど造作も無いことだった。

俺はブレスをバックステップで難なくかわし、両手に少しだけ魔力を込める。そして、突進してくるドラゴンの頭を押さえた。

ぐぎぎぎぎやあああああ！

最初に左側の頭を止めると、ドラゴンはそう悔しそうに吠え、今度は右頭で突撃してくる。俺はそれをも止めると、両手で二つの頭を持ち上げ、ふんっ、と真横に遠心力で投げつけた。

体長30mにもなるうドラゴンを軽々20mほど投げ飛ばすと、

ケイケンズ  
炎轟龍巻。

心の中で呟き、砂塵の竜巻に負けぬ巨大な炎の竜巻を作り出した。

それを魔力操作でドラゴンにぶつけると、ドラゴンは竜巻の回転力に負け、浮き上がる。ブレスを放ち、もがいても見せたが、そんなちんけな攻撃で俺の魔法が相殺されるはずもない。

ドラゴンは今頃、炎の竜巻の中、無限の灼熱地獄を味わっている頃だろう。

ぐぎやあああああ！



「……………」

断末魔のようなその叫び声もしばらくすると聞こえなくなり、俺は炎の竜巻を消した。

かなり上空まで浮かび上がっていたドラゴンは、どたつと地上に落ち、もう再び動き出すことはなかった。

「終わり、だな」

俺はそう呟くと、討伐の証しにデュオ・ケパレードドラゴンの赤眼を四つ持ち帰らなければならぬことを思い出す。丸焦げになっているドラゴンに近づくと、俺は赤眼をえぐり取った。血で手が赤く染まってしまったが、気にはならない。

荒れた地上で手を握り合いながら立つ二人の少女。そんな、ぼつんとこの荒野に取り残されてしまったような二人の元へ、俺は戻ることにした。

「あー、終わったぞ」

そして二人の前に付くと、俺は頭をぽりぽりと掻きながらそう言った。

すると、

「せ、セルにいつ。その手どうしんですかっ？」

と、シーナの驚き心配する声。

「あー、大丈夫だ。シーナ。俺の血じゃないから」

「そ、そうなんですか……?」

俺自身は気にならないが、少女の前で血まみれの手でいるのはやはり良くないことなのかもしれない。そう思い、魔力で消すことにした。

「ああ。ほら。傷ないだろ?」

浄化した手をシーナに見せると、シーナは安心した表情をし、

「……………それなら、えと、良かったです」

と、控えめな笑みを零した。

俺はその笑顔を脳裏に収め、ユーリとシーナの手を握る。

「んじゃ、さっさとギルドに戻るか。もう、夜遅いしな」

そしてそう言って、俺はもう一度、超高速で飛び立った。

## ミレトスの首輪

「そういえば、ユーリ」

さすがにまた本気で飛ぶのはめんどくさかったので、さっきより押さえ目のスピードで飛遊しながら俺は話を切り出した。

「……？ 何？」

「その首輪、邪魔じゃねえか？」

「うーん。もう慣れちゃったけど、確かに、邪魔かもね」

「あー。……じゃあ、取ってやるうか？」

「ほ、ホント!？」

ユーリは思わず大きな声を出す。反対の側で俺と手を繋ぐシーナに「どうしたの?」といった表情で見られ、思わず口を塞ぐ。おそらく、首輪も『ミレトス』の話題に入ると思ったからだろう。

「そんなぐらい、大した手間でもないからな」

「……嬉しい、けど、……でも、この首輪にはかなり強い魔力が込められてて、簡単には取れないわよ? それに、取ったら死ぬって訊いたこともあるわ」

「大丈夫だ。俺に魔力で勝てる人間が居る訳ないだろ? その首輪の魔力全て消し去ってから壊してやるよ」

「……………大丈夫、かな」

「……………信用、できねえか？ まあ、別に、それならそれでもいいんだが」

ユーリは首を振りながら答えた。

「ううん。信用、するわ。……………これでホントにこの首輪を外してもらったら、恩がさらに増えちゃうけど、『ミレトス』とはもう決別したいしね。……………それに、今までのあんたの行動を見てれば、信用できないはずがないもの」

「そうか。……………まあ、それならいいが」

「うん。お願い」

「ああ。だがなんつーか、今はお前とシーナの手が離せないから、地上に降りてから外してやる」

「……………うん」

ユーリはそうしおらしく呟くと、両手で俺の手をぎゅっと握る。その行動の意味がよく分からなかったが、微妙に気まずさを感じたので、俺は飛行スピードを上げることにした。

ユーリまでもが俺に本気で魔法を使わせるとは。この二人は不思議な姉妹である。

いや、それとも、人間が不思議な種族なのだろうか？

「……着いたぞ」

話しているうちに『プリステンダム』など裕に通り過ぎていたので、俺たちは『プリステンダム』を見失ってしまった。

さすがに町を探知することなどできないし、魔力が弱すぎると、人間でも探知することが難しくなってしまう。

俺と戦ったジエイクなら大きな魔力を持っているだろうから、ジエイクの『気』を探そうともしてみたが、あいつは常日頃から『気』は消してるらしい。この俺でも探知することが出来なかった（まあそもそも、探知魔法の鍛錬はサボり続けたから得意ではないのだが）。

だからやむを得ず、適当にずっと飛遊し続けることになり、30分ほど経っただろうか。

俺はようやく、『プリステンダム』を見つけることが出来たのだった。

クエスト遂行時間より戻ってくる方が時間がかかるとは、なんとも計画性がなかった。

俺はそんなことを思いつつ、未だに明かりが見える市場から離れた草原へと降り、シーナとユーリに掛けていた防御魔法を解こうとする。が、俺の魔力はほぼ無限だし、寝たままでも持続できる。俺と離れてるときに、『ミレトスの兵士』に捕まっても面倒だし、三重の防御壁は掛けたままでいることにした。

「えーっと、その、……セル」

ふと、ユーリは口ごもりながら俺の名を呼ぶ。

「あー。首輪だったな。約束通り、外してやるよ」

俺はそう呟き、ユーリの首に手を伸ばした。そしてどす黒い竜の刻印に触れ、首輪の魔力を感じ取る。中々に高位の魔術師が呪いを掛けたことは伺えるが、まあ、それほどではない。

俺は微量の浄化魔力を指先から流出させ、その呪いを消し去った。

これでもう、壊しても大丈夫になっただろう。

そう確信し、俺は人差し指でとん、と首輪を叩いた。すると首輪は、ぱりんと乾いた音をたて、粉々に砕け散る。

その様子を眼で見ていたユーリは、複雑な表情で言った。

「……ホントに、外してくれたのね。……その、今日何回言えばいいのか分からないけど、……ありがとね、セル」

「あー、まあ、気にすんな」

言いつつ、俺はユーリに背を向け、今度はシーナの方を向いた。

「シーナ。一回、目え瞑ってくれ」

俺がそう言うと、姉の首輪がいきなり壊れて困惑していたシーナだったが、

「えと、はいです」

と、素直に眼を瞑ってくれる。

俺はそんなシーナの首に手を伸ばすと、さきほどと同じように、首輪を粉々にした。

「わ」

いきなり首輪の割れる衝撃がして驚いたのか、その声を上げ、シーナは眼を開いてしまう。そして首に違和感を感じ、小さな手で首をべたべたと触り始めた。

「……………あ。……………首輪が、ないです。……………首がすーすーします」

普通の反応。

首輪には『ミレトス』の刻印が掘られていたし、首輪について触れたらシーナがまたヒステリーを起してしまうんじゃないかと俺は考えていたのだが、まあ、さすがに杞憂だったようだな。

「あー、勝手に取ったが、別に良かっただろ？」

「えと、はい。もちろんです。何から何まで、ありがとうございませう。セルにい」

シーナはそう言って、笑顔を浮かべた。

なんというか、やはりこの笑顔は和むものだった。

俺はそんな一歩間違えればロリコンに間違えられそうな危ないこ

とを思いつつ、ギルドに戻るため、城門へと歩き出した。

さっき気絶させた門兵は復活していたが、また、気絶してもらったことになるだろう。周りの人間にばれたら面倒だから、慎重に、素早く、だ。



## 報酬

門兵を自然な動作で気絶させ、なんなく『自由と商業の都プリステンダム』へと入る。

さつきよりユーリとシーナの失望の眼差しが痛く感じたが、今回も気にはならない。

俺が正義を振りかざすヒーローだと思ったら大間違いだ、ということを知ってしまったらいい機会だろう。

シーナとユーリの会話に混ざることなく歩き続けていると、すぐに傭兵ギルドは見えてきた。

俺は特に躊躇うことなく中に入り、すぐに受付さんの元へ行く。そしてポケットからデュオ・ケパレードドラゴンの赤眼を四つ取り出し、カウンターに置いた。

「これでクエストクリア、だろ？」

俺がそう簡単に言うと、受付さんは驚き、周りの傭兵たちはざわめき始める。

「も、もうクリアしたのですかっ？」

「ああ。ちゃんと証しもあるだろ？」

「……は、はい。そ、そうですか。では、この赤眼が本物であるかどうか、鑑定させて頂きます。少々お待ち下さい」

受付さんはそう言って俺に一度お辞儀をすると、他の従業員を呼ぶ。そしてその従業員が赤眼を手に取り、眼を凝らして観察し始めてから数分。ようやく鑑定は終わったようだった。

受付さんはその従業員と少し話しをしてから俺の方を向き、口を開いた。

「……鑑定の結果、本物であることが分かりました。……こちらが報酬の30万ドラになります」

俺は受付さんに差し出された『一万』と書かれた紙幣の束を受け取る。

受付さんはそれを確認し、続けた。

「……それと、こちらの赤眼は、どういたしましょうか？」

「……？ どうする、って？」

「この赤眼は、一つ10万ドラでお売り頂くことが出来るのですが、買取してもよろしいでしょうか？」

「四つで、40万か。悪くないな。売らせてもらおう」

「ありがとうございます」

受付さんは頭を下げ、カウンターの下から何かを取り出す。

「では、こちらが追加の40万ドラになります」

そしてそう言いながら、もう一度ドラを差し出してきた。

俺はそれを受け取ると、もう用はないだろうと思ひ、背を向けようつとする。

が、まだ続きがあるみたいだ。

「他に、剥ぎ取った素材などありますでしょうか？」

「……他に？　なんか取ってくるものでもあったのか？」

「……あ、いえ。デュオ・ケパレードドラゴンの鱗や骨盤などは武器や防具などの素材として利用されているため、高額で買い取りを行っているのですが、そういったものはお持ちでないでしょうか？」

「あー、そうなのか？　取ってきてないんだが……。まあ、別にいいか」

そんなたくさんドラは要らないし、もう一度リ・ガロス荒野に戻るなど考えるだけでめんどくさい。

『おい、聞いたか？　あいつ馬鹿だぜ。折角ドラゴンを討伐したつてのに、素材を剥ぎ取ってこないなんてよ。素人か？　運で倒したんじゃないのか？　あいつ』

『ああ。たまたまドラゴンが倒れていたに違いねえ。あんな奴がドラゴンを倒せるもんかよ』

ふと、俺がドラゴンを倒したと聞いてざわめいていた傭兵たちが、そんな会話を始めた。ユーリとシーナにミレトスの刻印がない今、俺はミレトスの兵士には見えないのだろう。

うざったいと思いつつも、俺は無視することを決め込んだ。

だがあるところか、陰口を言う傭兵の代表的数人が、俺に突っかかってきたのである。

「おいお前。何処の所属だ？ 新人か？」

……なんという、典型的なめんどくさい野郎だ。

「……………」

俺は受付さんからギルドカードが返却されると、そいつらを見無視してここから出て行こうとする。だが、

「おい待てよゴラ」

と、その内の一人が俺の肩を掴んできた。

「無視か？ てめえ。何処の新人だって訊いてんだよ」

自分を強い人間だと思っているのか、こいつは凄み、俺を睨みつけてくる。

まったく怖くなかったが、これでも精一杯やってるつもりなんだから。

「あー。めんどくせえな。いいからどけよ」

俺は無気力にそう応えてやると、男は激昂する。

「ンだとゴラツ！ てめえSSランクの俺に向かってそんな口聞いているのかおいッ！ 大体てめえ、女連れこんで傭兵ギルド来るたあどついうつもりだッ？ てめえごときがドラゴンを倒しただどッ！ ふざけんなッ！」

ガンをつけ睨みつけてくる傭兵に、その後ろの取り巻き数人。すぐにどけば、見逃してやろうと思っていたのに。

なんともまあ、愚かでうざったい奴らだ。

めんどくさいが、消えてもらうことにするか。

「……失せる」

俺は不機嫌さ一杯の声でそう呟き、押し込めていた殺気を少しだけ開放する。

だが自称SSランクなだけはあり、薬屋で出会った盗賊よりは根性があるらしい。足をかくかくと震わせ、汗をだらだらとこぼすだけで気絶には至らなかった。

得体のしれない恐怖を感じ、自分の意思に反して震える足に驚き、男は声を張り上げた。

「！？ て、てめえ何者だ！？」

唇を震わせながら強がるその姿は滑稽で、威厳もクソもあつたもんじゃない。

「……うるせえ。どけ」

これが最後の忠告のつもりでそう言ったのだが、男は意地からか、そこからどここうとしなかった。

めんどくさいが、仕方がない。こいつにも、公衆の面前無様にも失神してもらうことにしよう。俺は無限に放出できる殺気を、無言で強めた。

「……………あ、あ」

すると、俺に突っかかってきた男は言葉にならない喘ぎ声を上げ、白目をむく。そして今までもぎりぎりの所で意識を保っていたのか、勢いよくその場に倒れ込んだ。続いてこの男の取り巻きにも殺気を送ってやると、みな同様に一瞬で気を失った。

音を立て崩れ落ち、その一部始終を見ていた他の傭兵たちは、息を呑む。

「あー」

……………こんな奴が、SSランクなのかよ。  
ジェイクはSランクだったらしいが、あいつの方が全然強かったな。

と、俺は一度嘆息し、

「ユーリ、シーナ。……………行くぞ」もうここから出ていくことにした。

口を開きながら唾然とする受付さんや傭兵たちを無視し、俺は出口へと直行する。

ユーリは少し気分が良さそうに、シーナは少し申し訳なさそうに、俺の後に続いた。

……ホント、人間にはいろんな奴がいる。

悪い奴。めんどくさい奴。

良い奴。親しみやすい奴。

ホント、色々。

めんどくさいが、面白いものである。

## よくじつ

現在時刻は午後0時35分。

一晩だけ借りた宿で、俺は大分遅い目覚めを迎える。

時間にしたら約12時間ほど眠っていた計算になるのだが、正直まだ寝足りなかった。

というのも、俺は先日久しぶりにベッドの上で寝たのである。

今まで宿を借りる事すらめんどくさかった俺は、別に寝るのぐらい何処でもいいやと毎日野宿だった。いつも何も無い荒野にただ寝そべるだけで、ごつごつの岩が当たると結構ウザかったりもしていた。

だが先日使ったベッドはごつごつどころか、ふわふわしていたのである。

ベッドに包まれる心地よさには、抗いがたい引力があるとすら思えるほどだった。

元々自分の欲求には滅法弱い俺であるから、その『引力』にどんどん引き込まれ、起きるに起きれなくなってしまった、ってわけである。まあ、起きる気がなかったとも言うが。

そんな俺が今現在やっと目覚めた理由は、単純だ。

普通にユーリが起こしてきた。



曰く、『ミレトスの兵士』が数人巡回しているのを窓から見かけたらしい。

木の床に無機質な机が一つあり、並べられた二つつのベッド（ユーリとシーナが一つのベッドで寝ていた）。それだけしかない質素な宿舎を一度眺め、一つ欠伸をする。そして寝癖のある髪を掻きながら、ユーリに向けて言った。

「あー、そうだな。ユーリ」

「なに？」

「この町、出てくか」

別に『ミレトスの兵士』を迎え撃ってもいいが、何より俺がめんどくさかった。

それに『ミレトスの兵士』の目当てはシーナとユーリだろう。倒してもここに居ることが割れていれば、さらなる援軍を送ってくる可能性が高い。そうだったら、もっと面倒なのである。見つかる前にさっさととんずらするのが、最も労力を使わないで済む方法だろう。

「そうね。それがいいかもしれないわね。……でも、行く当てはあるの？」

「ない」

「……いい、言い切ったわね」

「別に行く当てなんかいらんだろ。適当に飛んで、着いた町が目的地。それでいいじゃねえか」

「……まあ、そうね。特に目的がある訳でもないしね」

「んじゃ、そうと決まったらさっさと行くか」

俺はそう言つと、早速この部屋から出ることにする。

特に持ち物などないし、昨日シーナにあげたローブ以外、服も一枚しか持っていない。着替える必要もなく、そのまま借りた部屋から出て一階の受付へと向かった。

相当がたがきているのか、宿の階段は一步降りるごとにみしみしと音を奏でる。段差が急なので、中々に降りにくかった。

シーナとユーリも無事一階まで降り、宿屋のロビーまで来ると、俺は宿主であるおばさんに向けて言った。

「あー。おばさん」

「なんだい。出て行くのかい？」

「ああ」

「そうかい。またいつでもきなさいな」

「まあこれから他の町に向かうわけだが、縁があったらな」

「それじゃ、あたしはその縁に期待するよ」

おばさんはそう言って、ふくよかな顔でほほ笑む。親しみやすいおばさんである。

俺はそんなおばさんに一日だけが世話になったことを思い出しつつ、この宿から出ていこうとした。  
が、

「ちょっとお待ち」

と、おばさんの声。

「あんだ。その二人の嬢ちゃんは連れなのかい？」

「ああ。そうだが？」

俺は振り向き、応える。

「女の子にそんな貧相な服着せて。男ならもつとまともなもん着させてやんなさいな」

俺は二人の格好を見て、そう言えばと考え始める。

確かに、シーナにローブを一枚与え、二人の首輪を外してやりたりはした。だが、それ以外は基本奴隷服に裸足なのである。さすがに、女の子二人にこんな格好をさせるのは駄目なのかもしれない。

というか、今まで俺はこんな貧相な格好をしている二人を連れ歩いてきたのか、と。

周りの奴らはどう思っていたのだろう、と。急に気になり始める。

首輪は外してやったし、奴隷に見えていないんだとすれば……。

甲斐性なしの男、とかか？

「……あー」

元々周りの評価など対して気にする俺ではないのだが、それはかなり屈辱的だった。

「そうだな。次の町行ったら好きな服買わせてやるつもりだ」

このおばさんにも甲斐性なしと思われてはたまらないので、俺はそう見栄で言ってみせる。

「そうかい。それならよかったよ」

「ああ」

おばさんはもう一度ほほ笑んだ。

俺はそんな温かみのあるおばさんの笑みを記憶に残し、今度ここから出ることにした。おばさんも俺を止めようとはせず、宿から出る直前まで、終始その笑顔のままであった。

そして宿から出て扉を閉めると、相変わらず人の多い市場が、目の前一带に広がった。反対側の店が見えないほどである。今は昼間で太陽が出ていることが関係しているのか、幾分か夜よりも活気があるように思えた。

そんな市場の喧噪を少しだけ眺め、立ち止まっていると、ユーリが俺の名を呼んだ。

ユーリの顔を見て、なんだ？ と俺は応える。

「えーっと、その。ホントに、……服買ってくれるの？」

「あー、まあな」

「……あたし奴隷服以外着たことないから、テンション上がったたくさん買おうとしちゃうかもしれないわよ？」

「ドラは結構あるんだし、別にいい。そんなぐらい」

「……そう」

ユーリは普通に納得したかと思うと、すぐに表情を変え、

「それは、す、すごく、楽しみだわ！」

と、そう興奮気味に言った。

「そんな嬉しいのか？」

「あ、当たり前でしょ？ ミレトスの王女とかがいつつもオシャレできれいな服着てるの見て、あたしもいつかああいうの着てみたいなあ、って小さいころからずっと思ってたのよ。きれいな格好するのは、……その。女の子の憧れだから。……ましてや、あたしは奴隷服しか着てこなかったわけだしね……」

「あーまあ良く分かんが、とにかく、欲しい服は買ってやるから安心しろ」

「ありがとね！ ホント、楽しみだわ！ あんたに会ってから一番あんたを『使えるっ！』って思ったわね」

「お前、今さらって聞き捨てならない事言ったぞ」

「気にしない気にしないっ」

「……あー」

駄目だ。

なんか今のユーリはテンションが上がりすぎていた。嬉しいという気持ちがバンバン伝わってくるだけだから別に嫌ではないのだが、今のユーリと話すのはめんどくさい。

俺はそんなユーリを無視し、シーナに話しかけることにした。

「シーナも、服いるよな？」

「え、えと。わたしも欲しい、ですけど……。その、お姉ちゃんが好きなだけ買って、余ったドラで少しだけ買ってもらえれば、わたしは十分です」

「シーナは、ユーリみたいにきれいな服とかに憧れないのか？」

「……えと、わたしも憧れますけど、でも、わたしは自分がきれい

になるよりも、お姉ちゃんがきれいになってくれる方が嬉しいですから」

シーナはそう言って恥ずかしそうに笑みを浮かべる。

この言葉をユーリにも聞かせてやりたかったが、ユーリの意識はもう完全に服を買ってもらうことにあるらしい。俺達の会話など聞こえていないようだった。

それにしても、ユーリのシーナへの愛情もそれはそれは大きかったが、……そうか。

やはり、シーナもユーリのことを同じぐらい好きなのだろう。

兄弟はいないから良く分からないが、大した姉妹愛じゃないか。

とある神人（テオール）（前書き）

ようやく新キャラ登場です。

視点が変わります。



## とある神人（テオール）

テオール  
神人。

神に作られし高等な種族。

神の命にのみ忠実に動く、戦闘種族。

そんな私たちの種族が与えられた役目。

それは魔界、天界、人間界。この三界の力関係を均等に保つことであつた。

すなわち、強くなりすぎた勢力。世界を滅ぼすほどに強くなり過ぎた勢力を、潰せばいいのである。

私たち神人<sup>テオール</sup>は、それを行うことに何の疑問も抱かなかつた。

それはしょうがないこと。そう神に作られてしまったのだから。

私たちはそれに不満を持たなかつたし、むしろ命を与えてくれた神に、私たちを創造してくれた神に、感謝をしていた。

だが、何処にだって例外という者はいる。

テオール  
神人の中にも 居た。

全てがおかしく。

全てが 異端。

何処を取つても、何をさせても、神人と言える要素など存在し得

なかった。神人という種族に収めておくには、あまりにも大きすぎる器を持っていた、一人の男。

彼はそんな異端児だった。

だがどれだけ彼が異端であろうとも、名目上は列記とした神人。彼は他の神人同様成長し、神人育成学校に通った。

教える前からなんでも出来てしまう彼。教える前から既に教員の実力を超えてしまっていた彼。

その存在感はあまりにも異質で、大人たちはみな彼に恐怖した。そしてそんな彼の異質さは、ある事件により瞬く間に第四の世界神界へと広がり、やがて神々すら彼を恐れた。

彼がいずれ、神々を滅せてしまうほどの力を持つてしまうことに、神の命をまるで聞かない異端児であることに、神々は恐怖した。

だけど、そんな彼と同級生だった私は彼を怖いと思ったことは一度もなかった。

今考えると子供だったから、彼の異質さに気付いていなかっただけかもしれないが、少なくとも私にとって彼は恐怖の対象ではなかった。

ただ、私は彼をかなり意識していた。

彼がいるから、私はいつも二番だったのだ。

どんなに頑張っても。どんなに辛い訓練をしても。どんなにいい

成績をとって教師に誉められても。

何もしていない彼に、一つとして勝てるものはなかった。

悔しかった。

私も十年に一人の逸材と言われていたのに、彼には全く歯が立たなかったことが。彼との前に、大きな大きな壁を感じてしまったことが、悔しかった。

悔しくて、何度も彼に戦いを挑んだが、それでも勝つことは敵わなかった。

だけど、どれだけ力の差を見せつけられようと、彼の存在が遠くなっていくのを感じようと、私は彼に勝つことを諦めなかった。悔しさを糧に、絶対に諦めなかった。

でもやっぱり、諦めないというだけでは何も起こらないのだろう。やはり、私が彼に勝つことなど一度もなかった。

しまいには、彼に決闘を申し込んでも「あー、……めんどくせえ」の一言で断られてしまうようになってしまったのだ。

むかつきはしなかった。

私が弱いのが、いけないのだから。

だけどそれでも

例えきっぱり断られたとしても、諦めることは出来なかった。

私は最早 彼に依存していたのかもしれない。

彼に少しばかりの敵意を向けるとともに、いつしか私は彼を目標とし、彼に憧れていたのだ。認めたくはなかったけど、それは確かな事実だった。

そんな私の挑戦が何年も続き、めんどくさいと言われても少しずつ挑戦し続け、どれだけの月日経っただろうか。

私たちがもう大人と言える年齢になった頃。

私の挑戦は、呆気なく終わった。

勝ったわけではない。

諦めたわけでもない。

彼が、神々に追放されたのだ。

理由はただ彼が怖かっただけ。

彼が何か悪いことをしたわけでも、神に敵意を向けたわけでもない。

それなのに彼はただ強すぎるというだけで、神界から追放された。

私は彼がその理不尽さに、反発するだろうと思っていた。

だけど、そんなことはなかった。

私は忘れていたのである。

彼がものすごく、めんどくさがり屋だということ。

神を倒す実力があいながら神に反発しようなど思わないことも。わざわざ力で誰かを屈服させ、従えようとしもないことも。全てめんどくさいだけ。

彼の實力があれば望んだことが全て叶うはずなのに、ホント、彼は異端児だ。

それが彼の良いところでもあるのだけど、今回は私にとって悪いことでしかなかった。

彼は追放されてすぐ「別に良い。わざわざ反論するのめんどくさいしな」と、簡単に出て行ってしまったのだ。

人の気も知らないで。

私も付いて行きたかったが、テオール神人である私の理性が、それを拒んだ。『無断で神界から出ることは神の意思に背くことと同等である』、という掟に気圧され、付いて行くことなど出来ようがなかった。

だけど彼が神界から出てゆき、数年がたった今、私はやっと、あることに気付いた。

彼をおかしな神人だと思い、おかしな神人だと彼に言い。

彼の異質さに憧れ、彼の異質さを目標にし。

ずっと彼を異端児と捉え、自分は普通の、ちゃんとした神人だと思っていた。

だけど、それは違うのだと。

私は普通の神人なんかじゃないのだと。

彼を追い求めるあまり、いつしか私も、彼と同じ『異端』になっていたのだと、気付いてしまったのだった。

普通の神人は、神への忠義心で一杯。  
軽い気持ちでふと、神の意に反することと思うことすら、あり得ない。

生まれた時から神にそう設定されているのだろう。事実、彼と会う前の幼き私もそうだった。

だけど、どうだろうか。

彼がいなくなっただけからの私は、毎日神界から出ていくことを考えている。

積み上げた地位を全て捨て、神の意に逆らってまで私は彼にもう一度挑戦しに行きたいと思っている。

そしてその想いは日に日に強くなってゆき、彼に依存していた私は、薬がキレた者のように苦しみ、他のことなど何も考えることが出来ないほどになっていた。

私が神人であるという事実と、神人育成学校で教え込まれた理性により、なんとかそれらに耐えることが出来ていたが、もう、限界だった。

私は遂に、神界を飛び出したのだった。

優等生で通っていた私の、いきなりの逃亡。

教師たちは驚きながらも私を追い、「今ならまだやり直せる。戻

る気がないのなら、君に武力を使わざるを得ない」と、説得を始めた。

戻る気などなかった。

だからと言って、捕まる気もなかった。

私は心の中で両親と、目の前に居る教師たちに謝り、生まれて始めて、彼以外の生き物に敵意を向けた。

戦闘態勢を取り、数人の教師たちと対峙する。

教師たちも私の確固たる意志を読み取ったのか、説得を止め、武力行使で私に襲いかかってきた。

相手が教師でしかも複数となれば、苦戦 悪ければ負けてしまうとも思っていたが、その心配はなかった。

いつかもう一度彼に挑戦する時のために、毎日毎日血のにじむような努力をしていた私は、驚く程に強くなっていたのだ。

彼意外とは闘う相手がいなかったから実践経験に乏しく、私は自分の実力がどれほどになっているのかが全く分からなかった。だから、自分が強くなっているという事実は素直に嬉しいことだった。

どうせ彼は訓練など一度もしていないだろうから、もしかしたら勝つことだって出来るかもしれない。そんな淡い期待も、持つことが出来た。

なんなく教師数人を最小限のダメージで気絶させ、私は遂に、魔界と天界の狭間にある神界。分厚い結界に覆われ、並みの魔力では

視界に捕えることすら敵わない神界から、出ることができたのだ  
た。

生まれて初めての外界。

それは感慨深くもあり、不安でもある複雑な感情だった。

私は神界から逃亡してすぐ、まずどうしようかと考え、何よりも  
先に彼の元へ行きたいという自分の欲求を、優先することにした。

浮遊魔法で空を超高速で飛び続け、彼の魔力を探す。何の訓練も  
していない彼に勝てないのは悔しかったが、探査魔法には少し自信  
があった。

時間軸が世界によって違うから正確には分からないが、一日目で  
魔界を全て周り終え、その間に突っかかってきた魔族を殲滅する。  
次に向かった天界も一日で全ての場所を探知し終え、そして現在。  
人間界へと着いていた。

私は集中するために目を瞑り、感覚を研ぎ澄ます。

「全ての魔力よ、知となり我が元へ集え。魔探知」  
フサフ

そして詠唱を開始し、探査魔法を唱える。

私の探査魔法では半径五、六百キロが探査可能だが、飛び回りな  
がら範囲を広げていけば、ここ人間界も今日中に全て見回ることが  
出来るだろう。

と、そう思い、私が空を飛び立つてから数分後。



無視などできようがない膨大な魔力を、簡単に探知した。

あの人はあれでも『気』を隠してるつもりなのか、それとも、隠すつもりすらないのか。

前者であるなら、私が勝つ可能性など皆無になってしまおうが、後者であるならば、彼は馬鹿だ（確か彼は馬鹿だったような気がする）。人間にだって魔力を感知できる者はいるのでから、その中であるな『気』を放ち続けたら、いずれ人間界全体が恐怖に怯えてしまおうだろう。魔王など簡単に倒せる実力を持っているのだから、少しは自重して欲しいものだ。

だけど、彼が本当に『気』を隠すつもりが無いのならば、私の勝機はますます上がる。

彼を見つけたことで爆発的に上昇した心拍数を落ち着かせながら、私は、彼の元へ向かうことを決めた。

## 神人VS神人

馬車に乗りたいです。

自由と商業の都プリステナムを出て、先日と同じように上空をだらだらと飛んでいると、シーナがそう控えめに言った。

別に金はあるし、時間もある。魔力を使わなくていいのなら楽でいい、ということ、今現在、『ミシペルの道』を馬車を借りて走行している。この馬車は『闘争と軍事の都ギゼル』に直行らしいから、目的地は自然とそこで決まりということになった。

「いいねえ、兄ちゃん。両手に花で」

ふと、馬車を運転している親父が振り返ってそう俺に話しかけてくる。

「あー」

俺はなんと答えていいか分からず、頭をぼりぼり掻きながらめんどくさそうな顔をしておいた。

「つか、それにしても、この親父はさっきから良く喋る野郎だな。この馬車に乗せてもらってからずっと何かを喋り続けているような気がするほどだ。『両手に花』。この言葉はもう四回ぐらい聞いている様な気がする。もう反応するのもうんざりになってきたところだった。」

だがまあ、それでも、この親父と話しているシーナやユーリは楽

しそうだから、別に文句を言うようなことはしなかった。こんな揺れまくって遅いだけの馬車の何処が楽しいのかは分からないが、シーナはずっとテンション上がりっぱなしだし、その姿を見るユーリも幸せそうだった。

二人とも喜々した表情で、心底楽しそうに会話をしている。そんな二人の姿は、微笑ましくていいのだが。

なんつーか……。

揺れすぎだろ、この馬車。

酔った。

マジ、初めて酔った。

なんだこの気持ち悪さは。さっきから瀕死寸前だろうと全回復する魔法を掛け続けているのに、ちっとも治らない。何処が悪いんだかが、全く分からないぞ。

「いいねえ、兄ちゃん。こんな可愛い女の子二人を連れて旅なんて両手に花だねえ」

シーナとユーリと話していた親父は、またも俺に話を振ってくる。うるせえぞ親父。何回目だよ。

「……あー」

心の内に微妙ないらいらがこみ上げ、吐き気がする。気持ち悪い……。

「けど兄ちゃん。駄目じゃねえかあ。こんな可愛い女の子にこんな貧相な服着させちゃあ」

黙れ親父。

このやり取りは宿のおばさんともやったし、お前とも三回ぐらいやっただろうが。鳥頭が。

普段なら別に、そんな気になることでもないのだが（めんどくさいにはめんどくさいが）、今は親父の一言一言が煩わしくて仕方がない。

発達しすぎた聴覚が発せられた音全てを受け取り、それが吐き気のするみぞおち辺りにぐわんぐわんと響く。

今まで病気とも怪我とも無縁だった俺にとっては、これは結構堪える感覚だった。

下手したら、生まれてから今までで味わった苦痛の中で、最大級の苦しみかもしれない。……というか、思い返してみれば、俺って苦痛を味わったことがないような気もする。並みの攻撃じゃ痛くも痒くも無いし、神級の攻撃だろうと、俺には避けれてしまう。

……だがまあ、あまりにも力を持ちすぎた所為で、疎まれも恨まれも羨ましがられもして、めんどくさかったんだがな。

本当、何の因果があつて、野心も何もない、只毎日を適当に過ごしたいと思ってる俺がこんな力を持って生まれたのか……。生まれすぎてから何十回と思ってきた疑問だが、未だに分からなかった。

少し気になりもするが、俺はいつものようにどーでもいいやと結

論付け、酔いに対抗する手段を考えることにする。

回復魔法は解毒から復活魔法まで一通り掛け終えたのだが、酔いには効果がないらしい。誰かに酔いの止め方を聞く方法も浮かんだのだが、奴隷であった二人は乗り物に乗ったことすらないだろうし、運転手の親父に聞くのは、俺のプライドが許さなかった。

どうしたもんか。

苦悶の表情を決して出さないように、顔に無表情を貼り付け、どんどん増幅する吐き気と胃のもどかしさに耐える。そして、がたごとと揺れる馬車の外を覗き見てみた。

ミシペルの道はそこそこに整備された道路一本が果てしなく続き、その周りは大草原に覆われている。さらに奥方は右を見ても左を見ても、長くなだらかに連なる山脈。寒いのに関わらずそこには緑が生い茂っており、真っ白な入道雲、群青色の空がそれを一層際立たせていた。

この景色を眺めていれば、もしかしたら酔いが鎮まるかもしれない。

と、俺はそう閃く。

そしてそれを実行しようとした 刹那。

遙か山奥に、米粒程度の飛来する物体を視界に捕えた。

鳥かなんかだろうと一瞬思ったのだが、それは急速にこちらに近づき、人間ほどの大きさがある生き物だということに気がつく。加

えて、微量の闘気が俺に向けて発せられていることにも気がついた。

「親父、止めろ！」

相手が何物かは分からないが、俺にここまで気配を悟らせず、あそこまでのスピードで飛来できるとなると、只物ではないのだろう。

シーナとユーリには三重の結界が張られているからおそらく心配ないが、この親父はそうもいかない。

別にこいつがどうなるうと知ったことではないのだが、俺の所為で死なれても後味が悪かった。

相手の狙いはどうせ俺だろうし、馬車から下りることにする。

俺は親父が馬車を止めたのを確認すると、扉を開けて飛び降り、馬車から少しだけ離れる。

そしてそうしたところで、さっきまで俺の視力だろうと米粒程度にしか見えなかった相手が、急激に目の前に現れた。

金髪碧眼、芸術的にまで滑らかで、色白の肌をした女。

その女は、長い髪をふわりとなびかせ、優雅に地上へと舞い降りる。

俺のよく知っている、女だった。

## 神人VS神人？

「ようやく、見つめました。……私のことを、覚えておいででしょうか？」

「……あー」

「どうも強い『気』だと思ったら、こいつだったのか。」

「私はあなたと戦うことだけを、考えてきました」

「こいつは俺がまだ神人育成学校テオールに居た頃、幾度となく俺に突っかってきた女。」

「負けたことは一度も無いのだが、この世で俺に勝てる可能性があるとしたら、この女ぐらいなものだろう。」

「最初はそこまでの実力はなかったのだが、俺に対する執念でもあるのか、戦う度にどんどん強くなっていったのを覚えている。適当にあしらっていたら、危ない時もあった。」

「あー、なんつーか。……お前、学校はどうしたんだよ」

「目の前の女は、開き直っているのか微笑しながら答えた。」

「逃げてしまいました」

「お前みたいな優等生が？」

「はい」

女は頷いた。整い過ぎた顔が少し歪んだのを見ると、後悔はしているのだろう。

「でも、あなたの、所為なんですよ……？　あなたに会いたくて戦いたくて仕方がなくて、私、おかしくなってしまうたみたいなんです」

「……いやそれ、俺の所為じゃねえだろ」

俺は嘆息する。

この女がなんでこんな俺に執着してるのかは分からないが、何にせよ、厄介には変わらない。

神人の本能（俺には毛ほども無いが）に逆らってまで俺の所へ来たとなると、相当な執念があるのだろう。

できれば、さっさと逃げてしまいたいのが本心だ。

「そう、ですね。あなたの所為では、ないです。……すみません。ですが、あなたに会ってあなたと戦うことだけを目的にここまで来たのは、本当なんです。……どうか、もう一度私と戦ってくださいでしょうか？」

「……あー」

正直、めんどくさい。

俺とこいつが本気でやりあったら、ここミシペルの道が全壊してしまうほどに激戦になるだろうし、何より、今はコンディションが



悪い。

俺は今車酔いしてんだよ。

「ぶっちゃけ、めんどくさいから嫌だ」

遠慮なく、俺は本心をはっきりと告げる。

「……めんどくさい、ですか」

女は整った顔を曇らせ、残念そうに呟いた。だが同情などしない。

「ああ。めんどくさい」

と、無慈悲にも、もう一度そう告げる。

「……そうですか。……では、本気で攻撃し続けたら、もう一度闘つてくれますよね？」

「いや、意味が分からない。それはもつとめんどくさいからな」

「じゃあ、攻撃を開始しますね？」

くそ。聞く耳を持たねえ。

ホント、こいつに「めんどくさい」が通用したのは最初の「二回だけだ。慣れてきた今ではもう、「めんどくさい、ですか。そうですか」と、穏やかな顔で申し訳なさそうに呟きながらも、遠慮一切なしで攻撃してくるようになってしまった。

「……マジかよ」

そしてどうやら、女は今回も本気で攻撃を開始するらしく、杖を取り出して地に魔法陣を展開する。

「遙か地深くに住みし、大地の神よ」

そして詠唱を開始すると同時に、ゴゴゴと地鳴りが始まった。初っ端から超上級魔法かよ。

「激情を纏い、その身を震わせよ。」

ゲーデュナミス  
「**覇轟震滅!**」

女が詠唱を終えたのと同時期、大規模な揺れがミシペルの道全体を襲った。

酔った体にこの震動はあまりにもきつすぎると悟り、俺は宙に飛び立つことにする。

地属性魔法は上級と言えど、飛んでしまえば害があまりないのが普通なのだが、こいつの覇轟震滅ゲーデュナミスはそうもいかない。この魔法は大地を削り、火山を噴火させるほどに強力なのである。

そんな魔法を脆い人間界で使うとは……。

まったく、こいつは相変わらず俺との闘いになると盲目的になりやがる。

俺は嘆息しながらも、シーナとユーリの元へと急いで飛び寄り、ついでに親父、馬車の馬も合わせ、三人と二頭に風魔浮を掛ける。ゲーデュナミス無事全員が宙に浮き、覇轟震滅の直撃を避けたのを確認すると、俺はもう一度女と対峙した。親父が失神しかけ、ユーリが「どうい

ことなの?」とでも言いたげな顔でこちらを見つめていたが、とりあえず無視だ。あえて、親父にも魔法壁を掛けてやらん(動物は好きなので馬には掛けておいた)。俺はそこまで優しい奴ではないのである。

思いつつ、色々動いたせいで吐きそうになりながらも、必死で言葉を紡ぐ。

「あー。……お前、人間界……壊す気かよ」

「それであなたに勝てるのであれば」

即答か。

ちくしょう。今はきついんだよ。

「……テオール神人が世界の均衡を崩しちゃ、まずいんじゃないのか?」

俺に向けて飛来する多数の巨大な岩石を破壊しながら、俺は訊く。なんとか考えを改めて欲しいものである。

「まずいかも、しれませんね。ですが既に、私はしんかい神界を抜け出してしまった身ですから」

にこりと微笑む。

開き直りか。性質が悪いな。

「天より神の裁きを、いかづち雷となり、汝に降り注がれん。

フロンクーン 霸列雷紫

!」

女はまたも詠唱を開始し、入道雲を押しつけ黒雲を呼び寄せる。

地属性魔法で宙に浮かせ、雷魔法で追撃する。そういえば、こいつの厄介な攻撃パターンだった。

光の速度である雷を避けきるのは大変なのである。

ドラクシス  
龍爆炎。

俺は心の中で呟き、巨大な炎竜を目の前に召喚

そして女ではなく、立ち込める黒雲に向けて炎竜をぶつけた。炎竜の発する灼熱の炎により、次々と増える黒雲は全て喰らい尽くされ、霧散する。

「それほどの炎竜を無詠唱で召喚するなんて。安心しました。鈍つては、いないようですね」

女は少しだけ嬉しそうに呟き、杖で地面をトンと叩いた。地に亀裂が入り、奥深くまで穴が開く。そしてその穴から、俺めがけてマグマが噴射し始めた。

クリュース  
氷結。

俺は咄嗟に氷属性魔法で対抗。マグマを凍らせようとするが、やはり、全ての魔法の元となる自然の力は偉大だ。無から作り出した氷と、何百億年と地中に存在する溶岩とでは、持つエネルギーの格が違つ。

低級魔法、さらに酔った体でマグマを凍らせることなどさすがに無謀だと俺は悟った。あまり内臓を揺らしたくはないのだが、素直

に避けることにする。

だが、一本の線のように単純に迫りくるマグマを避けきった、その直後。

女は指をくいつと動かした。

マグマはそれに呼応し、向きを変える。

「ちっ」

自然の力さえ自由に操れるようになっていたとは。厄介である。

水突出。ヒュドール

逃げ回ってばかりもいられない（動き周ると胃が辛いんだよこの野郎）。

完全に鎮火こそ難しいかもしれないが、水魔法の威力と勢いにより、マグマを沈めることにする。

手のひらから放射線状の水泡すいほうを放出させ、マグマに的中。女がマグマに魔力を加えていたこともあり、中々に厄介ではあったが、抑えているだけならば、そこまでの魔力も動く必要もない。

俺は左手で水泡を放射し続け、逆の手で、

アウゼーン  
再生。

大地を操作。地中深くまで開かれた穴を、完全に塞ぐ。マグマの噴射は収まった。

俺は水泡を放ち続けていた左手を下ろすと、女に「めんどくさい」という想いを全面的に伝えるため、心底だるそうな顔と声色で言った。

「……お前、マジで俺が闘うまで攻撃してくる気か？」  
「勿論です」

穏やかな顔で、にこりと微笑む。  
このちくしょうが。

「……あー。俺今、体調がすげえ悪いんだわ。他の日にしてくんねえか？」

「体調が、悪いのですか？」

「ああ。まあ、な。げほっ、げほっ」

言いながら、過剰にだるそうにする。酔いで咳きが出るものなのかは分からないが、一応加えておいた。

「そうですか。……それは、チャンス、ですね」

おいこら。

「天より轟く雷よ」

俺の体調が悪いと聞いた女は、露骨に詠唱を開始する。俺に勝てれば、なんでも良いってか。

「眩い閃光を力とし」

くそ。

俺は重度のめんどくさがり屋だとは自負してるが、生憎、それ以上になんか嫌いなんだよ。

「我が右手に集まり、一条の光となれ」

「あー」

やるしか、ねえのか……。

めんどくさい戦いになるだろうとは思いつつも、酔いというハンデの中、最悪負ける可能性があるということ念頭に置きながらも、俺は闘うことを決意する。

「イスフロース 雷光極波！」

イスフロース 雷光極波。

女と俺は雷を同時に放ち、それらは見事相殺される。

俺の方が強いと思っただが、相殺か……。

「闘う決意、してくださいましたか」

ふと、そう心底嬉しそうに言われる。

なんだかこいつの思い通りになっているようで気に食わなかったが、仕方がない。闘わない方がめんどくさいことになるだろうし、せめて早く終わらせるため、俺は久しぶりにマジモードになることにする。

良くなりつつある胃のもどかしさと、がんがん響く頭をできるだ

け無視しながら、

アネモス  
風刃列覇。

アネモス  
風刃列覇。

アネモス  
風刃列覇。

アネモス  
風刃列覇。

と、風の刃を連発。

俺と女の決定的違いは、『詠唱』にある。詠唱している時間は短いかもれないが、この時間は戦いにおいてはあまりにも長すぎる時間だ。

女が風刃列覇アネモスを一度放つ間に、俺ならば5、いや、10回は放つことができるだろう。

スピードが長所である風属性魔法の連発により、女の詠唱は詰まってしまう。だがやはり、さすがだった。腕や足にかすかな斬撃を残しながらも、直撃は一つもない。最小の動きで、全てぎりぎり致命傷を免れていた。

「今ここに蘇れ」

アネモス  
風刃列覇。

詠唱を開始した女に向けて、容赦なく放つ。

「っ」

必死に、目に見えることのない風の刃をかわし、詠唱を再開。



「古から熟練したる炎よ」

楽観的な表情など微塵も残さず、顔を強ばらせて必死になる。どうやら、ギアを変えたらしい。纏う魔力の質が変わった。

今の俺はいつにもまして魔法の切れがないし、なるべく内蔵を揺らしたくもない。その上、シーナとユーリのことも気になった。三重の結界はそれはもう強固なもののだが、女は結界を張ったこの俺の魔法を、相殺させたのである。

破戒される可能性は、十分にある、ということになるだろう。

どれだけ修練を積んだのか。サボリ続けた俺にとっては、今のこいつの相手をするのはかなりしんどかった。

せめて酔いが直ってくれりゃあ、動く気にもなるのに。

「純粹なる穢れなき炎よ、全てを滅ぼすべく舞い踊れ」

アネモス  
風刃列覇。

ダメ元で放つてもみるが、やはり、空を切るだけであった。

クソ、当たらねえ。

いらいらしてきたら、また頭ががん響くようになってくる。そしてなぜか、あの親父の言葉、「両手に花だねえ」が、頭に何度も反芻してきた。

なんの呪いだよこの野郎が！

「ああああ！」

俺はいらいらを声に出しながら、

イスアネモス  
風塵猛刃。

ジレンマを打ち消すべく、高位魔法に手を染める。

砂嵐を引き起こし、視界を奪い、数メートルに渡る巨大な風の刃を女めがけて放った。

同時期。

「ギガンテイオシス  
灼熱火炎舞！」

女は炎属性系超上級魔法を唱え終える。女の周りに炎の渦が取り巻き、それらは火柱のように空高く打ち上がった。そして、その火柱は急速に全方位に向けて広がり、無差別に灼熱の炎を浴びせようとする。

俺の放った風塵猛刃はその火柱を貫通したが、女の姿は見えないので、どうなったかは分からない。

それより、どうやってこれを止めるかの方が先決だ。

禍々しいほどに強烈な魔力を放つあたり、見た目だけでなく、かなり威力があるのは分かる。別に炎魔法なら食らっても大丈夫だとは思うが、結界を掛けているとはいえ後ろにはシーナとユーリがいるのである（無防備な親父もいるが、気にはならない。お前の声が

今も反芻してうざいんだよ！)。引くわけにはいかなかった。

ヒュールディ  
寒冷氷。

分子の動きを完全に止め、温度を絶対零度まで下げる魔法。

範囲は火柱を取り囲むように放つ。何万度の炎だろうと、分子が動かないのでは熱が上がるわけもなく、みるみるうちに炎は消え去っていった。

こいつ、俺に炎魔法が効かないこと忘れたのか？

と、そう思った刹那。

火柱が消えた中心に　女がいないことに気がつく。

「くそっ」

囧か！

そう悟ったときには既に遅く、

「  
スバイラボース  
聖白剛光滅弾！」

左半身に、巨大な光の玉が被弾した。

空に浮遊していた俺は音速で吹き飛び、どっしりと待ち構える山に激突。そして山にぶつかってなお、光の玉は俺を圧迫し続けた。俺は力尽くでなんとかその軌道を反らすと、光の玉は無慈悲にも、山の上半身を弧状に抉り取る。

そこまでの威力を持つ魔法なのだから、いくら俺が頑丈といえど、

当然無傷ではすまなかった。服は肩まで焼け焦げ、左腕の骨が粉々になってるのが分かる。痛覚は遮断したが、この傷では、俺の回復魔法だろうと一瞬では直らないだろう。

「くそ」

左腕を力なくだらんとさせ、そう悪態をつきながら立ち上がる。

「まさか、空間転移まで使えるようになってるとは……」

それに、魔力操作も格段に上達している。あそこまで気を小さくできるとは思わなかった。俺と同等かそれ以上じゃねえか。

「……あー」

正直、車酔いしてようがなんだかんだ余裕で勝てるだろう、と踏んでいたのだが、見当外れだったな。あいつは予想を遙かに超えて強くなっている。油断しすぎた。

この腕じゃあ、そろそろマジでやばくなってくるぞ。

とりあえず俺は左腕を治すために回復魔法をかけ続けるが、やはり、あいつがこの時間を見逃すはずもない。空間転移ですぐさま目の前に現れた。

「スライボース  
聖白剛光滅弾！」

詠唱はもう終えていたのか、現れてすぐ、先ほどの光の玉をもつ一度放つ。

「ちくしょうがー！」

スハイラボース  
聖白剛光滅弾。

俺は意地で、相手と同じ魔法を放った。

だがまたも二つは相殺され、俺の心を一層落ち込ませる。が、今はそんな余裕はない。

すぐに立ち直り、女と同じように空間転移を使って距離を測ることを考える。

だがその刹那、

「逃げるのですか？」

と、一言。

それがものすごく俺のプライドを刺激し、意地でも、逃げられなくなってしまう。

「に、逃げねえよ」

逃げられないのなら、相手を後退させればいい。

そう思って、身の回りを無差別攻撃しようと思うのだが、

「逃げられないなら、私を後退させればいい、なんて男らしくないこと、考えてませんよね？」と　　自分は雷光フロースを放っておいて  
呟く。

「くそっ」

俺は目の前に結界を張り、雷を防ぎながら、思う。

なんか、こいつには全て見透かされてるような気がするぞ、と。

「あなたと会えない間、ずっと脳内であなたと闘ってききましたからね。手に取るようにあなたの考えてることが分かるのです。初めての勝利も、もう　　少しかもしれないね」

女は言う終わるや否や、無の空間を作りだし、そこから大量の剣を取り出す。そしてそれらを魔力で浮かせ、俺に向けて発射した。そのスピードは風よりも速く、凄まじい風邪きり音を奏でる。

ケイクシス  
炎轟龍巻。

俺は炎の竜巻を召喚し、大量の剣を巻き上げ、それらを溶解してやる。

だが、俺に向けた剣は囷でしかないと言わんばかりに、女は詠唱を開始した。

「我は汝と契約を結ぶものなり　　」

くそ。

逃げることもできず（できるにはできるが）、左腕は粉碎。

さらに良くなってきたとは言え酔って吐き気のする体に、目の前には、視界を遮る邪魔な炎の竜巻（俺が出したものだが……）。これのせいで、女を見ることもできない。

こんな状態で、雷属性超上級魔法を放たれでもしたら……。

闘いで負けたことなどないから窮地とはよく分らないが、笑えない状況だと言うことは分かる。

ぶつちやけ頭にはあまり自信がないのだが、俺は打開策を考え始めた。

と、その時。

ことん。と、ポケットから何かの落下音がする。

なんだ？

俺はそう疑問に思い、しゃがみ込んで手に取ってみる。

それは ヒュプスーポーション。

先日、薬屋の店員さんがくれたものであった。

こんな状況では必要ないだろうと、無造作にポケットに突っ込もうとするが、

『体力回復！ 元気満点！ 魔力増強！ これを飲んで君も勇者になろうっ！』

と、瓶のラベルに書いてあることに気がつく。イラストとして書かれているむつきむきのマッチョが、なんともイケていた。俺はなぜだかものすごく惹かれ、駄目で元々、と思いつつ、一瞬語にはそれをぐびっと飲み干していた。

味は意外といける、と感じたその直後。

吐き気のする身体。重くだるい頭。胸のもやもや。

それらが全て 一瞬にして消え去ったのだ。

そして、さらに、効果はそれだけではなかった。  
体の内から、力が溢れかえってくる気がしたのだった。

人間の技術で作られたものなのだから、粉碎された腕こそ治るはずもなかったが、さすが店内最高級品である。

心の中で、もう顔を忘れつつある店員さん、そして何より、イラストのマッチョに感謝しつつ、俺は反撃を開始した。

「うらあああああああ！」

ウーラフローズ  
天光雷撃覇！

ウーラフローズ  
天光雷撃覇！」

今までの鬱憤を晴らすが如く咆吼し、またも、女と同じ魔法を放つ。

目の前にある炎の竜巻により、適当に雷を撃つ羽目になるが、その雷は轟音を轟かし、稲妻形に放出される。そしてかざした右腕を中心に、雷はだんだんと大きくなり、目の前一带を破壊し尽くすまでの大きさにまで発展した。

数瞬後、ぶつかり合ったウーラフローズ天光雷撃覇は爆音を奏で、邪魔なだけであった炎の竜巻を消し去る。

そしてぶつかり合った末に残った雷は。  
。女ウーラフローズの元へと向かっていった。

俺の本気で放った超上級雷属性魔法。光の速度で広範囲に迫り来るその雷を、避けきれぬはずもない。それは無慈悲にも、女に直撃



した。

「……ふう」

脱力し、短い息を吐く。

無意識的に安堵のため息を付いてしまったあたり、思っていた以上に、俺は焦っていたのかもしれない。マジで 危なかったよな。

逃げるためだけでなく空間転移を使い、倒れる女のすぐ横にワープする。

そして、禍々しい気の放つ、恐らく世界最高硬度であろう大剣を具現化し、それを女の首元に突きつけた。

「俺の勝ち、だな」

女は悔しそうに整った顔を歪めると、

「やはり私は、あなたには勝てない運命なのでしょうね……」

そう、負けを認めたのだった。

相当な負けず嫌いのこの女であるからにして、まだ抵抗してくる可能性も考えたが、予想以上に俺の放った天光雷撃ウーラフローズの威力は高かったらしい。

逃げる気力も、既にないようだった。

## 新たなる連れ

「お願いします！ 私をあなたの旅にお供させてください！」

鬨の直後、冷静になって周りを見てみると、ミシペルの道は崩壊しかけていた。女の起こした地震により地盤は亀裂し、光球により山は抉り取られ、風の刃により、地を深く削られる。

さらに俺が最後に放った雷が絶大な被害を及ぼし、天気を雷の雨に変えるまでに至ってしまった。

俺たちは顔を見合わせてさすがにこれはやばい、と互いに悟り、自分たちの治療がてら二人で自然を元に戻すことにしたのだった。

そして数時間後。ようやくその作業が終わり、現在ユーリとシーナ（気絶した親父も）の所に帰ろうとしていると、女は意を決したようにそう真剣な面つきで頭を下げたのである。

「……あー」

「お願いします！ 私、なんだってしますから！」

この女と一緒に、旅。

「……………」

……正直、あまり気乗りはしなかった。

「あなたと一緒に旅をし、いつか、あなたに勝てるようになりたい

のです！」

「俺を倒すために、俺と旅をする、と？」

「はい」

躊躇なく答える。

……かなり、厄介だ。

「あー、もうめんどくさいから、正直に言おう」

「はい」

「ぶつちやけ、イヤだ」

「照れ隠し、ですか？」

捉え方がポジティブだった。

「違う。本音だ」

俺はそう訂正してみせるが、

「違います。照れ隠しなはずですよ」

と、なんか決めつけられてしまう。

厄介すぎる。

というか、このパターンはやばいぞ。いつもの完全に押し切られるパターンじゃねえか。

……なんとか、断り切らなければ。

「お前あれだろ。うん。今ならまだ遅くない。神界に戻れ。お前ほどの実績を持った神人テオールなら、気の迷いで済ましてくれるさ」

「……いえ。戻りたく、ないです。私は神人の本能にも勝る想いでここまで来たのです。私の意志で、あなたのそばに居たいと、そう思ったのです。今までの私は親や先生方の言いなりでした。そんな私が、あなたに出会って初めて自分の欲求を優先することができたのです。あなたと居ることが何よりも楽しかったから、です」

「……………」

「お願いします。しつこいかもかもしれませんが、どうか、お願いします。もう、自分の欲求に逆らいたくないのです……………」

俯き、真剣にそう言う。

少しの間した後、

「……………いえ、これでは語弊がありますね」

と、女は付け加えた。

「自分の欲求に逆らいたくないのではなく、私では、この欲求に逆らうことが……………できないのです。……………だからどうか、お願いします。自分勝手かもしれませんが……………あなたの旅に、お供させてください」

女は、もう一度頭を下げた。

丁寧で、誠意がひしひしと伝わる姿勢だった。

「そう、か。お前、そこまで」

「……はい」

切実な、想い。

ここまで頭を下げられ、こんなにも泣きそうな顔をされ、率直すぎる彼女の想いを聞いて、それを誰が断れるだろうか。いや、誰も断れるはずがないだろう。

ただ。

俺を除いてはな。

「だが断る」

「なぜですか!」

「あー。情に訴える作戦で、俺の心が変わるとでも思ったか?」

「そうですね。今まで五度ほどひっかかってくれましたので、あなたなら今回もいけると思っただのですが……。どうやら、いつの間にか学習能力が付いていたみたいですね」

こいつ、絶対俺のこと馬鹿にしてるだろ。

まあ、今まで五度ほど引っかかったのは事実なんだが……。

「……………」

それにしても、事前にシーナとユーリに会っておいて良かったかもしれない。なんというか、もっと断りづらい状況というものを

知っている、少し余裕が持てるのである。

「本当に、駄目なのですか？」

「あーまあな。別にお前が嫌いつて訳じゃないんだが、なんかお前、毎日闘い挑んできそうだし」

「そうですか。ではあなたのことをこれから、セル様、とお呼びしますので、どうか、お願いします！」

「いやそこは普通、闘いをあんま挑まない誓いとかが立てるよ」

「いえ。セル様にはこちらの方が嬉しいかと」

「いや、正直全く嬉しくないんだが……」

「そんなはずはありません。セル様は今、心の中に沸き上がる喜びを必死に押さえつけてるはずです」

「なんかまた決めつけられてるし……」

「とにかく。……本当に、どうかお願いします。セル様のことになると、私の性格が変わってしまうのは知っていますよね？ セル様のためなら私はいくらでも、しつこくなれてしまうのです」

確かに、それは身を持って知っている。

「だからもしかしたら、私、セル様が承諾してくださるまで、一ヶ月、いえ、一年だろうとここにセル様を引き留め、頭を下げ続けてしまつかもしれません」

「……………」

……マジかよ。

そんなはずはないと思うが、良く考えてみるとやりかねないことに気づく。

「それにもし逃げたとしても、地獄の底まで追い回してしまう自信もあります。ホントに、自分でも怖いぐらい、セル様のことになると歯止め効かなくなってしまうのです」

彼女は申し訳なさそうな顔をし、すみません。迷惑、ですよ、と、そう呟いた。

「あーまあ、なんつーか」

俺は考える。どの選択肢が、俺にとって最も楽な道なのかを。そしてそれは、想像すれば容易に答えを出すことが出来るものであった。

明らかに、断った方がめんどくさい、と。

そして、素直にこいつの要件を聞くのが、一番被害が少ないのだ、と。

そう結論付いたのだ。

それにこいつはめんどくさいが 嫌いじゃない。昔から、共に過ごしてきた奴なのだ。こいつがここに来たときからこうなるだろうことは予想していたし、元より、それを無理に断ろうとするつもりはなかった。

俺は頭を掻きながら、覚悟を決めることにする。

「あー分かった。分かったよ」

若干投げやり気味に、言葉を放った。

「ほ、ホントですか？」

大人びた風貌を放つ彼女が、無垢な子供のように喜ぶ。そこまで……嬉しいのかよ。

なんだか少しだけ照れくさかったが、それを隠しながら、俺は言った。

「あーでも、一つだけ、約束してほしい」

「なんででしょうか？」

「俺には今、二人の連れがいる。そいつらの面倒を見て、仲良くやつてくれ」

「連れ、とは。後ろにいる方々ですか？ 三名居るように見えますが」

「あー違う。あの気を失ってる親父は断じて違う」

「そうなのですか。では、女の子二人、ですね」

「ああ」



「それにしても、あの二人は奴隷服を着ているように思われますが、セル様、奴隷でも購入したのでしょうか？　もしそうなのだとしたら、軽蔑しますよ？」

「ちげえよ。あいつらはもう奴隷じゃない。昨日、いろいろあつてな。俺が面倒見る羽目になっちまった。服は次の町ですぐ買ってやるぞ」

「そうなのですか」

「ああ。あいつらは人間だが……別に、いいだろ？　テオール 神人の教えだと、人間は下等な種族らしいけどよ」

「ふふ」

何が面白いのか女は頬を緩め、くすくすと笑う。そして弾んだ声で、嬉しそうに言った。

「セル様は相変わらず、本当に神人らしくないんですね」と。

「うるせえよ」

俺はそう素っ気なく言い返してみせるが、女は笑い続けるだけであった。……何がそんな嬉しいのか。全く分からない。

しばらくして女は表情と取り繕うと、話を戻した。

「分かりました。それなら、お安いご用です。教え込まれた人間に対する数々の偏見は、全て捨て去ることにします。セル様と共に過ごす人間が、悪い人間なはずもないですからね」

「そうか。それは、助かる。だが、そんな簡単に割り切れるとは思わなかったな。お前も大分、神人らしくないじゃねえか」

「そうでしょうか？ もし本当にそう思ってたのであれば、それは、最高の誉め言葉ですね」

「……？ 誉め言葉？」

「はい」

にこりと微笑む。

やはり、こいつの考えてることは良く分からなかった。

だがまあ、別にいいか。今に始まったことではない。

俺の話はもう終わりだろうと判断し、ユーリとシーナの元へ戻ることにした。

「セル様」

だが、そんな俺を止め、背に話しかけてくる女。背を向けていても姿は見える。そのまま答えた。

「なんだ？」

「野暮なことをお聞きしますが」

言つのを一瞬渋り、だが結局、続けた。

「セル様は……私の名前、覚えてくれてますでしょうか？」

「……あー」

「……えと、その、一度も、呼んでくだらないものですから……」

不安げに、珍しく口ごもりながら女は言った。

「安心しろ。さすがに、忘れねえよ」

俺はそう前置きし、

「ミエル、だろ？」

と、振り返りながら名を呼んだ。

ミエルは嬉しそうに「はい」と答え、少女のような無垢さを、瞳に宿した。見てるこつちが照れるほどである。

再び背を向けながら、俺は訪ねた。

「あーなんつーか、そういやお前、ホントに俺のこと『セル様』とか呼び続けるつもりか？」

「はい」

「マジか」

「はい。ですが、ずっとではありません。私がいつの日かセル様に

勝てたとき、対等に名前を呼び合いたいのです。それまでは私の方が弱い」立場が下ですから、『セル様』と、そう呼ばせてもらいます」

なんとも、極端な考え方だった。

「あれ？　ですがこの考え方ですと、私がいつの日かセル様に勝てたとき、私の方が強い」立場が上、となってしまうですね」

どーでも良いことでミエルは真剣に悩み、答えを出す。

「そうですね。では私が勝った場合、セル様のことを『ゴミ虫』と呼ぶことにしますね」

「それは極端すぎるだろう」

そう素早くツツコンでみせるが、聞こえなかったのか無視したのか、綺麗にスルーされてしまった。

俺は長い長いため息を一つ吐く。

そしてなんとなく、これからのことを考えてみた　その直後は数々のめんどくさそうな出来事が脳裏を支配し、俺を憂鬱にさせる。

そんなイメージを振り払いながら、俺は思った。

……なんつーか。

なんとも……前途多難だよな、と。

のんびりした暮らしを求めて人間界に来たはずなのに、二日でもう、三人も連れが出来てしまった。

このペースで行ったら、一ヶ月後には45人ほどに増えている計算になってしまう。さらに一年で、450人。

……それはもう、うじゃうじゃすぎる。  
のんびりの、『』の字すら見えてこないだろう。

これ以上はなるべく増やさないよう、押しに弱い性格をなんとかしなければと思いつながら、俺はミエルと共にユーリとシーナの元へと戻ることにした。

まあ、なんにせよ。

俺はミエルが憎めないし、嫌いじゃない。

それにミエルは同年代で唯一、俺に話しかけてきた神人だ。  
少しの面倒事ぐらい、許容できるかもしれない

## バトル後

後ろには、空中に浮く気絶中の親父。

すぐ近くにはシーナとユーリ。二人とも俺の魔法で飛んではいるが、まだ慣れないのか上手く体を動かすことは出来ないらしい。

俺が急に目の前に現れ、驚きつつも近寄ろうとしているのだが、中々それが出来ていない。そんな二人に向け、「あーまたまたな」と、俺は片手を上げながら言った。

それに対し、

「ま、またまたじゃないわよっ！」

と、ユーリが怒りをぶつけてくる。

「いきなり闘い初めてっ！ もう目で見えないぐらいすごい闘いでっ！ あたしたちは放っておかれてっ！ ……待ってるしか、なくて。 ……ホントに、ホントに ……怖かったんだからっ！」

「そう、か。 ……悪かったな。ホント」

俺は頭をぼりぼりと掻きながら、謝る。

「それに、あんたが死んじゃったらどうしようって ……不安だったのよ？ あたしたちは、あんたに守られてるんだから ……」

「心配、してくれたのか？」

「う、うるさいっ!」

「まあ、それはありがたいが、俺は簡単には死なねえよ」

「そんなの、分かんないじゃない! やられ気味だったし!」

「……………」

まあ、確かに、やられ気味だったよな。吹き飛ばされたし、腕粉砕されたし…………。

俺がミエルとの激闘を思い出していると、シーナの方も控えめに意見し始める。

「えと、その、セルにい。わたしも、すごく心配しました。セルにはものすごく強いですけど、でも、相手の女の人も、すごく強い魔力だったから…………」

そういえば、シーナは魔力を感知できるんだっとな、と俺は思い出す。

それがなぜかなのは、まだ知らないが。

「セルにい。その。あんまり無茶は しすぎないでくださいね」

シーナは言って、控えめにはにかんだ。

そしてそれに便乗するように、ユーリももう一度口を開く。

「そうよ。あんたに居なくなったら、ホントに困るんだからっ!」

無茶したつもりもないし、無茶するほどの相手はこれからそう現れないだろう。だが、それをわざわざ反論するつもりもなかった。

その後もユーリの怒りと文句に付き合い、しばらくすると、怒鳴り疲れたのか怒りも静まってくれたようだった。

そしてその時を見計らったのか、沈黙が訪れぬようシーナが俺に訊いてくる。

「えと、セルにいい？ その綺麗なお姉さんは、誰ですか？」  
と。

今の今まで誰もミエルについて触れていなかったのだが、シーナのお陰で、ようやくミエルの話題へと移ることが出来る。

綺麗なお姉さんと呼ばれ、両手を頬に当てながら照れているミエルを横目に、俺は答えた。

「あーそいつは俺が、神界に居たときの知り合いだな」

「しんかい、ですか？」

「ああ。神人テオールの世界。神界だ」

「そう、ですか。でも、セルにいつ

いきなり声を荒げる、シーナ。

「どっした？」

「えと、そのお姉さんとは、さっき、鬨ってませんでしたか？」



珍しく、シーナは糾弾するように言う。

「……あー」

俺は頭を掻きながら、思った。

そついや、そつだな、と。

いきなり現れ、俺と死闘を繰り広げていたその相手が、普通に隣に居る。知り合いだと分かったとはいえ、不思議かもしれない。いやむしろ、俺の知り合いだからこそ、色々と不思議なのかもしれない。

「なんつーか、闘ってはいたが、別に敵な訳じゃないんだ」

「そう、なんですか？ えと、じゃあセルには、敵じゃない人と、周りが壊れちゃうぐらい激しく闘ってたんですか？」

「まあ、そつなるな」

「そ、その、セルにいつ。思ったことを、そのまま言っても良いですかっ？」

もう一度声を荒げる、シーナ。

「あー別に良いが。なんだ？」

「えと……えと……。せ、セルには、その ば、馬鹿なんですかっ？」

きゅっと目を瞑り、手を握りしめ、意を決したように言うシーナ。

そしてその直後、

ぐさり。

と、何かの効果音が聞こえてきた。おそらく、俺の胸に突き刺さった言葉というナイフだろう。そのナイフは止まることなく進み続け、心臓中央部でようやく勢いを失う。だが破壊力はむしろ倍増し、今度は心臓をミンチにすべく回転し始めたのだった。

十歳ほどにしか見えない、少女に。

いかにも人見知りし、自分の意見を言うのが苦手そうな、少女に。可愛らしく、人の悪口など到底言いそうもない無垢な、少女に。

馬鹿なんですか、と。

生まれてこの方、俺は馬鹿なんじゃないかと幾度となく思い、悩んできただけに、この言葉は重かった。

「……………」

だが、言葉だけに反応し、打ちのめされたのも一瞬のこと。今回の闘いについては、俺に全く否がないことを思い出す。

めんどくさいからと闘いを拒み続けていた俺を無視し、無理矢理壮絶な闘いにまで発展させたミエルに否があるだろう。さすがに。

そう思い、私が悪かったのです、と弁解してくれることを期待し、俺はミエルの方を振り返ってみた。

が。

「……………」

なんというか。

……………。

「ふふふ」

期待通りになど、なりえなかった。

ミエルは、なんと、笑っていたのである。

お腹を抱えて、嬉しそうに　大爆笑。

「セル様が。セル様が、小さい女の子相手に馬鹿と言われていきます  
っ」と小言を漏らしながら、大爆笑。

「セル様を馬鹿だと思っていたのは、私だけではなかったのですね  
っ」と今の俺には酷すぎる言葉を吐きながら、大爆笑。

……………。

『てめえの所為だろうがああ！』と叫びそうになったのは、言うまでもない。

だが俺はそんなことはせず、クールに、第二の行動を取ることにした。

「いや悪いシーナ。さっきのは嘘だ。実はこいつ敵なんだ。かなりの悪者で仇敵だな。うん。こうしている間にも攻撃してきそうなほどに質の悪い奴だ。ラスボスだ。世界の敵だ」

俺は早口でそう言ってみせる。

「そ、そうなんですか？」

「ああ」

「……………え、えと、えとつ。……………そ、そうとも知らず、わたし、馬鹿、なんてつ。セルにいつ。その、ご、ごめんなさいっ」

「あーいやいい。謝んなくていいから、取りあえず、こいつから逃げるぞ。シーナ」

そう言っつてシーナに手を差し出すと、迷うことなくそれを取っつくれる。

「ユーリも」

そしてユーリにも手を差し出すと、やや訝しげな目をしながらも、結局俺の手を取っつくれた。

風魔浮の効果が残る二人の手を強く握りしめ、俺は限界突破する勢いでどこかへ飛んで逃げようとする。

が、そのとき。

「ま、待っつてください」

と、制止の声。ミエルは続っつて言っつた。

「すみません。冗談です、セル様。私が悪いと、ちゃんと説明しますから」

「正直、俺には冗談に見えなかったんだが？」

飛び立つことを中断しながら、俺は答える。

「そうですね？」

「ああ」

「正直な話、確かに、セル様のおっしゃる通り冗談ではなく本気で笑ってしまったのですが」

「……おいこら」

こいつ、前にも増して俺のことを舐めてやがる。……いや、前もこんなもんだっただらうか？

「心配しないでください。私がセル様に迷惑を掛け、無理矢理闘わせてしまったことは自負しています。お二人の誤解を解かなければならないのが私だと言うことも、お二人を心配させてしまったのが私だと言うことも、分かっております。だからどうか、せめて、セル様の名誉を守るためにも、私にすべてを説明させてください」

いや、別に名誉とか気にしていないし、名誉を失ったとも思っていないんだが……。

まあ。

「そこまで言うなら、頼む。ミエル」

断る理由もないだろう。

俺は言いながら、シーナとユーリの手を離した。

「はい。ありがとうございます」

言つて、ミエルは丁寧に頭を下げる。

そして頭を戻すと、早速、シーナとユーリに向けて話し始めた。

自分が、誰なのか。どういった経緯を持って、ここまで来たのか。なぜ、俺と闘っていたのか。俺と、どんな関係なのか。

知らない話知らない話知らない話を混ぜに混ぜ、軽快に、とは到底いえないペースで話していった。

## 親父

そして、早一時間後。

「それとですね。聞いて下さい。シーちゃんユーちゃん」

三人はなんかものすごく仲良くなっており、ミエルなんか既に二人をシーちゃんユーちゃんと呼び始めている。

あまり重要な話などない中の微妙に重要な話はもう終わったというのに、未だに三人は話し続け（基本的に話しているのはミエルだけだが）、今など最早、世間話になっている。

さすがに見かねて、俺は止めようとしたのだが、

「セル様は黙っててください」と、理不尽に怒られてしまった。

………なんとというか。

今の俺は全くと言って良いほどやることがないので、青空を見上げ、ぼーっとしているだけである。

三人の会話を耳に挟みながら、焦燥感は募るばかりだった。

「<sup>テオール</sup>神人には『地球一周マラソン』という、毎年神人育成学校で行われる行事があるのですが、セル様、すごいんですよ?」

「すごい、つて。ぶつちぎり優勝でもしたの?」

「いいえ、違います。セル様はこのマラソンに出るのがめんどくさ

いと言って、出ようとしなかったのです。　　と言っても、やはり、全校生徒が参加させられるこの競技を、欠席することなどできません。教師総掛かりで、無理矢理参加させられてしまったのです。ですが、セル様はそれでもなお、マラソンに出たくはありませんでした。　　だからといって、セル様、どうしたと思いますか？」

「ど、どうしたんですか？」

「驚きますよ？　セル様はマラソンが始まるとすぐ、参加神人全員に攻撃を開始し、全員を負傷させてしまったのです。参加者がいなくなれば、この行事自体が中止になるだろう、と、それだけの理由で、です」

「ほ、ホントなの！？　それ！　セルってやっぱ馬鹿馬鹿じゃない！」

「はい。ホントなのです。恥ずかしながら、そのときこの行事の生徒代表をしていた私もやられてしまったのが、苦い思い出ですけどね」

「さ、災難だったわね。それは」

「はい。セル様と話せる神人が私しかいなかったものですから、なぜか私の監督不届きとも言われ、責任の何割かを負わされてしまったのを覚えていますね」

「えと、その、ミエルさん。一つ聞いてもいいですか？」

「大丈夫ですよ。シーちゃん。なんででしょうか？」



「えと、神人さんたちは、そのとき何人ぐらい居たんですか？」

「そうですね。一千人ほどだったと思います」

「せ、千人ですか。すごい、数です」

「はい。すごい数です。それだけの神人を一人でやつつけちゃうのですから、本当に、馬鹿げた強さなものです」

「セルにい、すごい、です。……で、でも、そんなに多くの神人さんと闘っていたら、マラソンをやるより疲れちゃいそうです」

「そうなのですよ。シーちゃん。そこがセル様の馬鹿で、面白いところなのです。いくら幼き頃のセル様と言えど、地球一周など造作もないことなのに、それがめんどくさいと言って、普通の方が考へたらもっと大変なことをしようとするのです。勉強でしたらいつも一番で、私など勝ち目がないほどに頭が良いはずなのに、なんのためにその頭脳があるのやら。本当、頭の構造が気になる方です。なんといいですか。なんでもできるセル様にも、弱点があるのだなと。どんな天才でも、できないことはあるのだなと。それが良く分かる、本当に見ていて飽きない方でしたね」

「ミエルは言つて、海を連想させるような青い瞳を細め、目尻を下げ、愛想の良いほえみを見せる。」

「……………」

………なんとというか。

こんな具合に、世間話　というよりも、話していることのほど

んどが、俺の幼少期の話題なのであった。

勿論、早急に止めたい気持ちかはやりもしたのだが、シーナもユ  
ーリも興味津々なのが何とも止めずらかった。

それに最初の方は多少気恥ずかしかったりもしたのだが、今では  
もう、開き直って聞き流すまでにメンタルが追いついている。

あーそついやそついうこともあったなーって感じた。

「……はあ」

俺はなんとなく一つため息を付き、思う。

それにしても。

こいつは俺を誉めているのか、馬鹿にしているのか、どっちなの  
だろうかと。

当然それはただの疑問であり、考えたところで俺には分かるはず  
もないのだが、おそらく、どちらかの可能性もあるし、どちら共の  
可能性もあるのだろう。昔から厄介で分かりづらい相手だったが、  
俺の知っているミエルの性格を考えると、その推測は正しいような  
気がした。

と、そのとき。

全く持ってなんの脈絡もなく。

俺は視界の端に、浮遊するとある物体を捕らえたのである。

広大に広がる草原　その空中に漂うにはあまりにも場違いな物  
体、なぜ今まで気がつかなかつたのだろうかと思うほどに、目立つ

物体を、だ。

「……あ」

俺はそれを見つけた直後、思わず間の抜けた声を発してしまう。

あまり思い出したいものではなかったので、一瞬見て見ぬふりをすることも考えたが、あれも俺たちの闘いの被害者なのである。

仕方がない、と、雑談する三人を放っておき、その 完全に忘れていた『親父』の元へと、飛び寄ることにした。

親父には外傷こそないが、浮遊したまま気絶している。いきなり始まったあまりの激闘に、頭が付いていかなかったのかもしれない。

だがまあ、一発でこぴんでもすれば、目え覚めんだろ。

俺は楽観的にそう考え、極力力を入れないように心がけながら、中指で親父の額を弾く。

ツツばこんツツ！

「ぎよえええええええッ！」

中身の詰まっていない乾いた音と共に親父は奇声を上げ、空中で数メートルほど吹き飛ぶ。

やばい強すぎた、と俺は一瞬焦るが、血も出ていないし、まあ大丈夫だろう。数センチほどのこぶ出来たぐらいだ。

案の定目覚めてくれた親父との距離を詰め、俺は言う。

「起きたか」

「あ、え？ あえ？」

親父は寝ぼけてるのか、状況が全く把握できないのか、珍妙な声を発しながら忙しく首を左右に振る。

「じ、ここは、何処だい？」

俺のことを覚えているのか、気絶したショックで忘れてしまったのか、微妙に鼻水を垂らしながら聞いてくる。

「ミシペルの道」

「そう、かい。じゃあ俺はなんで、空に浮いてるんだい って俺  
そつえばなんか浮いとるううううつっつっつ！？」

やはり状況が全く把握できていなかったのか、もう一度気絶しそ  
うなほどに驚き始める。

「あー落ち着け親父。あれだ。あんたを浮かしたのは俺だ」

「に、兄ちゃんが？」

「ああ。覚えてないのか？」

「えーっと。俺は、仕事でプリステナムまで行って、次の仕事場

がギゼルに決まって。それで、どうしたんだっけか？」

「俺が知るかよ」

「……あ、あーそうだ思い出した。ギゼルまで行こうとプリステンダムを出たところで、僕は嬢ちゃん二人に呼び止められて、馬車に乗せてもらえませんか、って言われたんだったな。それで、僕はどうしたんだっけか？ 確か、普通に嬢ちゃんと兄ちゃん、ミシペルの道を走行していたと思うんだがなあ」

「……………」

どうやら俺とミエルとの闘いは、脳が自動的に削除したらしい。

まあ覚えていないのなら、それはそれで都合がいいのかもしれない。わざわざ説明するのめんどくさいし、それに完全に覚えていないのであれば、説明したところで信じてはくれないだろう。

だが、まあ、あれだ。

親父が俺たちの繰り広げた激闘を忘れていようが、正直どうだっ  
ていいんだが。

少なくとも、親父の商売道具である馬車をぶち壊してしまった（魔法で直そうとも思ったのだが、元の形と馬車の原理を知らないの  
でそれは叶わなかった）ことには、後ろめたさを感じている（壊した  
のはミエルの魔法だが）。

そしてそれを、親父が覚えていないことを良いことに黙っている  
つもりはないし、丁度金は有り余っている。弁償ぐらいは、しても  
良いかもしれない。

「なあ親父」

「なんだい？ 兄ちゃん？ 僕は、なんで浮いてるんだい？」

「あーまあ、そんなことはどうでもいいんだが、これ、やるよ」

俺はポケットから札束を無造作に取り出し、その全てを差し出す。

「！？ い、いきなりなんだい兄ちゃん！？ なんでこんな大金を！？」

「なんつーか。覚えてないだろうが、あんたの馬車、壊しちまったからな」

言っつて、地上で粉々になっている馬車を指さす。

「に、兄ちゃんが、あれを壊したのかい？」

「正確には俺じゃないんだが、まあそんなようなもんだ。悪いな。これで新しいのでも買ってくれ」

「ほ、本当に、いいのかい？」

「ああ」

「そう、かい。 で、でもよお、こんないきなり大金を出されてもなあ」

親父は申し訳なさそうな顔をしながら、咳く。

金を受け取ることに遠慮し、いきなり大金を差し出してくる俺を、警戒しているのかもしれない。中々受け取るうとはしなかった。

が、やはり、金は欲しいのだろう。

ちらちらと視線を札束に移し、手をわなわなとさせている。

「遠慮とか、すんなよ。別に俺はドラとかいらねえから」

このままだといつまで経ってもドラを受け取るうとしないような気がしたので、俺はその後押しをしてやる。そしてその効果があったのか、親父は恐る恐る、俺の差し出した札束に手を向けた。

が、その手が札束に触れる直前、親父は手を握りしめ、そのまま下に降ろしたのだった。

「いや、やっぱりそれは貰えねえなあ。兄ちゃん」

「あー。……なんでだ？」

俺は訳が分からず、そう訪ねる。

「そうだなあ。僕にそれをくれるぐらいなら、一緒にいた嬢ちゃん二人にたくさん服を買ってやりな。そっちの方が、正しいドラの使い方だよ」

「……………」

親父の言葉を脳内で再生しながら、俺はちょっとした衝撃を受ける。

「この親父は、そんなことを考えていたのか？」と。  
金を貰うことに遠慮したわけでも、俺を警戒していた訳でもなく、俺たちのことを、シーナとユーリのことを、考えてたというのか？と。

もしそうなのだとしたら、俺はこの親父に対する『めんどくさい奴』という評価を、見直さざるを得ないかもしれない。

「……だが、あんた、これからどうすんだよ。あの馬車でドラ稼いでたんだろ？」

「そりゃあ、そうだがな。なにも、仕事はあれだけって訳じゃない。探せばたくさんあるもんだよ。そろそろこの仕事にも飽きてきたところだしな。こりゃあ丁度良いやあ」

親父は言っつて、いきなりケラケラと笑う。

問題ない、と、俺をそう安心させるために、わざと楽観的に笑っているように見えた。

「本当に、いいのか？」

「いいさ。俺はこれも、運命だと信じることにするさ。でも、その代わり、嬢ちゃんたちにはちゃんと良い服買ってあげるんだぞあ？  
兄ちゃん」

「そうかよ」

呟き、俺は親父から視線を逸らす。親父と比べて、自分の小ささを感じたような気がしたからだ。



それにしても。

俺はまた、不思議な人間に出会ってしまったものだ。

今日出会ったばかりの何の接点もない相手のために、職を捨てる。大金を手に入れる機会すらも捨て、良いことなど何も無いはずなのに。

何が、この親父をそうさせるのだろうか。

天界で出会った天使たちとは根本的に違う、思いやり。義務的なものではない、温かみ。

やはりこれは、人間だからこそその行動なのだろうか。

何度も思うことではあるが、本当、人間にはいろんな奴がいるものだ。一人一人同じような人間などあり得ないから、たくさんの方に会えば会うほど、自分の知らないものが見えてくる。自分の持っていないものが、見えてくる。

人間には力こそないが、天使や悪魔なんかよりも、よっぽど緻密テオールにできているのかもしれない。人間を下等と評する無機質な神人テオールなんかよりも、よっぽど高度な生き物なのかもしれない。

俺は自分も神人テオールであるということを棚に上げ、そんなことを思った。

「あーだが、駄目だ」

「な、何がだい？」

「あんたがドラを受け取ってくれないと、俺の気が済まないんだよ」

自分の方が小さいと感じてしまったことが悔しくて、俺の方がでかい奴なのだと対抗するかのようにそう言っただけ。こんなことを思ってる時点でみみっちい気がしなくもないが、それはまあいい。

「せめて、あの馬車を買ったドラぐらいは弁償させてくれ」

「だ、だけど兄ちゃん。俺はこの期に別の仕事を探すことにするから、馬車はもういらんよ？」

「それでも、だ。馬車を買わないんだしたら、新しい仕事を見つけるために使え。新しい仕事を見つけるまでの生活費に使え。このままあんたが路頭に迷いでもしたら、俺の後味が悪いんだよ」

「で、でもよお……兄ちゃん、本当にいいのかい？」

「ああ。あの馬車がどれだけの値段だったかは知らないが、あんな乗り物ぐらいじゃ大した値段もしないだろ。逆に、受け取って貰わないと困る。ちゃんと、あの二人には服買ってやるからさ」

「そう、かい」

「ああ。だから、つべこべ言わずに受け取れ」

俺がそつぷつきらぼつに言っただけで、

「……兄ちゃん」



むしろ、禿げ頭にでこぴんをあげたい。

先ほどの一発で三センチほど膨らんだのだから、もう一発で六センチほどになるだろう。

おでこが六センチ出っ張る親父。

横から見たら、かなりシユールで面白いかもしれない。

いやまあ、三センチでも十分面白いんだが。

「ほら。くれつ。兄ちゃん。ドラくれええ。モテない僕にはどうせドラしかないんだよおお」

空中で犬かきをして必死に俺に近づき、しがみ寄ってくる親父。

……うざったいな。

やはり、この親父に対する『めんどくさい奴』という認識は、覆さなくても良いのかもしれない。

だが、まあ。

俺がこいつをどう思うと、こっちが悪いのは本当なのである。今更、ドラをあげないわけにもいかなかった。

未だうざったくしがみついてくる親父を手で退けつつ、俺は言った。

「分かったよ。やるから。その馬車は何ドラしたか言え」

ありがとうなあ、兄ちゃん！ と親父は前置きし、視線を宙に泳がしながら馬車の値段を考え始める。

「えーっと、そうだなあ。あの馬車は確か特注品で、頑丈な上に荒れた道だろうと平気で走行できるようにしてもらったからなあ。うーん。買ったのはずいぶん昔だからうる覚えなんだが、70万ドラだったような気がするぞ？」

「70万ドラ、か。そうか」

人間界に来てからまだ日が浅い俺であるからにして、ドラの価値観が未だ良く分からないのだが、意外とするな、と、そう思った。

そしてそんなことを思いながら、俺は持ち金を計算し始める。

確か、リトリユウスドラゴンを倒した報酬で30万ドラ。

リトリユウスドラの赤眼4つを売り、一つ十万で40万ドラ。

そして三人の宿代食費代を合わせ、マイナス一万ドラ。

計、69万ドラである。

いや、確か最初に1ドラを拾っていたから、69万1ドラである。

「……………」

持ち金の計算を終え、数瞬後、俺はようやく気がついた。

馬車ぐらい買えるだろうと踏んでいたのに。

あれだけ余裕ぶって、弁償させてくれ、と言っていたのに。かつこよく、ばつとドラだけ渡すつもりだったのに。

た、足りねえッ！と。

9999ドラ足りねえッ！と。

そう、気がついてしまったのである。

表情にこそ出さないが、焦る俺。

どうしたもんか、と。

悩む。

そして悩んだ末。

でこぴんさせて気絶させてしまおうか。

そんな名案が浮かび上がった。

が、さすがに却下だ。

体裁を装うつもりもないのだが、それはあまりにもダサすぎる行動だろう。

70万も持っていないということ素直に告げることにも抵抗があるから、仕方がない。

突如として舞い降りた最終手段という名の策を、実行することにした。

「あー親父」

「なんだい？ 兄ちゃん」

「それは、間違ってる」

「な、何がだい？」

「その馬車は、70万じゃないはずだ。本当は69万なんだろう？」

「え？ い、いやあ。そんな中途半端じゃあなかったような気がするがなあ」

「いや、気がするだけだろう。69万なはずだ」

きっぱりとそう言い切ってやる。

「そ、そうだったわけかあ？」

「ああ。そうに違いない」

いかにも自信ありげに腕を組みながら、断言。

「うーん。いまいちはっきりとは思いつけないが、そこまで断言されるとうさだつたような気がするなあ」

「ああ。そうだろう。69万なはずだ」

「ま、まあ、僕としては正直どっちでもいいんだけど、兄ちゃんがそこまで言うなら、69万だったことにするかなあ」

「そうか。じゃあ、弁償するのは69万ドラで良いな？」

「ん？ ああ。別にいいぞお？ 兄ちゃん。僕は一万ドラぐらい気にせんよ」

よし。

作戦成功。

「……………」

「なの、だが……。」  
「終わってみてようやく気づいたが、これはこれでかなりダサかった。」

「なんてことを思いつつも、そんな心を悟られないよう、」

「ほら」

「と、結局札束全てを取り出し、親父の胸に押しつけた。」

「に、兄ちゃん。これ、さっきと同じ量ではないかい？」

「親父はこれが俺の全財産だと思ったのか、中々受け取ろうとはしなかった。まあ、シーナとユーリに服を買ってやると約束したばかりなのだから、当たり前と言えば当たり前かもしれない。」

「大丈夫だ。他にもまだあるから」

「これは別に嘘ではない。ちゃんと一ドラある。」

「そう、かい。じゃあ、遠慮なく頂戴させて貰おうかな」

「親父は言っつて、札束に手を伸ばす、が、またも手を止め、続けた。」

「だ、だけど、あの二人にはちゃんと服買ってやってくれよ？」

「ああ。分かってるよ」



相変わらず、同じことを繰り返す鳥頭親父だった。

「そ、それから、兄ちゃんたちが不自由な生活を送ることになったら、遠慮なく僕に言ってくれよ？　すぐ、このドラを返すから」

「ああ。だが、その心配はない」

「そうかい。そりゃ、すごい自信だなあ、兄ちゃん。でも兄ちゃんがそう言つと、本当に心配がないように思えてくるよ」

「そう、か」

まあぶつちやけた話、ドラなど昨日みたいに簡単に稼ぐことが出来るだろう。自信がないわけがない。いざとなったら、俺もミエルも飯ぐらいしばらく食べなくても大丈夫だしな。

「それで、これからなんだが」

俺は一段落付いたと、話題を変える。

「あんたは、何処に行くつもりだ？　ギゼルか？」

「そうだけど。なんだい？　兄ちゃん」

「あーなんつーか、俺らもそこ行くつぽいから、ついでに送ってやるつか？　馬車壊しちまつたしよ。俺が飛べば、多分数分でギゼルまで着く」

「そりゃあありがたいお話だなあ。だけど、遠慮しとくよ」

「なんでだ？」

「兄ちゃん、馬車は壊したけど馬は助けてくれたんだろう？ だったら僕は、あの馬と共にゆっくりと行くさ。急ぐのは、好きじゃないんだ。のんびり屋なもんでねえ」

「そうか。なら、もう地上に降ろしてやるよ」

「頼もつかな。兄ちゃん。でも、その前に、シーナちゃんとユーリちゃんにお別れさせてもらおうかな。あの二人を見ると、元気だった頃の娘を見てるようでねえ。うん」

過去を思い出しているのか物思いに老け、少しだけしんみりとした顔をする親父。

「あー」

一瞬間くことを躊躇ったが、こいつに遠慮する必要もないだろうと、触れてはいけなそうなことを訊くことにした。

「もしかして、あなたの娘、死んだのか？」

「いや、僕に娘なんかいないぞお？ ただ言ってみたくてなあ。はっはっはっはっはっは」

ツツすばこんツツ！

反射的に親父の額を指で弾いていた。

先ほど同様、気持ちが良いぐらい中身の詰まっていない音を奏で、親父はもう一度吹き飛ぶ。

だがまあ、仕方がない。反射は仕方がないんだ。

生き物なら誰もが有している能力だ。脳で考える前に脊髄が勝手に判断し、親父にでこぴんしていたままでのだ。俺は何も悪くないだろう。

と。

心の中で言い訳しつつ。

俺は遂に気絶してしまった親父の側へと飛び寄り、本当に六センチ出っ張ったデコを見て、吹き出しそうになる。

そして最後の慈悲として、宙に浮かしていた馬と親父を地に降ろし、草原に寝かしてやった。シーナとユーリに別れの言葉を言わせてやることはできなかったが、まあ、許せ。親父。

縁があれば、また何処かで出会うだろうよ。

なんだかんだ、俺はこの親父が嫌いじゃなかったよな、と、締めくくるようにそう思いながら、俺はミエルたちの元へと戻ることになった。

## 闘争と軍事の都ギゼル

その後俺は三人の元へと戻り、しばらくすると、ようやく三人の長話は終わってくれた。

そして退屈そうに待っていた俺に対し三人は口々に詫びると、すぐに、目的地である『闘争と軍事の都ギゼル』へと飛び立つことにした。

シーナは馬車が相当気に入っていたのか、珍しく少しだけ不満そうではあったが、馬車は壊れてしまったのだと話すと簡単に納得してくれた。歳の割（年齢知らないが）に、かなり聞き分けが良い子である。

そしていざギゼルへと行こうと飛び立とうとした　が、俺はまたも目的地の場所を知らないことに気がつく。今度は魔力を探知する相手もないし、また適当に飛び続ける羽目になりそうだ、と俺は嘆息したのだが、喜ばしいことにその必要はなかった。

なんでも、ミエルは魔界、天界、人間界の全ての地図を覚えているのだという。

今居る場所も、ギゼルの場所も分かると言っていた。  
やはり神界一の優等生なだけはある、かなりの博学である。

そしてミエルの案内の元、俺はシーナを、ミエルはユーリの手を引きながらギゼルへと飛び立ち、数分もせずに目的地へと着いたのだった。

『闘争と軍事の都ギゼル』

という看板が城壁に大きく取り付けられ、俺たちを迎える。

『闘争』という名を持つだけはあるのか、それはいかにも屈強そうな禍々しい看板であり、歓迎されている感じでは全くない。城壁の外で展開される市場や、畑を耕し農業にいそしむ人たちも、俺たちをじと目で見ている感じで、歓迎している風ではなかった。

だがまあ、特に躊躇うことはない。俺は町の中へと入ることにした。

そしてプリステナム同様、門兵気絶させ、なんなく巨大な扉を潜ろうとした。のだが、なんつーか。闘争とは別の名、『軍事』。この言葉もふさわしいほどに、門兵が倒された後の対応が迅速だったのである。

俺は今、門番を背に、大量の兵士たちと対峙しているのだ。た。

しかもその隊形には全くの無駄がなく、何層にも渡り俺を半円状に取り囲んでいる。おそらく俺が背にしている扉の奥にも、兵士たちがいるのだろう。背後からも闘気がひしひしと感じた。そして兵士は前方、後方だけには飽きたらず、城壁の上から弓を引く者までいるのだった。

「貴様！ 何者だッ！」

おそらく隊長なのであろう一人の兵士が、完璧な隊形から一步踏み出し、俺にそう叫んでくる。

こいつらを蹴散らすことは簡単なのだが、それをしたならば、こ

の町にはかなり居づらくなってしまっただろう。なるべくなら、それは避けたかった。

どうしたもんか。  
と。

そうミエルに訪ねようと、俺は横を向く。  
が。

「……マジかよ」

てっきり俺について来ていると思っていたミエルの姿は、そこになかった。

シーナとユーリの姿も見えず、なぜ気がつかなかったのかと、自分のアホさに一つ盛大なため息を付く。

そしてそうしたところで。

『セル様』

と、ミエルの声。

離れたところから思念を送って来ているのだろう。脳内に直接響いてきた。

『なんだ？　ってか、なんでお前急になくなってんだ？』

『すみません。ギゼルは世界的にも有名な軍事国家なのですから、無理矢理中に入るうなど猿でも考えないことだと思っていましたもので。まさか、セル様が……』

『……………』

……俺が猿以下ってか……。

『っーか。なんで俺を止めてくれなかったんだ？』

『そんなことは決まっています』

ミエルはそう前置きし、

『面白そうだったからですっ』

と、喜々した声で言った。

『……………あー』

ちくしょうが。

ギゼルまであいつのお陰で辿り着けたから、少しは見直していたのに、すぐこれか……。

「貴様ツ！ 答えるツ！ 貴様は完全に包囲されているのだツ！ 状況をしれいッ！」

少しだけナーバスになっている俺に対し、そうもう一度怒鳴りつけてくる兵士。

うるせえよ、と、ちょっとだけいらっきたのだが、急いで自制する。

『セル様。すみません。さすがにこれはちょっと冗談が過ぎていましたね』

急に、脳内に謝罪の言葉が響き渡ってくる。

『……あーまあ、もう別に、慣れてるから気にしねえよ』

『そうですか。さすがセル様、人が大きいですね』

いえ、人ではないですから、<sup>テオール</sup>神人が大きいですね、でしょうか。と、ミエルは付け加え、くすくすと微笑する。

そして真面目な口調に戻り、言った。

『それで、状況はどのような感じなのでしょう？』

『あー。完全に全方位から囲まれてるな』

『間違っても、倒したりはしないで下さいね？』

『分かってるよ。……それで、どうしたら良い？』

『そうですね。一つだけ案があります』

『なんだ？』

「貴様ッ！ 後10秒以内に答えぬと、無条件で攻撃を開始するぞッ！」

『あーミエル。早く言ってくれ』

『時間がないようですね。でしたら、私が言った言葉を何も考えず、



そのまま口に出して下さい。私は、セル様の聴覚にリンクさせて貰いますね』

『ああ。分かった』

『ではまず。俺はこの国の闘技大会に出場するために来た者だ、と言つて下さい』

「俺はこの国の闘技大会に出場するために来た者だ」

間一髪。

兵士が攻撃命令を出し切る前に、俺はそう言った。

「闘技大会に参加、だと？」

『そうだ、と言つて下さい』

「そうだ」

「じゃあなぜ、貴様は門兵を倒したりしたのだ？」

『門兵に、「お前みたいな柔男が、名誉ある闘技大会に出場できるはずねえだろ。もし嘘じゃねえんだったら、この俺を倒してから通りな。どうせできねえんだろうけどよ!」と、面白いくらい三下の台詞を言われたから、つい、な。と言つて下さい』

『……おいおい、そんなんで大丈夫なのか？』

『問題ありません。ギゼルの兵士は、闘技大会に参加する戦士たち

に強く出ることが出来ないのです』

『あー。そうなのか？』

『はい。人間界の中では大きな方であるギゼルの闘技大会に参加するためには、ギゼル側から招待されるか、ギルドランクS以上が必要です。大事な客である訳ですし、その強さは折り紙付きです。それを分かっておりますから、ギゼル側としてはなるべく敵には回したくないのですよ。それにもう一つの大きな理由としては、です。この国の経済のほとんどが、毎日行われている闘技大会によって支えられているのです。闘技大会に参加する戦士たちが泊まる宿だったり、闘技大会を見るために金を払う市民だったり、王族の中には多額に投資する者もいます。闘技大会がこの国で行われなくなったら、それはもう一大事になってしまうのです。毎日行うほどの参加人数を集めなければならぬので、尚更参加者が優遇されるのですよ』

『……………そうなのか』

思念により一瞬で伝えられたミエルの言葉に俺は相づちを打ち、ミエルが言っていた台詞を兵士に向けて放った。うる覚えだったから全て同じではないが、ニュアンス的にはほとんど同じだっただろう。

「そのような、ことが」

兵士は神妙な顔で頷き、

「それはとんだご無礼を……………」そう頭を下げた。

そして顔を上げると、では、当然お持ちしているとは思いますが、一応招待状か、Sランク以上のギルドカードの方をお見せ下さい、と、急に丁寧な口調に変わって言った。

『セル様。今からそちらにワープし、偽造招待状をお渡しします。それでなんとか凌いで下さい』

『あー、いや、大丈夫だ。俺そういや、Sランクなんだよ』

『そうなのですか？ いつの間に』

『まあ昨日いろいろあってな。つーわけで、後は大丈夫だ』

俺はミエルにそう思念を送り、ポケットからギルドカードを取り出した。

そして、一歩手前に出ている兵士に近づき、それを手渡した。

「アダムス様、ですか。確認いたしました。お騒がせしてすみません」

兵士はそう言うと、引き上げるぞ！ と、完璧な隊形を作り上げていた他の兵士たちに向けて声を張り上げる。

そして綺麗に整列したまま、寸分の狂いなく全ての兵士が足を揃え、撤退していった。

巨大な門番の前、俺一人が取り残される。

『ミエル。乗り切ったぞ』

『そうですね。それはよかったです』

『ああ。　　んで、お前たちはどうやってここに入ってくるつもりだ？』

『そのことについては心配はいりません。私は神界を抜け出す前、念のために全世界への入国券や、あらゆる招待状を偽造してきましてからね』

『そうか。　　ってあんなら最初から俺にも使わせるよ』

『いえ。そうしようと思ったのですが、それでは何の面白味がないことに気づいたもので……』

『いや、入国に面白味とかいららないからな』

『いえ。いります』

……断言されたし。

『……それに、俺はなんら面白くなかったからな』

『いえ。嘘はいけません。セル様。本当は震え上がるほどに面白くはまずです。なんせ、私が面白かったのですからね』

『……………』

最早反論する気さえ起きなかった。

急にだんまりした俺に何を思ったのか、ミエルは少しだけ焦りな

がら言っ。

『だ、大丈夫ですよ？ セル様。私はセル様がMだということを知っていますからっ』

『いやお前、なんのフォローしてんだよ……』

それに、俺はMじゃない。………多分な。  
思いつつ、嘆息。

ただ入国するだけでこれとは、本当に前途多難である。

『すみません。セル様。またも冗談が過ぎてしまいましたね。私、どうしてもセル様と会話していると歯止めがきかなくて……』

またも急に謝罪してくるミエル。

いつものことではあるが、ミエルは引き際というものをよくわきまえている。他人の感情に敏感であるから、俺が本当に怒るところまでは絶対に踏み込もうとはしない奴なのである。

だからなのか、ミエルからは今までこういった扱いを受けていた俺だが、ミエルにキレたことなど一度もなかった。むかつく、という気持ちが一日続いたことすらない。

めんどくさい。

だけど、憎めない。

嫌いになるなど、以ての外。

そんな奴だった。

そしてそれは、今も変わっていないのだらう。

## 闘技場へと

左右には同じような形をした民家が建ち並び、所々に酒場や武器屋といった少し大きめの建物が見える。道幅は広く、俺たち全員が横に並んでいても、まったく問題がなく歩行することが出来ている。道は直線的に長く続き、奥には中央広場があるようだった。

そんな道で足を進めながら、俺は思う。

色々あって、闘技大会に参加せざるを得ない状況に陥ってしまったわけなのだが、正直、めんどくさい、と。

なんで俺がマジで闘わなきゃいけないんだ、って感じなのだ。

そもそも俺は闘いを好き好んでするような根っからの戦闘野郎ではないし、悪いが、俺の相手になる人間など現れるわけもない。

そう思い、辞退することを考えるのだが、勝つと賞金が貰えるのだという。

どれぐらいの額なのかは出場する階級とランクによるらしいが、かなり高値だとミエルから訊いた。

現在の俺の持ち金はざっと一ドラ。  
服を買うことは愚か、今日の食費代、宿代すら到底届かないような額だ。

ドラは必要だが、闘うのはめんどくさい。

どうしたもんか。

と、顎に手を添えつつ悩んでいると、

「セル様」

そう、ミエルに声を掛けられた。

現在、左側に手を繋ぎ合う姉妹（こいつらホント仲良いよな）、右側にミエル、と四人で並んで歩き、闘技場へと向かっている最中である。

「その顔から察するに、セル様は闘技大会に参加するのがめんどくさいのですよね？」

碧眼で俺の目を見据えながら、そうミエルは訊いてくる。

なんで分かんだよ……。

「まあな」

「やはりそうですが。それで、良かったらですが、私が闘技大会に出場いたしましょうか？」

「あー。いいのか？」

「はい。勿論です。先ほどの行き過ぎた冗談のお詫びということで、どうでしょうか？」

別にさっきのことは全く気にしてなかったのだが（つーか言わなきゃ忘れかけてたな）、ミエルがそう言うなら、俺としてはその方が良い。



「そうか。そうだな。じゃあ、頼む」

「はい。分かりました。では、ギルドカードをお貸し願いますか？」

「ああ」

俺は呟き、ギルドカードを差し出す。

「だが、偽造招待状があるんじゃないのか？」

「それはあくまでも偽造です。その場を乗り切るための物でしかありません。もし入念にチェックでもされてしまったら面倒ですからね。こちらの方が確実です」

「そうか」

「はい。それしても、セル様」

「なんだ？」

「ギルドネーム、アダマス、ですか。ふふっ」

「……何笑ってんだよ」

「いえ。なんと言いますか。人間で言ういかにもな厨二病ですね、と思ひまして」

「……う、うるせえよ。適当に付けたんだからしょうがねえだろ」

まさかそこを指摘されるとは思わなかった俺は、恥ずかしさに顔

を背け、視線は宙を仰ぐ。

そうしていると、俺たちの会話を聞いていたシーナが口を開いた。

「あの。ミエルさん。アダマスって、なんですか？」

と。

「それはですね。シーちゃん。『無敵』、という意味ですよ」

ミエルは優しい口調で、丁寧に、真摯に答える。俺にもその態度を見せてくれ……。

「無敵、ですか。えと。セルにはぴったりですねっ」

皮肉など微塵もこもっていない笑顔でシーナは言ってくる。純粋で、本当に良い子だった。それに対し、

「無敵、って。あんた、とんだナルシストなのね」

と、ひねくれた姉。

「で、でも、お姉ちゃん。セルには本当に無敵だよ？」

俺が何かを答える前に、シーナがそう弁護をしてくれる。表情にこそ出さないが、なんとも嬉しいものだ。

「そ、そうだけど。例え無敵だろうと、自分を無敵なんて呼んでたらナルシストなのよ。それにね？ シーナ。どうせいつか、セルはミエルに負けるわ」

「ふふふ。ユーちゃん。嬉しいことを言ってくれますね」

照れ笑いを浮かべながら、なぜか俺の背中をばんばんと叩くミエル。無意識でそうしているのか、加減が全く出来ていなかった。

いてえよ。

俺はシーナがもう一度弁護してくれることを期待しつつ、指摘するのめんどくさいのでミエルの叩きを耐え続ける。

「……ミエルさんも、強いですけど。でも、セルにも……。……え、えと。……その……。……ま、まだ、セルに強いですっ」

焦りながら何を言おうか考えていたシーナは、ようやくそう言い切る。

『まだ』を付けられてしまったのが何とも悲しかった。

俺、将来的にミエルに負けると思われてるのか……。と。

嘘などつけそうもないシーナに言われたことが、それを倍増させる。

いや、まあ。

このままミエルが鍛錬を続け強くなり続けたら、さすがにやばいのは俺でも分かっているんだがな。それを他の奴に指摘されるといのは、辛いものがあった。

「シーちゃんも私が勝つと思ってきているのですか。嬉しいですね」

ミエルは言いながら、シーナとユーリの真ん中へと割り込み、両手で二人の頭を撫でる。

シーナは照れながらも嬉しそうな顔でうつむくが、ユーリは子供扱いされていると思ったのか、少しだけ不満そうだった。がまあ、満更でもなさそうではある。

「ふふふ。私に娘ができたみたいで、とても嬉しいです」

そう言うミエルの姿は本当に嬉しそうで、触れ合う三人の姿は家族のそれであった。

微笑ましく、なんとも平和な光景だ。

「えと、ミエルさんみたいな綺麗な方がお母さんなら、私も嬉しいです」

「そうですね。ではいつでも、本当のお母さんのように私に甘えて下さいね。シーちゃん」

「はいです」

シーナは頷き、頭に乗せられていたミエルの手を両手で握る。

ミエルはその可愛らしい姿に頬を緩めながら、ユーリにも言った。

「ユーちゃんも、私にどーんと甘えて下さいね。　　というよりも、

私が甘えて欲しいので是非甘えて下さい」

「ま、まあ、気が向いたら、ね」

言いつつ、ユーリもシーナ同様、ミエルの手を握る。

この二人の本当の親は生きてるのか、それとももう亡き人であるのか。

それは俺には分からないし、訊くつもりもない。

が、やはりユーリにも甘える人が欲しいのだろう。今まで、一人でシーナを守ろうと努力してきた身なら、それはなおさらなのかもしれない。

「えと、ミエルさんがお母さんなら、セルにはお父さんですね」

ふと、俺の顔を見上げながらシーナが言った。

それは何気ない一言なのだろうが、俺に少なからず衝撃を与える。

俺がお父さんか、と。

そう考えてみると、なんとも、奇妙で　滑稽だった。

「では、私とセル様が夫婦ということですね。ふふふ。それはとても　心外です」

「……………」

「　　というのは冗談で、セル様と夫婦、ですか。それはなんとも面白そうですね」

「あー、まあ、俺は正直、尻に敷かれそうだからごめんだけどな」

「男ツンデレですか？」

「……ちげえよ」

いいえ。そうなはずです。とても言うと思ったのだが、ミエルは「そうですか」と呟き、視線をそらせるだけであった。

ユーリとシーナに一瞬睨まれたような気がしたが、まあ、気のせいだろう。

目の前には既に、巨大な闘技場があった。

5 mは超えるだろう二つの銅像が門の前で人々を威圧するようであり、幾多の死人を築き上げてきたであろうその闘技場は、異様な禍々しさに包まれていた。

## 受付

俺とミエルはこういった雰囲気にはなんとも思わないのだが、人間の、それも女の子であるシーナとユーリにとっては怖いところなのかもしれない。

闘技場の門を潜ると、そこには赤い絨毯、高い天井から吊された淡い光を放つ照明器具、壁一面に広がる、人間と悪魔が闘う絵画、鎧を纏い前を見据える銅像の数々　といったものが多く置かれたロビーがあり、そこには屈強な男たちがたくさん居た。さらに、その誰もが近づきたい雰囲気を放ち、闘いに向けて気持ちを作っていたのであった。

それまでは楽しそうに会話を続けていたシーナとユーリも、ここではしゃぐ度胸があるはずもない。ミエルの手を握り、黙り込んでしまう。

「では、セル様。私は受付を済ませてきます。シーちゃんとユーちゃんをお願いしますね」

ふとそうミエルは言って、二人の手を離す。そして、端に置かれた受付へと向かっていった。

「ねえ、セル」

その姿を見送ると、ユーリが話しかけてくる。

「なんだ？」

「ミエルはここにいる誰かと、闘うのよね？ その、大丈夫、なの？。」

「あー。問題ないだろ。『強そう』と『強い』は全く違う。周りの奴らは自分を必死に『強そう』に見せているだけだからな」

「そう、そうよね。ミエルは見かけによらずすごく強いし、大丈夫よね。なんせ、セルよりも強いんだから」

「……あー言つとくがな、ユーリ。俺は、ミエルに負けたことないからな？」

「セル。嘘は男らしくないわよ？」

「嘘じゃねえっての」

「本当なの？」

「ああ。ミエルに訊いてみる」

「そうね。後でそうするわ」

ユーリはそう言い終わると、それからもう黙り込んでしまった。シーナも一向に口を開く気配はない。やはり、この場に圧倒されているのだろう。

さきほどのユーリとの短い会話ですら誰もしていないのだ。会話などしづらい状況下であるということも、分からなくはない。ミエルが受付を済ませるまで、そのまま黙って待つことにした。



十数分後。

「セル様。受付を済ませてきました」

受付場から、小走りに戻ってくるミエル。

「今日中に戦えるのか？」とりあえずそう俺は訪ねた。

「この闘技大会は毎日行われているらしいのだが、その日にエントリーしてその日に参加出来るのかどうか、少し心配だったのである。」

「はい。本当は今日の闘技大会に参加することは難しかったのですが、ドラはもうないのですよね？」

「ああ」

「ですから、無理を言ってお願ひではなく、受付さんの視覚と記憶を操作し、対戦表を少し弄らせて貰いました」

「あーそうか」

無表情に言いつつも、内心で小さく安堵する。これ以後はミエルが勝てば、シーナとユーリを野宿させることも、夕飯を抜きにすることもなくなるのだ。

「ランクは最上級であるS、時刻は七時半からにさせて貰いました」

「七時半、か。まだ、結構時間あるな」

「そうですね。今は四時半ですから、三時間ほどあります」

本来なら今の時間にユーリたちの服を買って上げられればいいのだが、なんにせよ、ドラがない。今になって、あの親父に全額渡してしまったことを悔やんでしまう。

せめて一万ドラでも手持ちに残しておけば、三時間ぐらい何とかなったのかもしれないのに、本当、俺には計画性というものがなかった。

「悪いな。ユーリ」

脈絡もなく謝る俺。

「い、いきなり何よ？ セル」

まあ当然なのだが、不思議そうにユーリは聞き返してきた。

「ドラがあれば今のうちに服を買ってやることも出来るんだが、全部馬車の親父にあげちまったからな。少しでも早く、奴隷服なんか脱ぎたいだろ？」

「まあ、それは、そうだけど。でも、仕方がなかったじゃない。このぐらい全然我慢できるわ。……それにむしろ、あのおじさんに弁償もなにもしなかった方が、あたしは軽蔑したと思うわよ？」

「あー。そうか」

「そうですね。セル様。他人に全財産を渡すなんて、普通簡単にできることではありません。『この人なんにも考えていないだけなんじゃないか』、と思ったことは秘密ですが、それに、です。あの方の馬車が壊れてしまったのは私の責任なのです。私が現れ、壊してしまつたのです。ですからセル様が謝る必要はないですし、私が謝るべきなのですよ」

一部心外な部分もあつたが、真面目な口調で言うミエル。

「み、ミエルも、別にいいって、そんな。あたしたちは買って貰う身なんだから、贅沢なんか言える立場じゃないのよ。むしろ、あたしみたいな奴隷と一緒に居てくれるなんて、感謝しなきゃいけないの。ねえ？ シーナ」

「そうですね。ミエルさん。その、服なんかよりも、私はミエルさんに会えて良かったです」

シーナとユーリの言葉。ミエルはそんな返しが来るとは思っていなかったのか、驚き、やがて愉悦の表情に変わる。

「……二人とも、優しいんですね。まだ出会つたばかりですが、私も本当に二人に出会えて良かったです。幼い頃からずっと人間は下等な種族なのだとか教え込まれていたことが、馬鹿らしく思えてしまふほどに、です」

ミエルは穏やかに微笑み、それにしても、と続ける。

「元から勝つもりですが、これで絶対に、負けるわけにはいかなくなりましたね。賞金で二人に好きなだけ可愛い服を買ってあげたい

です」

「奴隷服以外を着るのは初めてだから、はしゃいじゃうかもしれないけど、期待してるわね。ミエル」

「はい。是非、期待していて下さいね」

ミエルはそう答える。

そうしたところで。

一段落付いたのだと、俺は口を挟むことにした。

「あーあれだ。試合が始まるまでの時間だが、お前、俺との闘いで疲れてるだろ？ 万が一負けでもしたらあれだから、一応寝て休んどけよ」

もし負けでもしたら、今日は飯抜きで、さらに野宿である。俺の防御壁があるから野党の心配はないが、女の子二人に野宿などさせてしまえば、いよいよ本格的な甲斐性なしになってしまうだろう。

そう思って言ったのだが、セル様が私の心配をしてくれるなんて、と必要以上に喜ぶミエル。

「そうですね。では、セル様の言う通り、私は休ませていただくことにします。私の魔力はセル様と違って無限にある訳ではありませんから、本当はさきほどの闘いで半分以上も消費してしまっただけです。体の方も節々が痛み、かなり疲れてしまっています。さすがセル様、そこまで気づいてくださるなんて」

「……………あー」

口ごもる、俺。

そこまで考えてはいなかったのだが、わざわざ訂正するのもめんどくさいかった。別に悪いように勘違いされてる訳ではないのだし、このままでいいか、と、そう俺は考える。

「じゃあ、あれだ。とりあえずここ出るか。こんなところじゃ、心が安まるはずもないからな」

三人とも俺の言葉に賛同し、ここ闘技場内ロビーから出ることを決めた。

きゅーけー

そして、同じ形をした家々が直線上にいつまでも続く町中を歩き、やがて中央広場へと辿り着く。その中心には噴水が添えられ、周りには等間隔に八個、ベンチが設置されていた。さらに闘技大会の宣伝なのか、戦士が闘っている絵の描かれたピラが、至る所に張られている。

「誰も、いないな」

噴水だけが音を立てる整然としたこの場を見て、俺はぼつりと呟いた。

「この国では毎日行われる闘技大会が一番の行事であり、娯楽ですので、町民のほとんどは闘技場へと足を運んでいるでしょう」

「そうか。まあなんにせよ、丁度いいな。そこのベンチでも休むか」

「そうですね。では、私はここで眠らせて貰います。三人は、私に構わず雑談でもして下さいね」

ミエルは言っ、て、近くのベンチへと向かう。そしてその一つを占領し、躊躇なく横になった。

その姿を見て何を思ったのか、シーナは俺の上げた白いローブを脱ぎ始める。

「あの。ミエルさん。これ枕に使って下さい」

そしてシーナはその白いローブをくるくると丸め、ミエルに差し出した。

ミエルは一瞬きよんとするが、すぐに頬を緩め、礼を言う。

「ありがとうございます。シーちゃん。では、遠慮なく使わせて貰いますね」

ミエルは一度体を起き上がらせ、シーナからローブを受け取ると、それをベンチの先端に置いた。そしてもう一度横になってそれに頭を乗せると、ぱふつという音を立て、頭が沈み込む。

よほど疲れていたのだろうか。

俺たちが見ているのにもかかわらずミエルは目を瞑り、やがて寝息を立て始めた。

元々整った顔ではあるが、その寝顔さらに美しく、俺は一瞬見とれてしまう。それは無意識のことではあったが、ミエルを見つめている自分に対し急に恥ずかしくなり、視線を他の所へと移していた。

「あー、じゃあ、俺たちは、そのベンチに座るか」

八個のベンチ　内、ミエルの寝ているベンチの隣を指差し、俺は言う。

二人は素直に頷くと、シーナを真ん中にして俺たちは座った。

そうしてから。

特に、することはなくなった。

話し合う話題も見つからず、やがて、この場に静けさが充満する。

そんな中俺は思った。

本当は俺、こんなんびりした時間を求めてたんだよな、と。

神界に居たとき俺に話しかけてくるのはミエルしか居なかったし、それに不満を覚えたことはなかった。ただ存在するだけで忌み嫌われ、恐れられる。例えそうだとしても、俺に関わらず放つといてくれるなら、それでいい、と。そう思っていた。

基本的に俺は面倒事が嫌い、のんびりと日々を過ごすだけでいい、つまらない奴なのである。

神界を追放され、あらゆる世界を渡ってみても、それは変わらなかった。

俺はこのまま。

何も残さず、何の意味もなさず、誰とも関わらず。

いずれ死ぬのだろうな。

と、そう思い日々を過ごしていた。

それなのに。

それなのに、である。

驚くことに、俺には今三人の連れがいるのだ。

何処で間違ったのか　いや、それとも正しかったのか、俺には三人の連れがいる。

そしてそれを、当たり前のように。

もっと前から共に過ごしてきたように。そう感じている。



ここ人間界に来る前では、考えられなかった行動であり、想い  
だろう。

俺が他人と関わり、その運命を少しでも変える。

例えばもし、俺がシーナに話しかけなかったら。

この二人はミレトスの兵士に捕らえられ、奴隷に戻されていたか  
もしれない。

例えばもしミエルが俺と出会わなければ。

神界を飛び出すこともなく、全うに、神人<sup>テオール</sup>らしくその命を終えた  
かもしれない。

あの馬車の親父だって、そうだ。

俺と関わり、商売道具を失い、新たな職を探す。

良いようにも悪いようにも、既に俺は他人に影響を与えているの  
だ、と。何かに意味をなしたのだ、と。

そのことに気づき、そしてそれがなんというか。

不思議、だった。

不思議であり、嫌ではなかった。

のんびりだけを目的にここまで来たが、こついうのも悪くない、  
と。

好きといたら語弊があるが、どちらかと言えば好きなのかもし  
れない、と。

柄にもなく、そんなことを思った。

「寝ちゃったわね」

ふと、そう横から声があった。考え事をしていた俺は何処にも焦点が定まっていなかったが、意識して音源に視線を向ける。そして、「そうだな」と答えた。

真ん中にいるシーナが、ユーリの肩に頭を寄せながら寝ていたのだ。子供の割に色々と気配りの訊くシーナだが、寝息を立てるその姿は年相応だった。

ユーリはそんなシーナの姿を、優しい目でうつとりと眺める。本当に、妹が愛おしいのだろう。

「ねえ。セル」

肩に乗せられたシーナの頭をそっと撫で、ユーリは話を切り出す。

「なんだ？」

「何回でも言うけど。ホント、ありがと、ね」

「いきなり、なんだよ」

「あたし、ね。今まで生きていた中で、今が一番楽しいのよ。奴隷として生きてきて、シーナを守ろうと気を張って、毎日が辛かった。シーナが居たから今まで自我だけは明るく保ってこれたけど、本当、辛かった」

「……そうか」

なんと答えればいいのか思い浮かばず、俺は相づちだけを打つ。

「うん。だから、初めてミレトスの外に出て、あんたに会ってミエルに会って。ただ話してるだけでも。歩いてるだけでも。それだけで、楽しかったのよ。空を見上げるだけで今のあたしなら、楽しいかもしれないわ」

ユーリはもう一度シーナの髪を撫で、続けた。

「……それはね、多分、シーナも一緒だと思う。あたし一人じゃ、シーナをこんな楽しませて上げることは出来なかったと思う。だから、ありがとう」

「ああ」

「あんたが私たちを見捨てたらどうしようって考えると、すごく不安だけど、今はあんたに甘えさせて貰うわ。迷惑かけたら、その、ごめん、ね」

しんみりと、そう謝るユーリ。

俺が何かを考えている間に、こいつもこいつなりに色々と考えていたのかもしれない。いや、好きで考えていたのではなく、それがこいつの性なのかもしれない。

強気ではあるが、強い人間では、ないのだろう。

「あーお前、あれだ。……考えすぎ、なんだよ」

「……な、何が？」

「例え俺がお前らを見捨てたとしても、ミエルは絶対に見捨てないだろうよ。あいつがお前らを置いてどこか行くような姿なんか、想像できるか？」

「……できない、けど」

「そうだろう。つーか、そもそも 俺も、今更お前らを見捨てるつもりはねえよ」

「……………」

「それに、だ。俺はお前らを楽しませやってるつもりはないし、それで楽しいんだとすれば、それはお前らが勝手に楽しんでるだけだろ。そのことで俺に礼を言う必要はないし、引け目を感じる必要もない。……まあ、確かにお前らに出会って面倒事は増えるかもしれないが、……それも、たいしたことじゃねえよ。 むしろ」

俺はその先を言いかけて、それを止めた。

「むしろ、何？」

「いや、なんでもない」

俺がそう言うと、消化不良ではあっただろうがユーリはそれ以上踏み込んで来なかった。

しばらくの沈黙の後、それを破るようにユーリは口を開いた。

「あたしは、さ。あんたやミエルのように強くない、ただの人間で、シーナみたいに素直になれない、小さくて、弱い人間なの。いつも

変な意地張って見栄張って、本当は心配性でいろんなことが怖くて仕方がないのに、それを認められないような、人間なの」

急に、自分を卑下し始めるユーリ。

自分でも分かっているんだけど、中々変えられないのよね、と自嘲した。

俺に何を伝えたいのだから分からずにいると、

「そんな私だけど、その、これからもよろしく頼むわね。セル」

と、ユーリは締めくくるようにそう言った。

いきなりの言葉であり、その真意はよく分からなかったが、とりあえず「ああ」と俺は応えた。断る訳も、必要もなかった。

「あんたは礼を言う必要はないと言ったけど、やっぱりありがとね。もし迷惑だったとしても、これだけは言い続けさせて貰うわ。ホントに、感謝してるのよ」

「あー。まあ好きにしてくれ。だが、引け目を感じる必要はないから遠慮だけはすんなよ？ 昨日も言ったが、嫌いなんだ。遠慮するのもされるのも。気を遣うのも遣われるのも、な」

「分かっている。これからも、ずけずけと言いたいこと言わせて貰うわね」

ミエルとユーリに言いたい放題言われる図を想像すると、遠慮して貰ってもらっていた方がいいかもしれないと一瞬思ったが、まあ、

いいか。遠慮されるよりはずっとましだろう。

「柄にもなくしんみりとした話しちゃったけど、セル」

「なんだ？」

「今の話、全部忘れてね」

「無理言っつな」

「セルなら出来るわよ。記憶消すことぐらい」

「なんだその無駄な信用。そんなことできねえし、自分にするわけねえだろ」

「え？ そうなの。でも、セルって実は引くぐらいマゾって……」

「ミエルだなあの野郎」

「ミエルも言ってたけど、あたしもそう思っつわ」

「……お前もかよ。俺はマゾじゃねえっての」

多分な。

「そうなの？ 我が儘ねえ……あんだ」

マゾを否定して我が儘とか……。

……マゾかよ。

「じゃあ、ゲソでいいわ」

「……いや、なにゲソで妥協してやる、みたいに言ってるだよ」

「ゲソでも駄目なの？　　ったく」

「……なんか呆れられたし」

俺は思わず一つ嘆息する。

そんなこんなで。

意味のない会話をだらだら続け（主導権が俺に渡ることはなかった……）、時に沈黙が訪れ、二時間半という長くもあり、短くもある時間は過ぎていった。

俺も寝るつもりだったのだが、それは叶わなかったようである。

ミエルが目覚め、シーナを起こし、もう一度闘技場へと向かうことにした。

## 闘技大会とその後

そして試合は開始した。

俺たちは選手ではないので、付き添うことはできずにスタンドからリングを見下ろしている。この試合は大取りということもあるのか、人々の歓声、熱気は凄まじく、何千人と入れるだろうここスタンドからは、人の声を通り越し轟音が響いていた。常人より耳の発達している俺にとっては、何とも辛いものである。

と。

思っている間にも。

相手の男 2 mを優に超えるほどの巨漢で、魔力も腕力も中々である男を 一瞬で。試合開始の合図、カーンという金属音すらまだ消えぬほどに 一瞬で。

ミエルはその敵を、倒した。

大取りなのだから少しぐらい善戦するそぶりを見せてもいいというのに、一秒とかかけず、ミエルは敵を倒してしまったのだ。男は鈍い音を立て、勢いよく金属製のリングに倒れ込む。

その姿を目の当たりにした観客たちは啞然とし、少し前まではあれだけ熱気に包まれていたはずなのに、音一つたてる者は居なくなつた。

あまりにも早すぎる決着。その予想外の展開に、見た目に反したミエルの強さに、頭が追いついていないのかもしれない。



「み、ミエルさん……すごいです」

「ほ、ホント……すごいわね」

そして俺の隣に立つ姉妹がそう呟いたのを境に、闘技場はもう一度爆発的に活気づいた。

楽しみにしていた試合が一瞬で終わった事への義憤を向ける者。素直にミエルに拍手を送る者。驚きすぎて雄叫びを上げる、頭の危ない者。様々であった。

「良かったです。勝つことが出来ました」

ミエルの試合が終わり、賞金を貰った後、俺たちは闘技場の前で落ち合う。空はもうすっかり黒く、薄暗かった。

「すげえ呆気なかったな」

「少し本気で倒しにいつてしまいましたからね。カんでいたかもしれません。加減が出来ませんでした」

「まあ、あれだ。なんだんかんだで賞金貰えたんだから、何でもいいけどな」

「そうですね。これで、ユーちゃんとシーちゃんに服を買って上げられます」

ミエルが言うと、隣でシーナと手を繋ぐユーリが口を開いた。

「……ありがとね、ミエル。あたしたちのために」

「いいんです、ユーちゃん。賞金は20万ドラほどですが、全部使っちゃって下さいね」

「に、20万……。そんなに、使って良いの？」

「当然です。二人の服を買うために、闘ってきたのですから」

「そう。……ホント、ありがと」

礼を言うユーリに続き、シーナも、えと、ありがとございませうと頭を下げた。

「私がしたくてしたのですから、お礼なんていいのです、二人とも。遠慮はしないでください。それよりも、これから服を買いに行きましょうか」

「あーでも、結構時間遅いから明日でもいいんじゃないか？」

現在時刻は8時半近く。まだかろうじて開店中かもしれないが、そんなにゆっくりと買い物できる時間帯ではないだろう。

「確かに、そうかもしれませんね。シーちゃんとユーちゃんはどうしたいですか？」

ミエルは二人に尋ねる。

「えと、わたしは、明日でも大丈夫です」

そう言うシーナに続き、ユーリは「あ、あたしもよ……」と呟く。その顔が残念そうだったあたり、本当は今すぐにでも買いに行きたかったのだろう。

「お姉ちゃん、今から行きたかったの？　お姉ちゃんが行きたいなら、えと、わたしも行きたいな」

そんなユーリの残念そうな顔を伺ってか、シーナは言う。

「な、何いつてんのシーナ。あたしは別に……明日でもいいわよ。明日でも全然我慢できるし、それに、そうよ。明日の方がゆっくりと見れて良いじゃない。うん。明日の方が絶対良いわよね」

途中から自分に言い聞かせるようであったが、妹の前で我が儘は言いたくないのだろうか。我慢しているのは見て取れるし、良く分からなかった。

が、まあ、ユーリがそう言うのなら良いのだろう。

「じゃあ、宿でも探すか」

「え？　う、うん。そうね」

俺の言葉にさらに残念そうにしながらも、ユーリはそう頷いた。

「ユーちゃん意地張らなくてもいいのですよ？　とりたいところですが、確かに今からではゆっくり出来る時間はないかもしれませんね。明日にしましょうか」

ミエルはそうまとめると、宿の場所は把握してるのか、迷い無く

闘技場から平行に見て右側へと向かっていった。

俺はすぐにその後を追いつ、その後ろから「あ、あたしは意地なんで張ってないからね。ミエル」と、文句を漏らすユーリがついてくる。そしてそのユーリと手を繋ぐシーナは、「お姉ちゃん、意地張ってるよう」と小言を垂れながら、ユーリに手を引かれ、小走りしていた。

それからミエルについていき、十数分ほど歩くと、宿屋が見えてくる。プリステンダムの宿屋よりも大分値段は高かったが、俺たちはそこに泊まることを決め、大分遅い夕飯を頂いた。シーナもユーリも文句一つ言っていなかったが、やはりお腹は減っていたのだろう。すごい勢いで出された物を食べていった。

夕食を終えると、三人仲良く宿の風呂に入り（勿論シーナ、ユーリ、ミエルの三人である）、12時を過ぎた頃には、一度寝たとはいえ、シーナはもう眠たくなってしまったようだった。

質素な木の床に、丸机、横にはベッドが四つ置かれ（四人部屋を借りたから四つあるのだが、シーナはユーリのベッドに割り込んでいる）、シーナはそのベッドの上で、うとうととしている。それでもぎりぎり起きていたのが、遂に耐えられなくなり、そして寝てしまった。

ミエルとシーナはその姿を見て、うっとりしつつも続けていた雑談を止め、自分たちも寝ることにしたらしい。ユーリはやがてシーナと肌を触れ合わせながら寝静まり、ミエルは「セル様」と、俺に話しかけた。

「あーなんだ？」

「二人の寝顔、かわいいですね」

ミエルは枕に頭を乗せ、ベッドの上で半身になって俺の目を見据えながら言った。明かりを消し、ほとんど真つ暗だというのに、ミエルの金の髪は煌めき、碧眼は猫のように光る。目が合うとなんとなく恥ずかしくなり、俺は腐りかけた木の天井を見上げた。

「こんな可愛い二人を奴隷として扱うなんて、本当、ミレトスは許せないです」

「あー。お前、二人がミレトスの奴隷だってもう知ってたのか？」

「はい。二人に直接聞いたわけではありませんが、一緒にお風呂に入ったときに見てしまったのです。二人の背中に、黒い龍の烙印が押されているのを。もう、完全に消し去ってあげましたけどね」

黒い龍の刻印。昨日俺が取り外した首輪にも、あったものだろうか。

「そうか。　　つーか、お前、そもそもミレトスなんて良く知ってたな」

「当然ですよ。セル様。私たち神人の本分を忘れたのですか？」

「……あー。……なんだっけ？」

「本当に、忘れていたのですね……。セル様は相変わらず、神人らしくないです」

ミエルはなぜか嬉しそうにそう前置きし、続けた。

「私たち神人の本分、それは世界の均衡を保つこと。強くなり過ぎた勢力を弱らせ、均衡を保つこと、です。ミレトスは人間界の中でその候補に挙がっていたのです。私たちは知っているのが普通なのですよ。とはいえ、私は神界内で仕事をしていたので、人間界には来たことがありませんでしたけどね」

ミエルは言つて、ベッドの上でもぞもぞと動き、半身になつていた体を天井に向けた。

「人間とは、本当に不思議な種族です。なぜ、シーちゃんやユーちゃんのように良い子がいるのに、他方では人を物のように扱う人間がいるのでしょうかね」

「確かに、な。俺も思つてた」

ミエルは俺と同様、初めて人間界に来て、初めて人間と話した。思うことは、同じだったのだろう。教え込まれていた人間の印象とは全く違う、と言いつれもし。言いつれはしない。人間には同じ人間などあり得ず、人間は人間と、全てを一括りに出来ないのだ。

「神人は、神に作られた戦闘種族。義務感や忠誠心が厚い種族。決められたことをこなし、そこに個性はありませんでした。私もセル様と出会わなければ、自分の確固たる心を持ってなかつたかもしれない。他の神人と同じようになっていたかも、しれません。そう思うと、少し怖いです」

「別に……お前は俺に会わなくてもそうだっただろうよ」

「そんなことはありません、セル様」

ミエルは断言した。

「私はセル様に会うまで、親の言いなり、自分の意志はありませんでした。セル様が神界を追放されてしまった後も、私はただ無感情に生きていただけでした。セル様がいてこそ、今の私なのです。私が神界を飛び出した理由だって、限界、だったからです。他の神人のようになってしまいそうだったから、なのです。私が本当の自分を出せる場所　セル様の元に……どうしても行きたかったのですよ」

「……………」

神人が神界を抜け出す。それはもう、歴史に残るほど一大事だ。神が生まれてから今まで、数件あるかないかの出来事なのである。

ミエルがそれほどにまで大きな事をしでかした理由が、俺に会うため。

「そうかよ」

なんとなく照れ臭くなり、俺はそう吐き捨てた。

そして体を動かし、ミエルに背を向ける。

「セル様」

ミエルは俺とは逆に、天井に向けていた体を俺に向けた。

「なんだ」

「そろそろ、私寝ますね。先ほど数時間寝ましたが、実はまだ疲れ  
ているのです。セル様と全力で闘ったこともあります。セル様の  
元にたどり着くまで何も食べず、少しも寝ず、ずっと飛び回って  
ましたからね。その疲れが出てきたのでしょう」

「あーそうか」

「そういえば今思いついたのですが、私がセル様と闘う前にそうや  
って体力と魔力を消費していなければ、私が勝っていたかもしれま  
せんね」

「それはねえよ。俺が勝ってた」

「分かりませんよ？ 私が勝っていたかもしれません」

「いや、俺が普通に勝ってたな」

「そうでしょうか」

負けず嫌いのミエルが（俺もだが）珍しく引き下がったと思うと  
「では、明日もう一度戦い、決着を付けましょうね」と言った。

「それは、マジで勘弁してくれ……」

そんな切実な願いに対しての返答はもう無く、やがて、三人分の  
寝息が聞こえた。

……俺も、寝るか。



珍しく色々あった一日だから、本当は俺も疲れているのだ。

## ギゼルの使者

熟睡し。

目覚める。

現在の時刻は、正午12時過ぎ。  
昨日同様かなり遅い目覚めであった。

俺はぽりぽりと頭を掻き、欠伸を一つする。

そのとき、コンコン、と。

鍵付きの木製ドアが叩かれた。

そういえば目覚めたときもこの音がしたような気がするが、そうか。

俺はこの音に起こされたのか。

と、そんなことを思いながら、部屋の中は俺一人だということに気がつく。ミエルたちは何処に行ったのだろうか。

俺が出るしかないようだった。

起こされたことによるちょっとした苛立ちとめんどくささに心の中で悪態を付くが、もしかしたらシーナやユーリが入れなくなっている可能性もある。出ないわけにはいかなかった。

俺はしぶしぶ立ち上がり、もう一度ノック音を聞きながらそのドアへと向かう。

そしてドアを開けると、そこには　ユーリ、でも、シーナでもなく。

二人の男が居た。

忘れていただけかも知れないが、俺の記憶には全くない二人である。整った体裁をし、礼儀正しそうな中年の男たちだ。怪しげな風体には見えなかった。

「失礼致します。アダムス様に用があるのですが、いらっしやいますでしょうか？」

アダムス。俺のギルドネームであり、昨日ミエルが闘技場に参加するために使った名前だ。おそらく、ここではミエルのことを言っているのだろう。

「いないが。なんだ？ あんたら」

「すみません。申し遅れました。私たちはギゼル王の使いでございます」

「ギゼル王の使い？　良く分からんが、そうか。で、ミエルに何のようだ？」

「ミエル、とは、アダムス様のことでしょうか？」

「あーそうだな」

「そうですね。こちらにもすぐにあなた様の質問にお答えしたいところではありますが、その前に、ご無礼承知でお聞きします。あなた様はアダムス様とどういった関係なんでしょうか？」

「俺か？」

なんと応えようかと考え、

「あいつの、師匠だ」

と、応えることにした。これが俺たちの関係に一番近いはずだ。俺の方が強いし。

「アダマス様の、師匠。で、では、あのアダマス様より強いのでしょうか？」

「そうだ」

きっぱりと即答してやる。

「そ、そうですか。少し、失礼致します」

男はそう言って俺に背を向け、もう一人の使いと何かの相談をする。

しばらくすると男は向き直り、話を続けた。

「すみません。あなた様のお名前を伺ってもよろしいでしょうか？」

「セルだ」

「セル様ですか。では、セル様がアダマス様の師匠だということ信じ、要件をお話しします」

正直堅苦しい話になりそうだったから話を切りたかったが、相手

の真剣さに気圧される。やはり、俺は押しに弱いのだろう。

「私たちがここにきた理由なのですが、最近各国で深刻な問題になっている行方不明者続出の件については、ご存じでしょうか？」

「いや、知らん」

「そ、そうですか。では、説明させていただきます」

「あー。頼む」

「今から約一年前からでしょうか。全世界規模での行方不明者が多発し始めたのです。行方不明者は何の脈絡もなく消え、時には一國が丸々一晩で消えてしまうこともありました。そして一年間で被害はみるみる内に増えていき、やがて、国の代表が集まる世界会議が行われるまでに深刻な事態になってしまったのです。警備強化を義務づけ、人が突如として消える原因を全国家で搜索し始めたのですが、その原因は中々見つかりませんでした。何にせよ、目撃者がゼロなのです」

「そうなのか？」

「はい。それで本題なのですが、実は私たち『闘争と軍事の都ギゼル』は、遂に、その行方不明者続出の原因を掴んだのです。それは大規模の、大国家規模で行われる、『人攫い』でした。既に被害者数は数十万にも上ると言われておりますが、その全ての人たちが巧みに攫われていたのです。目撃者がゼロな理由も簡単なことでした。誰でも、いいのです。奴隷として使えるのであれば、攫う相手は誰でもいいのです。だから誰かに見られでもしたら、迷うことなくその人も攫う。目撃者もろとも全員攫っていけば、当然目撃者はゼロ

となります。そして、攫われるだけならまだ救われるのですが、この事件は正に非人道的でした。攫われた人たちは、数十万人の人たちは 全て、奴隷にされてしまっていたのです」

「……奴隷、か」

俺は男の言葉を反芻し、呟く。

好きな言葉ではない。

むしろ、嫌いだ。

シーナやユーリに出会ったことにより、大嫌いになったかもしれない。

命令され。働かされ。

ただそれだけの存在。

そんな人間が数十万にもいるなど 考えられなかった。

どれだけ悲惨なことなのだろうか。

考えたくもなかった。

「はい。そしてその無理矢理捕らえられた人たちは、ただ奴隷として働くだけではなく、時に商品として扱われていたそうです」

「……そう、か」

呟きながら、俺はなんとも気持ちの悪い感情が、心の中を渦巻くのを感じる。

人が人を従え。  
人が人を売る。

いい話じゃない。  
いい話なはずが、ないのだ。

虫ずが走るほどに惨く、哀れな話だろう。

俺はこの二日間で人間にはいろんな奴が居ることを知り、人間を面白い種族だと思った。

様々なルールがあり、生きるために働く。

何かを売って、何かを買う。

面白いと思っだし、上手くできてると思った。

それなのに。

人間が使うためにドラがあり、ドラを稼ぐために物があるのに。

人間あってこそそのドラであり、物であるのに。

人間まで売り物なのか、と。物、なのかと。

その衝撃は大きかった。

「そして、その犯人　いえ、これは犯人なんて生易しいものではない  
ありません。その、首謀者は　」

言葉を溜め、

ミレトス、だったのです。

と、そう重々しい口調で男は言った。

ミレトス。

シーナとユーリの故郷であり。

シーナとユーリを支配していた国。

なぜだろうか。 いや、分かっているのだろう。

人間が人間を従え。

人間が人間を売る。

それを聞いたときは、ただ俺の中で暗い感情が広がり  それだけだった。

だが今、ミレトスがそれを行っているのだと聞き、一番近い感情で言うならば怒りだろうか。その感情が俺の心を支配し始めたのだ。

「ミレトスが国全体で行う犯罪、人攫い。ギゼルにも被害はありました。ですから勿論、ミレトスを糾弾し、捕らえられた人々を解放させなければなりません。ですが、相手はミレトス。いくら私たちの国が『軍事の国』と呼ばれていようと、ミレトスには、圧倒的戦力を持ったミレトスには、敵わないのです」

ここまで話を聞き、ようやく、こいつらが何を頼みに来たのかを悟る。

「つまりお前らは、昨日の闘技大会で『強さ』を見せつけたミエルに、ミレトスを倒す手助けをして欲しいってことか。  それで俺がミエルよりも強いのなら、俺の協力も欲しい、と」



「お察しの通りです。セル様。どうか私たちに協力して頂けますでしょうか？ 報奨金は満足のいくほどに弾むはずです」

「……あー」

めんどくさい。

だが、断ることなどしなかった。

分かりやすい悪、ミレトスを憎み。

自分に近い人間を不幸にさせた、ミレトスを憎み。  
それはただの偽善なのかも知れない。

正義の気持ちなどこれっぽちも持っていないのに、自分に都合のよいように悪を憎む。

それは偽善であり、只の我が儘なのかもしれない。

だが偽善でありながらも、その憎悪と憤怒は偽物でないのだ。

たった二日。

たった二日だが。

俺は思っている以上に、シーナとユーリに感情移入してしまっているのかも知れなかった。

「……分かった」

苦渋の決断　ではなく、あっさりと決め、俺は応える。

「そうですね。それはありがたいです。ですが、試すようで申し訳  
ありませんが、あなた様の強さをお見せして貰ってもよろしいでし  
ようか？ アダマス様の力が未知数故、あなた様の力も、計れない  
のです」

「……………」

「すみません。お気に障ってしまいましたでしょうか」

「いや、別にいい。見せてやるよ。俺の 力」

「そうですね。ありがとうございます」

「その前に、あんた。世界地図は持つてるか？」

「いえ。今はお持ちしていませんが……………」

「そうか。なら、ここからミレトスまでの行き方は分かるか？」

「はい。それなら」

「じゃあそれを頭の中で明確に思い浮かべろ」

「…………？ 分かりました」

男は俺が何をしたいのかわからないようで、もの問いたげな顔を  
する。が、とりあえず従うことにしたらしい。

俺はそんな男に対し上級精神干渉系魔術を使い、男の思い浮かべ

るミレトスまでの道順を俺の頭にインプットする。そしてそれを絶対に忘れぬよう、頭の中でプロテクトを掛けておいた。

「もういいぞ」

「あの、セル様。今あなたは、何をしていたのでしょうか？」

「記憶のごく一部を貰っただけだ。気にするな。それより、俺の力の証明だが」

「はい」

「俺が今から、ミレトスを潰してやるよ」

そう言って、ギゼルの使者が止めるのも聞かず、部屋を飛び出した。

無謀だとか何とか言ってる声が後ろから聞こえてくるが、そんなものは無視だ。

## ミレトス

一国を壊滅させる。

それは思っている以上に大変なことであり、めんどくさいことだろう。

だが、めんどくさいからと言って、ミエルに手伝って貰おうとはしなかった。

これは俺の意地だ。

動機が動機であるし、ミエルに知られたらめんどくさいことになる、という意味での意地である。

だが、もう一つの意地。

シーナとユーリには、俺がミレトスを倒しに行くことを知られなくはなかった。

シーナとユーリのためにミレトスを倒しに行くのだと、思われたくはなかった。

これも、意地。

だがこの意地は、大事な意地だった。

このことがユーリに知られてもしたら、あいつは一層俺に感謝し、いよいよ引け目を感じ始めるかもしれない。これからも共に過ごしていくつもりならば、それは避けたかったのだ。

くどいようだが、俺は嫌いなんだ。

遠慮するのも、されるのも。

気を遣うのも、遣われるのも、な。

『武力と服従の都ミレトス』

ギゼルの使者から貰った記憶を頼りに高速で飛び立ち、ものの数分でミレトスへと着いた。俺が見た他の国のように、周囲に市場が展開されるようなことはなく、只の荒野。みるからに閉鎖的であり、強風が砂埃だけを巻き上げる。俺は一度その荒野に降り立ち、下からミレトス全体を見上げた。

ここがいろんな奴が言っていたミレトスなのか、と、まず感慨深かく、次にここがシーナとユーリを苦しめていた国なのかと、怒りとも言えぬ感情が沸き上がった。

目の前の城壁。

軍事の国と呼ばれるギゼルよりも遙かに高く太く、強固な城壁。ミレトスの紋章であるどす黒い龍の刻印が、大々的に描かれている。

俺は衝動的にこの城壁をぶち壊したくなった。

勿論、その欲求に逆らうことはしない。

スバイクシス  
轟爆炎？。

そつ心の中で呟き、俺は両手を空高く挙げる。

両手の先に生み出された火球は周りの自然エネルギーを吸収していき、みるみるうちに大きくなっていった。

そして俺の10倍ほどの体積になったところで、その火球を城壁に向けて投げつける。

城壁には何十層にも渡る魔法壁が張り巡らされていたが、そんなものは俺にとつて薄皮程度にしかない。やがて火球は城壁に激突し、爆発。爆音を奏でる。

だが、人間の魔力で良くここまで城壁を作り上げたものである。その城壁はぎりぎりの所で、破壊されることを拒んだのだ。

スバイラボース  
轟爆炎？。

そんな城壁にもう一度火球を放ち、今度こそ、完全に穴を開ける。城壁ぐらい飛び越えることは可能なのだが、派手にやりたかった。

続いて、

ケイクシス  
炎轟龍巻。

そう唱え、炎の竜巻を召喚。

城壁の残骸を巻き上げつつ、ミレトスの内部へとぶち込む。

加えて、

イストドラクシス  
？炎火龍。

ドラクシス  
龍爆炎の超強化魔法を放った。

遙か頭上、全形20mを超える炎竜を『無の空間』を経由し、魔

界から解き放つ。

「ごおおおおおおおおお。」

そして炎竜に自らの意志を与え、人以外の物を喰らい尽くす命令を与えた。炎竜は辺り中に火炎をまき散らし、ミレトス内部へと突撃していく。

これまでに放った三つの最高峰火属性魔法。

これによりミレトスの城壁は完全に崩れ落ち、ようやくここからでもその中身が見えてくる。

炎の竜巻が建物を巻き上げ、炎竜がそれを喰らう。ミレトスは火の海に包まれ、それは壮絶な光景だった。

だが、にもかかわらず、人々の逃げ惑う姿はない。  
むしろなんだ。

プリステンダムで出会った兵士とは比にならないほど強固な装甲をした兵士の編隊が、こちらに向かってくるのである。

なるほど。

炎の竜巻を見て。

炎竜を見て。

飛び交う火球を見て。

少しも動じることなく、歩を進める。

人に攻撃をしないよう魔力操作しているとはいえ、中々にさすが

だ。

ここミレトスが他の国に恐れられるだけは、あるのかもしれない。  
ホントいつ以来だろうか。

横一列に近づいてくる兵士たちを眺めながら。

常にめんどくさがり屋の俺が。

血湧き肉躍っていた。

死者を出してしまうかも知れない、と、そう思った。

俺は悪になるつもりはさらさらないが、あくまでも、正義でもないのである。

なれて偽善者、常に傍観者だ。

たまたま今回は偽善者になり、ミレトスを滅ぼそうとしているに過ぎない。

それ以上になるつもりは全くなかった。

そんなことを思いながら。

俺は空高く飛び立つ。

探査魔法で一般人が地上に居ないことを確認し、空中に魔法式を展開した。

そして大量の炎を次々と魔方陣から生み出し、やがて、炎の津波を作り出す。

紅に波打つその津波は炎の竜巻を超え、炎竜の大きさを遙かに超え、ミレトス全てを飲み込むべく前進する。



それを見て何を思ったのか、編隊を作り上げる兵士たちは一部に収束。

そしてその全員が詠唱を開始し、炎の津波に対抗する真性の津波を生み出す。最初は小さかった水の塊も重なるように徐々に大きくなっていき、やがて俺の炎の津波に匹敵するまでとなった。一人では無理だろうが、全ての兵士が協力することによってこの大きさ、この威力を生み出したのだ。

塵も積もれば山となる、か。

俺はその津波を眺めながら、そんな格言を思い出す。

だが結局、それは俺一人の力にも及ばなかった。

炎の津波は水の津波とぶつかり合い、一瞬で蒸発する。

そして炎の津波は尚勢い衰えることなく、兵士全てを飲み込んだのだ。

溶岩。マグマ。

飲み込まれれば、耐えられるはずもない。

いくら強固の装甲だろうと。

いくら魔法壁を張り巡らせようと。

その全てを溶かしきるだろう。

そう思い、油断した 刹那。

一度に一人何本放っているのだろうか。  
というほどの量の弓矢が、俺を襲った。

ミレトスの地上が溶岩で埋め尽くされ、兵士たちを一掃した  
はずなのに。

そのはずなのに 直後。

無数の、数えきれぬほど無数の弓矢が、俺を襲ったのだ。  
避けるとかそう言うレベルではない。

何処に行っても当たるとは言っただけの量。

俺は咄嗟に炎のバリアを展開し、それを弾いた。

それにしも。

あれだけの攻撃を喰らっておいて。

なぜ、生きている？

なぜ、反撃できる？

フサフ、  
魔探知。

俺は疑問に思い、もう一度探査魔法を掛けてみた。

先ほど掛けた人の気配を調べる探査魔法ではなく、その魔力と生  
態を調べる探査魔法。

「なるほど」

一瞬で調べ終え、呟く。

俺の魔法を喰らって平気でいられるわけだ、と。

あの兵士たちは 不死兵であり、傀儡。  
つまりは、操り人形だったのである。

おそらく、人間を元にした傀儡なのだろう。兵士からはまだ人の  
生気が感じられた。

生きた人間の感情を奪い、改造し、戦闘人形にする。

何処まで、外道な国なのだろうか？

沸き上がる感情を噛みしめつつ、俺は不死兵に近づいていく。

不死兵は確かに厄介だ。攻撃しても攻撃しても、立ち上がり、反  
撃してくる。

うざったいこと極まりない相手だ。

だがしかし、神人育成学校テオールに居たときに学んだことなのだが、相  
手が不死と分かってしまえば対処する方法はいくらかあった。

第一に、消滅。全てを消滅させればいいのだ。

不死兵は体に不老石が埋め込まれているケースが多いらしい。そ  
れを破壊すればもう立ち上がることはないため、全てを消滅させて  
しまえばいいのだ。

第二に、不死兵を操る者の抹殺。

不死兵には基本的に意志がない。それを操る者がいるのである。  
そしてその命令を与える存在を無くしてしまえば、不死兵にはも

う害意がないという訳だ。

以上二つの方法が主なのだが、俺にとっては、どちらの方法もめんどくさかった。

もつと簡単であり、そして、俺ぐらいでないとならない方法。

第三の方法をとることにした。

不死兵が無数の弓矢をもう一度放ってきた時を見計らい、空間転移。

組まれた隊列の、その目の前に現れる。

そして、闇を展開した。

どす黒く、終わりのない闇。漆黒で混沌の闇を型取り、いわばブラックホールの様に 吸引を開始する。

ミエルのような実力者は無理だが、この兵士たちはただの不死兵。

魔力も腕力もそれなりで、死なないことが厄介なだけの、不死兵。

抗うすべはなく、闇に吸われ、闇に飲み込まれ、やがて 闇に消える。

死なないのなら、殺さなければいい。

それが第三の方法であった。

いろいろな術式を展開する抵抗も虚しく、しばらくして全ての兵士が闇に飲み込まれる。

俺が作り出した闇。

俺が解放しない限り。

その生を終えない限り。

二度と日の光を見ることはないだろう。

俺はふう、と息をつき　だが当然、まだ終わりではなかった。

俺の目的は奴隷の解放　そしてこの王をぶちのめし、殺すことだった。

城壁を破壊し、町中を火の海にし、不死兵を闇に飲み込む。

それだけで国にとっては大打撃だろうが、根本的には何も変わらない。

不死兵に意志は無く、罪はないのである。

それに、数十万人居るといふ奴隷。

その気配が見当たらなかった。

何処にいるのだろうか。

俺は自分で生み出したマグマを水系魔法で相殺し、何もなくなつた、ただただ広いミレトスの中央部に飛び立つ。

そして地に魔方阵を展開し、それをミレトス中央部から円状に広げる。

やがて建物の瓦礫すら残らないミレトス全体に、複雑な魔法式が行き渡り　俺は三度目の探査魔法を掛けた。

即興だった一度目と二度目とは比にならないほどに強力な、探査魔法。

魔方陣が触れるその区域の　記憶、情報を全て取り出すことの探査魔法である。

そしてそれを終え、俺は全てを知った。

ここに王宮などの目立つ建物がないことも、捕らえられた奴隷がいないことも、全て。簡単なことだった。

ミレトスとは　地下帝国だったのである。

地上は全て囿。この下に、町が形成されているのだった。

だがそれが分かったとしても、厄介な点が一つ。この地下帝国への行き方だ。

東西南北に置かれた四つのボタン。地に埋め込まれた四つのボタンを、同時に押さなければならぬらしい。

そのボタンの場所はもう把握しているものの、俺一人では難しいだろう。

何処までが用心深いのか、めんどくさいことになったものだ。

唯一もう一つの方法として地上を破壊し尽くし、地下へ降りるこ

とも可能なのだが、それをしてしまえば、地下にいる人々は皆、俺の魔法と瓦礫で潰されてしまつかもしれない。

どうしたもんか、と、悩み、一つの案が浮かぶ。

空間転移、だ。

一つボタンを押し、空間転移でもう一つのボタンに移動し　と　　いうのを一瞬のうちに三回繰り返せばいい、と思ったのだ。

だが、実行してみて、やはり空間転移を使うにはコマの時間がかかってしまうことに気がついた。これは無理だろうと断念し、考え始める。

もう一つの案として、地に埋め込まれたボタンに向けて同時に魔法を放つことも思い浮かんだのだが、ボタンを壊さぬ程度の威力を保ち、尚且つ、かなり遠距離にある数センチほどのボタンを四つ同時に狙い撃つ。

それは中々に難しいことだった。

いつか成功する可能性はあるが、なんともめんどくさい。

こつこつ神経を使うことは苦手なのである。

俺はそう諦め、新たなる方法を探し始めた。

そしてそれからしばらくミレトスの中央部で安座し、思案を続けていると、俺は視界の端に高速で飛来する物体を捕らえた。妙な既視感を覚え、悪い予感がしたが、苦しくもそれは当たってしまった。

「……マジかよ」

呟き、嘆息する。わざわざ一人でミレトスを壊滅させてやるつもりで来たのに、何で来てんだよ、と。

「セル様」

さきほどまで米粒程度の大きさだったその物体は、もう俺の目の前に現れ、そして地に降り立つ。

「派手にやりましたね」

両手を前に添え、ミエルは言った。

「……あー。まあな」

何となくばつが悪くなり、俺は頭を掻きながら視線を逸らす。

「つーか、お前。なんで来てんだよ」

「それはですね。シーちゃんとユーちゃんと一緒に買い物に行った後、宿に戻ってきたら二人の男が待ち構えていたのです。その二人は私に事情を話し、セル様という方が一人でミレトスを潰しに行っていました、と。何とかそれを引き留めて欲しいと、そう言ったのですよ。ですから、ここまで来たのです」

「そうかよ」

確かに、よく考えてみれば、あの二人がミエルに事情を話さないわけがないのである。

元より、ミエルに用があったのだから。



「んで？ ミエル。俺を引き留めるのか？」

「まさか。そんなはずありません。セル様なら何の心配もいらな  
いとも思いましたが、何かの力になればどこまで来たのです」

「……そうか」

「はい。ですがそれより、もう一つの理由があります。セル様  
が」

人を殺すことのないように、です。

ミエルはそう言った。

「セル様がちょっと力を加えるだけで、人は簡単に死んでしまいま  
す。例え相手が悪かろうと、私はセル様に人殺しになって欲しくな  
いのです。セル様はセル様が思っている以上に、優しいです。とて  
も優しい方です。セル様が人を殺そうものなら、いつか絶対、その  
罪に苦しむと、そう思つのです。人間を殺してしまったら、またセ  
ル様は」

何かを言いかけ、いえ、なんでもありませんとミエルは言葉  
を濁す。

そして、

「まだ、手遅れではありませんよね？」

と、そう訊いてきた。

「……………」

昔。

どれほど昔だろうか。それともまだあまり時間は経っていないのだろうか。

俺は テオール 神人を殺したことがある。

たまたま社交性の高い子供に遊びに誘われ、めんどくさいと思いつつも一緒に遊んでいたら、いつの間にか 死んでいた。

ただのじゃれあいだったのかもしれない。

だけど俺は何かにむかつき、怒り、とっくみ合いになり……。

よく覚えては居ないが、ふと気づいたら、血を大量に流してその子供は倒れていた。

おそらくそれ以来だったのだろう。俺が本格的に恐れられ、忌み嫌われ始めたのは。

ミエルは、そのことを思い出しているのだろうか？

そのことで俺が一時期荒れたことを、思い出しているのだろうか？

「……………ああ。まだ、殺して ない」

確か俺が荒れていたときでも、ミエルだけは態度を変えなかったな、と。

それを思い出しながら、俺は応えた。

「そうですね。それは、良かったです」

ミエルは言っ、美しく、何処か可愛らしく、にこりと微笑む。  
俺はその表情を見て、心底思った。

相手が不死兵でよかった、と。

俺は自分で思っているより、自分を制御出来ていなかったのかも  
しれない。

さっきまで本気で人間を殺そうとしていたことに いや今の今  
まで、ミレトスの王を殺そうとしていたことに、ようやく気がつい  
た。

俺は自分が優しい奴だとは到底思えないが、確かに、もし人間を  
殺したら後悔はしたかもしれない。

それもまた偽善なのだろうが、なんにせよ、今回はミエルに感謝  
しなくてはならない。言葉にこそ出さないが、俺はそう思った。

「それにしても、セル様」

しんみりとしていた空気を払拭するためか、ミエルは明るい声で  
言った。

「なんだ？」

「めんどくさがり屋のセル様が、このような依頼を受けるなんて。  
セル様は本当に、シーちゃんとユーちゃんを奴隷としていたミレト  
スが許せないのですね」

「……別に、ちげえよ」

「ふふふ」

ミエルは不敵に笑い、やはりセル様は優しいです、と呟いた。感謝はしたものの、こいつが来るところなると分かっていたからあんまり来て欲しくなかったんだが……。

と、微妙にやりきれなさを感じていると、ミエルは言う。

「セル様をからかうのは今はこれぐらいにしておいて、それより、です。現在どのような状況なのでしょうか？」

「からかう、と公言しているあたり、かなり舐められている感じがするが、まあそれはいいだろう。」

「あーあれだ。ミレトスが地下帝国だということが分かったんだが、地下への行き方が厄介だな」

「厄介、と言いますと？」

「離れたところにある四つのボタンを同時に押さなきゃいけないらしい」

「そうなのですか。ですがセル様でしたら、それぐらい解錠魔法でどうとでもなったのではないのでしょうか？」

解錠魔法。

解錠魔法。

あー。解除魔法、か。

……。

ちくしょう。

正攻法でボタンを同時に押すことしか、考えてなかった……。

「もしかして、解除魔法の存在を忘れていた、とかですか？」

なぜこいつはいつも、こんなに鋭いのだろうか。

嘆息しつつ、

「いや、今からやろうと思ってた所だ」

と、見栄張って即答してやる。

だが、ふふふ、と嬉しそうに笑われてしまうあたり、こんな嘘ミエルには通用しないのだろう。

「セル様は神人<sup>テオール</sup>育成学校では最高の成績を持っていたはずなのに、本当、セル様の頭はどうなっているのでしょうか？ やはり、馬鹿なんですよね？」

「……ストレートに訊いてきたな」

はつきり言う奴だ。

「……すみません。あ、いえ、勿論セル様のごことは馬鹿だと思っ  
ていますからね？」

「そのフォローは意味分からないからな」

「いえ。意味分かるはずですよ。セル様なら、きっと分かってくれらると私は信じています」

「なんだその謎の信頼」

「つかそれより、と俺は続ける。

「話が進まねえよ。さっさとこんな国滅ぼして、奴隷解放してあいつらんとこ帰るぞ、ミエル」

「はい。そうですね」

茶々を入れることは止めたのか、ミエルはそう頷く。

それを確認すると、俺は地に手を付け、

リクレイス  
解錠。

と心の中で唱えた。

すると地中深くで複雑に入り組んでいた仕組みが一つずつ外れていき、やがて、ゴゴゴという地鳴りの後、ミレトス中央部に一つの穴があいた。

「……簡単に空きやがったよ……」

俺は嘆息しつつも、呟く。こんな簡単なことになぜ気づかなかつたのだろうか。

そう自分のアホさに辟易しながらも、その穴に掛かっていた梯子を使わず、俺たちは地下へと飛び降りた。膝を曲げて軽やかに着地すると、すぐに俺は右手側へと歩き出した。先ほどの探査魔法で、王室から牢獄までここ地下帝国のことは隅々まで知っているのである。ミエルも特に疑問を持たず俺について来ることにしたようだった。

そして、しばらく歩くと、敵兵のお出ました。

狭い通路の中、行列のように一部の隙間もなく並ぶ兵士たち。その装甲は地上で見た兵士よりさらに禍々しく、ごつごつとしている肌が見える部分など無く、全てが鋼に覆われていた。おそらくこいつらも不死兵なのだろう。

この狭い中不死兵と闘うのも馬鹿らしいので、さきほどの闇を作り出し、すぐさまそいつらを封じてやった。

ミエルに、後で傀儡から解放させて上げて下さいね、と言われたのに応えると、俺たちはなんなくもう一度足を進めた。

そうして何度か敵軍が来ては闇に飲み込み、ようやく、目の前に王宮が見えてくる。

ここにミレトスという国を動かす権力者が。

外道な人間たちが、いるのである。

無意識的に血が踊るのを感じたが、ミエルに殺してはいけませんよと釘を刺され、なんとかそれを自制する。

そして扉を、派手にぶち開けた。

赤い絨毯が長々と続き、高い天井にはシャンデリア、壁には様々な装飾が施され、なんとも無駄に豪華な部屋が、俺の目に飛び込んてくる。　　が、そこには誰もいなかった。

おそらく、俺たち侵入者が来たことが伝わり、隠れ通路から逃げ出したのだろう。俺は舌打ちをしつつも記憶にある出口を全て洗い出し、その中でこの王宮から一番近い隠れ通路に向かうことにした。

そして壁を殴って壊し、近道しながらすぐにそこへと辿り着く。

薄暗い通路。左右を石の壁で覆われ、等間隔に蝋燭のランプが置かれたこの場。

目の前には　　宝石類を身体中に纏う人間たちがいた。

支配者だというからには、強国の王だと言うからには。

さぞかし屈強で凛々しい男なのだろう、と想像していたのだが、目の前にいる人間は脂汗を垂れ流し、豚のように太っている親父だった。娘と思われる女も浅ましく太り、無駄に豪華なドレスが全く映えていない。他の人間たちも同様、強さの欠片も見えず、ただただ現れた俺に驚き、側近に向けて「は、早くあいつを倒せッ！」と、偉そうに命令しているだけだった。

唯一ましであった今まで以上に屈強な不死兵を闇に飲み込んでやると、こいつらは目を見開き、脂汗をさらに垂れ流す。目を瞑り、耳を塞いでいる奴までいた。

こいつらが。

こんな奴らが、奴隷の支配者。



シーナとユーリを生まれた時点で奴隷と定め、不死兵を操って権威を奮う。

さらには人間を商品として売りさばき、自分たちの私腹を肥やす。

こんな、奴らが。

こんな奴らがどれだけの人間を壊し、

こんな奴らにどれだけの人間が壊されたのだろうか？

それを考えるだけで、俺は歯を噛みしめずにはいらなかった。もしミエルが居なかったら、今頃血祭りだったかも知れない。

「あーお前ら。俺がここに何しに来たか、分かるか？」

「し、知らんつ。な、なんなんだお前たちはッ！ ど、ドラか？ ドラが欲しいのかッ！」

「ドラなんかいらねえよ」

「じゃあなんだッ！ な、何をしに来たんだ？」

「……ぎゃーぎゃーうるせえな。 耳障りだ」

俺はドスの込めた声で言う。

それにより騒いでいた人間たちは、ひいつ、と小さく悲鳴を上げ、口を閉ざす。必死で後ずさり、俺から離れようとしていたが、震える足がそれを阻害する。

「俺がここに来た理由は、だな」

そこまで言って言葉を溜め、そして

お前たちを、

殺しに来たんだよ。

と、出来るだけ睨みを効かせて言っただけだ。

勿論殺すつもりはない。

こいつらの怯える姿が見たかったというか、軽い気持ちで、そう言ってみただけである。

だが、それだけで。

殺気も魔法も何も使わず、相手を倒そうという意志すらないのに、その言葉だけで。

目の前にいる人間たちは唇を奮わせ、やがて、白目を剥いて失神したのだった。

そのあまりにも惨めな姿に、最早怒りすら沸いてくることはなく、ただただこの人間たちが哀れだった。こんな人間を殺そうとしていた自分が、恥ずかしくなるほどに、だ。ホント、ミエルが来てくれて良かったかもしれない。

そしてそれから、俺はなんの感情も持たず、動作的に失神した人間たちを闇に飲み込み、この場を去ることにした。

本当、動作的に、何も考えず。

いや、一つだけ。  
呆気なかったな、とだけ思いながら。

## 事後処理

その後は特に目立ったことは起きなかった。

薄暗く、奥が見えぬほどに広い牢獄にいる奴隷たちを解放し、不老石を生産する工場らしき場所で働かされていた奴隷たちも解放する。それからも色々な場所の奴隷を解放し、時間が掛かってかなりめんどくさかったのが、なんとかその全てを解放することに成功した。さらに仕事はそれだけでは終わらず、兵士の操り手を見つけ出し脅すことによつて、不死兵たちを正気に戻すこともさせた。この不死兵たちは元奴隷で、無理矢理不老石を埋め込まれたのだという。

ちゃんとした意識のある昔からの兵士は皆逃亡したらしいが、わざわざそれを追う気はなかった。

そして最後に、解放した無数の奴隷たちをどうするか、だが、俺が面倒を見る気など毛頭無いし、わざわざ俺が何かをしてやるのもめんどくさかった。だから取りあえず自由にしてやり、ミレトスの財産を適当に全員で分割するように、と俺は言ってやった。

故郷がある奴はそのドラで故郷へと帰り、帰る場所の無い奴はそれで帰る場所を作れ、と。

ドラを巡って争いが起こったら面倒だとも思ったが、その心配はなかった。俺たちがわざわざ仲裁することもなく、必要な食料を、衣類を、ドラを、皆均等に分けているようだった。

これで特にやることはなくなったのだが、私用として、一つだけ知りたいことがあった。

ユーリとシーナの、両親のことだ。

もしまだ生きてるのであれば、二人は本当の両親と暮らすのがいいだろう。

そう柄にもなく思っ、少し調べてみたのである。

その結果として、分かったこと。

いや、分からなかったことなのだろう。

二人の両親の生死は 不明だった。ずっと昔に、売り飛ばされてしまったのだという。何処で何をしてるのか、もう亡き人なのか、それすら誰にも分からないのだった。

俺はそれ以上の詮索は諦めることにした。

そんなこんなで、時間はどんどん流れ、もう日も沈みかけた夕方。

ようやく、ギゼルに帰ってきた。

とりあえず俺たちはギゼルの王宮へと向かい、闇に飲み込んでいたミレトスの権力者を全員手渡してやった。まさか俺が本当にミレトスを潰せるとは思っていなかったのか、俺の元にきた使者も王も、目が飛び出るほど驚いていた。

王は俺を賞賛すると同時に、褒美を与え、俺たちのために宴を開くと言ったが「めんどせえ」、の一言でそれを切り捨て、宿へと戻ることにしたのだった。

宴なんてただ騒がしく、めんどくさいだ。

……そう思ってしまう俺は、やはりつまらない奴なのだろう。

## エピソード

そして今現在、その宿の目の前だ。

「ミエル」

「なんででしょうか？」

「お前、シーナとユーリに、俺がミレトス潰しに行ったこと言ったか？」

「いえ。言ってません。ちょっと出かけてきますとだけ言って、宿を飛び出してしまいましたからね」

全然ちよつとだけじゃありませんでしたが、とミエルは苦笑する。

「そう、か」

俺はミエルのその言葉に少しだけ安心し、特に思い入れもない宿の扉を開ける。

刹那。

「え、えッ！？ ちょ、ちょッ見ないでッ！？」

「あ、セルにいですっ」

と、二人の声がある。

右にユーリ。

袖がないシャツを着用し、サイズが小さいのかファッションなのか、おへそは丸出し。下に履いているズボンも股で切れ、かなり短い。奴隷だった頃の傷なのか、露出した足には生傷が絶えなかったが、それでも尚その足は綺麗だった。露出度が結構高く、微妙に目のやりどころに困る服装である。俺が急に入ってきたのを見て、ユリーはあたふたと露出部分を隠そうとしていた。

そして左にシーナ。

ふわふわと膨らんだ素材をした赤い服を上半身に纏い、その下、上とお揃いでふわふわのフリルがたくさん付いた真っ赤なスカートを、履こうとしていた『所』だった。つまり、履いていない。諸に縞々のパンツが見えてしまっていた。いや、シーナのような小さい女の子のパンツを見たからなんだ、って話なのだが、さすがに俺に見られて焦るならまだしも、シーナは嬉しそうにするだけで、動揺の欠片も見せないのである。子供だから仕方がないのかもしれないが、さすがに俺を信用しすぎだろう。

なんて思っていると、

「ふふつ。セル様？　いつまで見てるのですか？　セル様が全世界公認のDMロリコンだということは承知していますが、さすがに凝視しすぎですよ？」

と、ミエルに指摘され、俺は閉め出されてしまった。

反論する暇さえ貰えなかったのだが、この二つだけは言わせて欲しい。

俺は断じて、DMロリコンなどではない、と。



そして。

俺は断じて、凝視などしていない、と。

しばらくして。

ようやく俺は中に入れて貰えた。

ユーリは露出の少ないちょっと地味な服に着替え、シーナは先ほどの服を着終えていた。

丸机の周りに置かれた四つの椅子。その内の三つをユーリたちが占拠していたので、俺は残りの一つの席に座る。右にユーリ。左にシーナである。

「……………馬鹿セル。急に入ってこないでよ」

椅子に着席した俺に向けて、少しだけ頬を膨らませながらユーリは言い放つ。

「……………無茶言うな」

「ノックぐらい、してくれればいいのに」

「……………あー。今度からそうするよ。悪かったな。つーか、あれだ。そんなに見てないから気にすんな」

「嘘。食い入るようにして見てたじゃない」

「んなわけねえだろ。俺は結構紳士だぞ」

「何言ってるの。あたしより、シーナのパンツに目がいったくせに」

「ば、馬鹿野郎」

そんなはずはない。

あるはずが、ない。

断じて ないのだ。

……………。

というか。

もし本当にそう見えていたのだとしたら、マジでやばいぞ。  
無意識だったって事だろ？

「セルには、えと、私のパンツが見たいんですか？」

ふと、そうシーナが上目遣いで訊いてきた。

…………… かなり、パンチのある質問だ。

「あーいや、別に見たくはないな。見ても、あれだ。なんとも思わない」

「…………… そう、ですか」

寂しげにシユンとするシーナ。

…………… なんて悲しそうなんだよ。その反応はかなり対応に困るぞ。

と、俺は焦りつつ、とりあえずこの話題を変えようとする。

「あーそれより、お前らいつの間になんな服買ったんだ？」

「ふふふ、セル様。話を逸らそうとしてますね？」

しかし、そうミエルに指摘されてしまう。

「……うるせえよ」

「正直、女の子二人の恥ずかしい姿を見て『ぐへへ』とにやけていたセル様には少し引いてしまいました。仕方ありませんね。たまにはセル様の味方をするのもいいかもしれませぬ。話題を逸らさせて上げましょう」

「色々言いたいことはあるが、とりあえず俺は『ぐへへ』なんてにやけてないからな」

「やはり突っ込まれてしまいましたか。そうですね。セル様のおっしゃる通り、たまには、ではありません。私はいつでもセル様の味方ですよ」

……やべえ。

話が噛み合ってねえ。

そんな自意識過剰なことツツコンでねえよ。

むしろ聞き落としてたぞ。

「あー、別にお前がいつでも味方とかは、どうでも良いんだが」

「どうでも、いいんですか？ セル様。……そう、ですか」

急に悲しげな声を出すミエル。

さすがに今のは失言だったと俺は焦るが、ぐすん、と口ではつきりと泣き真似をしている辺り、真面目に悲しんでるわけではないのだろう。

というか。

なんか話が逸れ過ぎだ。

と、そう思った直後、話を逸らすのが目的だったからいいのか、と俺は思い出す。

「それで、話を戻しますが」

「いや戻すな。このままでいい。　　つーかお前、悲しんでたのやっぱ演技かよ……」

ケロツと素に戻るミエル。

いえ、と首を振った。

「本当にシヨックでしたよ？　ですがもう慣れてしまいましたからね。セル様が亀のように鈍くひどいということとは」

「悪かったよ」

亀のようにひどい、の意味は良く分からなかったが、ぶっきらぼうに謝っておく。

ミエルは、はい、と微笑むと、機嫌が良くなってくれたのか、それで先ほどの質問ですが、と話を変えた。

「シーちゃんとユーちゃんの服、セル様が寝ている間に買ってきてしまったのです」

「あなた、起こそうと思っても中々起きてくれなかったからね。置いてっっちゃったのよ」

ミエルが説明し、ユーリが補足する。

「そうだったのか」

「はい。もしかしてセル様、一緒に買い物したかったのでしょうか？」

「いや、別にそんなことはないが」

「嘘は良くないですよ？ セル様」

「嘘じゃねえっての」

「そうですか」

「ああ」

俺はそうきつぱり応えてやると、ミエルが何かを言う前に今度はシーナが口を開いた。

「えと、セルにい。今日のお姉ちゃん凄かったんですよ？ 次々に

服を買って行って、ホントに楽しそうでした」

「そうなのか？」

「はい。そうなんです」

シーナは嬉しそうに伝える。そしてそれに同調するように、ミエルも言った。

「ふふふ、そうですね。ユーちゃん、ものすごくはしゃいでいてとっても可愛かったです」

「な、何言ってるのよ二人ともっ！ あたしは、べ、別に……普段通りだったわよ」

ユーリは納得がいかなそうに、顔を背けながら反論する。

「でも、お姉ちゃんがあんなに楽しそうにしているの、わたし初めて見たよ？ セルにいとミエルさんが何処か行っちゃった後も、ずっと買って貰った服を着回して」

「シーナ！ もうっ。余計なこと言わなくて良いのよっ」

「余計な事じゃないよう。お姉ちゃんのこと見てるだけで、わたしまで楽しかったもん」

「そ、そうなの？」

「うんっ」

シーナはえへへと笑みを浮かべ、ありがとね、お姉ちゃん、と呟いた。ユーリはシーナの笑顔が見れたことが嬉しいのか、頬緩め、もう何も言わなくなる。

なんとも、仲の良い姉妹だった。

シーナは俺とミエルに対してはまだ遠慮している節が見当たるが、ユーリと話しているときは本当に楽しそうなのだ。

ユーリに対してだけ本当の自分を出している、ということに俺は少しだけでもかきさを感じていたが、やはり、遠慮されることが嫌いなのだろう。

「ふふっ。それで二人とも、こんな時間に着替えていたのですね」

ふと、姉妹の微笑ましい姿を眺めていたミエルが言った。

「えと、そうですね、ミエルさん。ミエルさんが買ってくれたたくさんのお洋服を着て、遊んでいました。ね？ お姉ちゃん」

「そ、そうよ」

仕方なく、といった感じにユーリは呟く。

そして、少しだけ真剣な表情になりながら、

「そう だけど……あなたたちは、何処に行ってたの？」

と、突如の切り返し。

俺は咄嗟にミエルに思念を送った。

『分かっているとは思うが、ミレトスに行ったなんて言うなよ？』  
『勿論です。セル様』

瞬間的に思念を送り返してくるミエルに安心し、俺は応えた。

「あーまあ、色々あってな」

「色々？ 色々って何よ」

「まあ、色々は色々だよ」

「何？ もしかして、言いづらい所にも行ってたの？」

「……はい。実は……そうなのです。セル様の名譽のこともあって  
とっても言いづらいのですが、やはり、隠し事はいけませんよね」

ミエルはそう前置きし、申し訳なさそうに言った。

「実はなのですが。セル様が突如、『夜の町リスメント』の一角……  
娼婦街へと、行ってしまわれたのです……」

……。

「私はそれをなんとか止めようと思って追いに行ったのですが、もう、  
手遅れだったようで……」

……手遅れって、何がだ。



「しょ、娼婦街。娼婦街って あんた」

ユーリが明らかに軽蔑の視線を向けてくる。

一方シーナは、娼婦の意味が分からないようだった。

確かに。

確かにミレトスに行った、とまでは言っていないが、もっと違う言い方があっただろう……。

そう思いながら、さすがに俺は何か言ってやろうとしていると、

「ふふつ。二人とも、さすがに冗談ですよ」

と、急にミエルはおどけて見せた。

そこまでならまだ良い。

だがミエルは、間髪を入れずに言ったのだ。

……びびる、一言を。

「本当は、ミレトスに行っていたのです」

「……………あー」

……………。

……………ま……………。

……………マジかよ……………。

……………勿論です、とか言ってたくせに。

……ういっ。

……言いやがったよ。

『おいてめえ』

俺は怒気を込めながら、思念を送る。

『なんでしようか？』

悪びれることなくミエルは返答した。

無言で睨んでみるが、効果はないらしい。

『お前、なんで普通にバラしてんだよ。あまりにも簡単に言いやがるからびびったぞ』

『私、セル様を。あのセル様をびびらせることが出来たのですか？  
それは、とっても光栄ですっ』

『……………』

『……いえ。すみません。ふざけて話すときではありませんでした  
ね』

ミエルがそう思念で呟いたの同時期。

ユーリが、ミレトス……？ とその言葉が中々理解できないかの  
ように呟き、シーナがその言葉に怯え始める。楽しそうだった二人  
の表情は一変していた。

『お前、マジでなんのつもりだよ。ミエル』

『二人に、ミレトスはセル様が滅ぼしてくれたのだと教えようあげようかと思いましてね』

『それをしたら、二人はもつと俺に遠慮するようになるだろうが。俺が勝手にしたことなんだから、恩なんか感じられたくないんだよ』

『それは、セル様の気持ちでしょうか？ セル様はシーちゃんとユーちゃんの二人が、どんな気持ちでいるか考えていますか？』

『……………』

『二人はおそらく、今でもミレトスに怯えています。生まれたときから支配され続けていたのです。例え私たち二人と共にいようと、不安が拭えるはずはないのですよ。私やセル様などには分かりやうのない感情なのかもしれませんが、ミレトスの恐怖は心の傷となり、二人を蝕んでいるはずなのです。もしかしたら、二人が普通でいられるのも、普通に笑っていられるのも、私たちと共にいるからなのかもしれません。もしかしたら、一人でいるときに数日前までの境遇をはつきりと思いだし、苦しんでいたのかもしれませんが。裕福に生まれてきた私などが、想像していいものではないのでしょうか。私の想像など遙かに上回るの気持ちなのでしょう。ですが私は、そう思いますよ？ セル様』

ミエルの軽い独白。思念により伝えられたため、それは一瞬で頭に入ってきた。

二人は、今も苦しんでいるのだろうか。と、俺は考え始める。

生まれたときから奴隷と定められ、物心が付いた頃にはもう働か

される。どんな気持ちなのか、確かに俺では分からない。分かりようがない。

だが、したいこともできず、欲しいものも貰えず、ただ働かされる。

俺には想像でしか分からないが、それはそんな俺の想像を遙かに超える辛さなのだろう。

もし俺だったら、一日命令され続けるだけでブチぎれてしまう可能性すらある。

辛さの加減は本人にしか、体験した本人しか分からない。だが、辛いという決定的事実、例えば俺が考えたとしても分かり切っていることなのだった。

そういえばユーリは確か、シーナという存在がいなかったら、自分分は壊れていたかもしれないと言っていた。シーナが、ユーリ自身の自我を保ってくれた、と。

もしかしたら、今もそうなのかもしれない。

シーナの前だから笑い、シーナを不安がらせないために負の感情を押さえ込む。ユーリは今が楽しいとも言って見せたが、本当は辛いのを我慢し、強がっていただけなのかもしれない。

そしてもしそうなのだとしたら、逆も　シーナの方も姉を想い、姉を心配させまいと笑っているのだろう。

奴隷だったのだから。

ひどい扱いを受けていたのだから、人間不信にも暗い人間になってもおかしくないのに、至って普通に自我を保つ。

それはどれほどに大変で。

どれほどに、強い精神が必要なのだろうか？

俺は自問する。

が、分かるはずがなかった。いくら考えても、分かる気がしなかった。

ただ、俺だったら。

たまたま膨大な力を持って生まれただけの俺だったら。

壊れること望み、楽になる道を選んだらうと、そう思った。

「どうゆう、こと？　ねえミエル！　み、ミレトスに何しに行つたの？」

ようやくミレトスという単語を理解したユーリは、血相を変えながら立ち上がり、問い詰める。シーナは椅子に座りながら、血の気を失い始めていた。

俺は二人に遠慮されたくないから、と。

恩を感じられたくないから、と。ただそれだけの理由で、何も話さずにいようとした。

だがそれはミエルの言う通り、俺の気持ちであり、ただの自分本位なのだろう。

この二人を見れば分かる。

たった一言。

ミレトスと聞いただけで、ここまで変わってしまう。

ふっきているはずがなかった。　　恐れていないはずが、なかった。

簡単なことなのだ。

ミレトスが滅亡したと知れば、二人はもう恐れる心配も必要も無くなる。

それだけのこと。本当に、ただそれだけのこと。

だが俺には、そのことすら気づけなかった。

「ね、ねえッ！ ミエル？ セル？ 何か言ってよ！」

黙り込む俺たちに向け、ユーリは我を忘れてきつく声を張り上げる。

だがそれでもミエルが黙り込んでいるところを見ると『セル様から言っただけ』という暗示なのだろう。できるならミエルに言うて欲しかったのだが、俺は重い口を開くことにした。

「あー、俺たちは、だな」

ミレトスを滅ぼしてきた、と。  
なるべく感情を込めず、淡々と告げた。

ユーリは目を見開き、青白くなりつつあったシーナの顔にも、驚愕の表情が映し出される。

「……………え？ ……………え……………。滅ぼした、って。……………あの、ミレトスを？」

「ああ」

俺がミレトスに行ったとなれば、薄々それに感じている可能性もあつたのだが、全く頭にはなかつたらしい。

「で、でも え？ 二人で？」

「まあな」

「私はほとんど何もしていないのですけどね」

「う、嘘よ。からかってるんでしょ？ ミレトスが 滅びるはずないもん」

いくら俺の強さと知ったとしても。ミエルの強さを知ったとしても。

二人がミレトスに与えられた恐怖は強大なだろう。幼き頃から圧倒的な存在であつたミレトスは、いつしか恐怖の代名詞となり、無くなることのない普遍的なものとなっていたのかもしれない。

「…………馬鹿野郎。さすがに、こんなことだからかうほど無神経じゃねえよ」

「…………でも、そんな…………いきなり、信じられないわよ」

「まあ、確かにそうかもな。じゃあ」

俺はユーリに手をかざし、精神干渉系魔法を掛ける。それによって俺の見たものが映像となり、ユーリの頭に伝わった。中々言葉を発しないシーナにも手をかざし、同じ事をする。今頃、俺がミレトスの城壁を破壊し、不死兵を飲み込み、王を倒して奴隷を解放したところが見えている頃だろう。

「い、今のは？」

「俺の記憶の一部だ」

「…………記憶の、一部」

「ああ。これで、信じてくれたか？」

「……………」

ユーリは応えない。シーナも、変わらず黙ったままだった。

「お前は　お前とシーナは、ミレトスが世界で一番強いと思っ  
ているのかもしれないが、実際はそんなものだ。今見た通り、本当は  
大したことないんだよ」



「……そう、なの？ ホントにホントに、そうなの？」

「ああ。ミレトスはもう滅びたし、あいつらは 弱い」

「……そう、なの」

「ああ」

「そう、なんだ。考えたこともなかったな。ミレトスが弱いなんて……あたしたちは怯え続けて。だけど一回だけ立ち向かって、もっと怖くなって。あんなに あんなに怖かったのに……そんな、簡単に……」

支離滅裂に言葉を紡ぎながら、ユーリはいきなり涙を零す。それを必死で拭おうとするが、あふれる涙が止まることはなかった。

「……あ、あれ？ なんでだろ。ミレトスが滅びて、嬉しいはずなのに……笑ってやりたいくらいなのに……なんで……？」

止まらない涙はこぼれ落ち、木の床に染みる。

その姿を見て、やがてシーナも感情を抑えきれなくなったようだった。

「お姉ちゃんっ」

と、立ち上がり、俺を通り越してユーリに抱きつく。

「シーナ。あたしたち あたしたち、ね。もうミレトスに怯えなくても、いいんだって」

胸に顔を埋めるシーナを全身で包み込み、ユーリは言った。

「……………うん」

「あたしね。ホントは怖かった。シーナを守るうって頑張ってたけど、ホントはずっと……………怖かったの。……………セルがいても、ミエルがいても　ずっと、怖かった」

ユーリはシーナを強く抱きしめ、自分の弱さをさらけ出す。

「……………うん。お姉ちゃん、頑張ってた。無理も　してた」

「……………そう。ばれちゃってたんだ……………。あたしって、ホントに弱い姉だったんだね」

「そ、そんなこと。　そんなことないよっ、お姉ちゃん」

シーナは眩き、さらに強くユーリの胸に顔を埋める。そしてくぐもった声で続けた。

「お姉ちゃんは優しくして強くて、いっつもわたしの自慢だったもん」

「……………」

「いつだってわたしの味方をしてくれるお姉ちゃんが、大好きだもん」

「……………シーナ」

ユーリはその名を呼び、自分の胸に埋められた頭を撫でる。

そして、あたしも大好きだよ、と小さく呟き、もう一度大粒の涙を流し始めた。

今まで閉じ込めていた分だけ。

無理をして、シーナを守ろうと気を張っていただけ。

今になって感情が暴発しているのかもしれない。

ミレトスが滅びたことで閉じ込めていた全てが緩み、色々と箍が外れたのかもしれない。

普段のユーリからは考えられないほどに、涙を零し続けていた。

そしてシーナは小さい体でそれを受け止め、一緒になって泣いていた。

俺とミエルが間に入り込む隙など微塵も感じられず、二人の繋がりが計り知れないものであると、改めて思い知る光景だった。

そしてどれぐらい泣き続けただろうか。

やがて、ユーリは我に返る。

シーナの髪に埋めていた顔を上げ、こちらを向いた。

表情は、俺の知る強気なユーリに戻っていた。ひとしきり泣ききったことにより、色々と清算し、吹っ切れたのかもしれない。

「……ねえ。セル」

「なんだ？」

「……何回目になるか分からないけど、ホント、ありがと、ね」

「あー」

俺が勝手にやったことなのだから礼はいらない、とでも言おうと思ったのだが、昨日ユーリが何度でも礼は言い続ける、と言ったことを思い出し、それをやめた。感謝されるのはむずがゆいが、嫌いではないのだ。

「あんたって、そ、その 見かけによらずというか、意外とというか その。 や、やっぱなんでもない」

何かを言いかけて止めたユーリに、目を赤く腫らしていたシーナは堪えられなくなり、くすっ、と笑う。

「お姉ちゃん、意地っ張りだよ。セルにいのこと、優しいって思っただよね？」

「ち、違うわよ！ 何いってんの！ こんなロリコン、優しいわけないじゃない！」

必死で声を張り上げてみせるが、ユーリも目を赤く腫らしているので、威厳というか 言葉に威力がなかった。

が、言葉自体がかなり心外なのは事実である。

優しいわけない、ってのはまあ別にいいんだが、

「俺はロリコンじゃねえっての」

一応そう訂正しておく。

ユーリはどうも俺をロリコンだと勘違いしているらしいが、そんなはずはないのだ。

また何かユーリに反論されても面倒なので、そうなる前に「っーか、あれだ、二人とも」、と話を切り替える。

「何？」

「何ですか？ セルにいい」

「何でしょうか。セル様？」

「いや、普通に考えてミエルは入ってないんだが……まあ、いいかなんつーか、さ。大丈夫だとは思うが、これを機に」

「遠慮はするな、でしょ？」

「えと、嫌いなんでしたよね。セルにいい」

「遠慮するのも、されるのも、ですよ。ふふふ。めんどくさがり屋のセル様には、ぴったりの言葉です」

俺が言おうとしていたことを、次々と三人に言われる。

微妙なやりきれなさを感じると共に、俺の考えなど読まれている感じがして格好が付かなかった。

「あー。まあ、そういうことだ」

俺は頭をぱりぱりと搔きつつ、そう呟いた。

「大丈夫よ。セル。あんたには感謝し続けるつもりだけど。いつか絶対、恩は返すつもりだけど。遠慮だけは、しないから。嫌いなんでしょ？ だったらしないわ。返せるところから、少しずつ恩を返していかないかね」

「わたしも、セルにいが嫌いなことはしないです。したく、ないです。……えと、たくさん迷惑掛けちゃうかもしれないですけど、これからも、お願いしますね。セルにい」

「ふふふ。セル様。私も、遠慮はしませんよ？ 絶対に絶対に絶対に絶対に、遠慮はしません。安心して下さいね？」

ミエルには遠慮される理由などないし、逆に少し遠慮というものを覚えて欲しい気もした。

だが、ミエルにいきなり遠慮などされても、気持ち悪いだけなのかもしれない。

何事も恒常。なんだかんだ、変わらないことが楽なのである。

そんなことを思いつつ、この三人と過ごす未来を想像し　そして、一人勝手にげんなりする。だが、それと同時に、不思議な気持ち。初めての、感情。何を期待しているのか、妙な高揚感を感じていた。

めんどくさいかもしれないが、退屈はしないだろう、と。

そう思ったのだった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7443t/>

---

神人セルの放浪記

2011年7月1日00時51分発行